

久宝寺南

(その2)

— 久宝寺・加美遺跡の調査 —

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

— 本 文 編 —



大阪府教育委員会
財団法人 大阪文化財センター

久宝寺南

(その2)

— 久宝寺・加美遺跡の調査 —

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

— 本文編 —



大阪府教育委員会
財団法人 大阪文化財センター

大定寺南

(子の5)

大定寺の歴史と現在

大定寺の歴史と現在
大定寺の歴史と現在

大定寺



大定寺の歴史と現在

大定寺の歴史と現在

H・I・Fトレンチ第4遺構面c



H・Iトレンチ第4遺構面c全景
(北上)



Fトレンチ第4遺構面c(北)
第1・2号周溝跡



(←南)



(←東)



(←北)



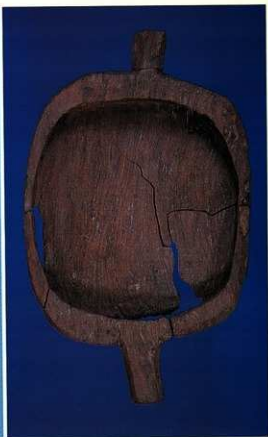
(←東)



Iトレンチ 溝SD46 船材出土状況



I3 グリッド 河道301上層下 W-86



Iトレンチ 溝SD45上層 W-1

序 文

「久宝寺」の地名由来については、聖徳太子建立と伝えられる久宝寺の寺名によると言われているが、古文献等によると室町時代が初見で、当初は、一向衆徒の寺内町として栄えたことが窺われる。そして、戦国期の寺内町時代から商業も盛んとなり、江戸時代には幕府領となり、村高 1990石余、家数 約80軒、人数 約3000人にも達し、特に、久宝寺木綿が有名であったが、その他、多業種の商家が軒を列ねていたことが知られている。

久宝寺遺跡は、その「久宝寺」寺内町域から西へ約0.5 km離れた位置に当たるため、当時は、むしろ生産基盤の中心となった田畑地域に相当することが判明したが、更に下層の古代国家形成期では、西接するあの巨大方形周溝墓や銅製品等の出土で有名な加美遺跡と共に重要な役割を果たしたと推測される「ムラ」の跡の貴重な発見が相次いでいる。

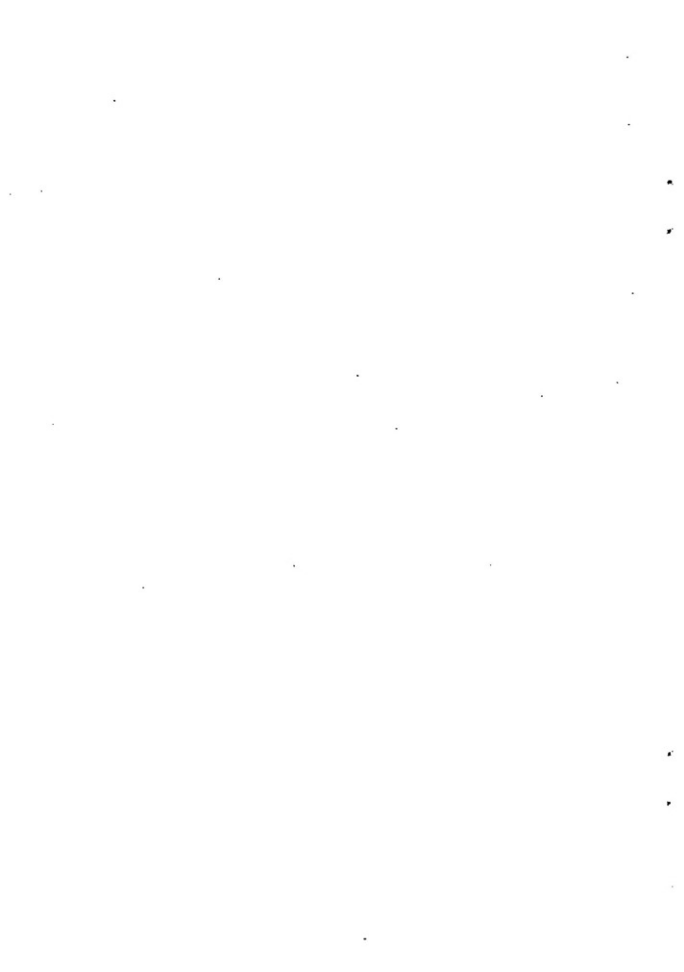
久宝寺南遺跡は、その久宝寺遺跡が余りにも長大に過ぎるため便宜的に南北に二分割したもので、今回の調査の結果、やはり古代国家形成期の河内平野の環境を彷彿とさせる準構造船や多種多様な木製品、良好な古式土師器一括資料の出土によって、専門家だけでなく、一般府民多数の方々の衆目を集める等、多大の成果を得ることが出来た。

これらは偏に、日本道路公団大阪建設局、財団法人大阪文化財センターはじめ調査関係各位並びに多数の方々のご協力、ご援助の賜物と深く感謝すると共に、今後とも温かいご支援を賜わるよう切望してやまない。

昭和62年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 吉 房 康 幸



序 文

河内平野の低湿地に分布する遺跡群は、地表下約4～5mもの深さにまで遺構面が存在する。このような地中深く埋没した遺跡は、従来の遺跡探査方法である地表観察を主とした分布調査では発見が困難である。遺跡の発見は、河川改修等で工事による掘削が地中深く及んだ時に、その廃土中に遺物が含まれることが端緒となる場合が多い。

近畿自動車道天理～吹田線関連の遺跡調査においても、当初から遺構面の深い遺跡として認識されていたのは、瓜生堂、山賀、亀井等を主なものとして、数はそれほど多くなかった。それが、調査の進展とともに、地表近くの新しい時代の遺構面のみが知られていた遺跡においても、さらに下層に遺構面が存在することが明らかとなり、遺跡の範囲が縦横に大きく拡大した。最終的には最北の新家遺跡より長原台地の縁辺部に位置する城山遺跡まで、ほとんど途切れることなく弥生時代前～中期、時には縄文時代後～晩期の遺構面が検出されている。しかも、単に最終遺構面が深いというだけでなく、その間に多くの遺構面が存在し、層的に分離が可能であった。今回の発掘調査は、こうした低湿地を延長10km近くにもわたって調査したという点で、日本発掘史上に残る画期的なものであり、従来、必ずしも明瞭ではなかった低湿地遺跡の実態解明に大いに寄与するものと自負している。

本書に報告する久宝寺遺跡は、近畿自動車道天理～吹田線関連の15遺跡の中でも全長1.5kmと屈指の規模を有している。久宝寺遺跡も、当初は弥生時代後期以降の遺跡として認識されており、調査深度もG L-1.2～2.2mまでとなっていた。それが、弥生時代中期、前期遺構面のみならず、最終的には土器を多量に含む縄文時代の河川まで検出され、調査した最深部がG L-6mにも及んだ。検出された遺構、遺物も膨大であり、ほとんど各時代を網羅している。また、遺構、遺物の種類も多岐に及び、数多くの貴重な資料が得られた。特に、古墳時代前期の準構造船の出土等は、印象深いものであった。

本書は、遺跡範囲が長大なため、5つに分割した久宝寺遺跡の調査区のうち最も南に位置する南地区(その2)の概要報告書である。この調査区は、久宝寺遺跡の中でも、特に遺構、遺物の密集する地域であり、調査関係者に多くの労苦を強いた。また、大阪府教育委員会、日本道路公団を始めとする関係各機関、諸先生、並びに多数の方々のご協力、御援助を頂いた。ここに感謝の意を表すると共に、今後とも当センターのために温かい御支援を賜るよう切望して止まない。

昭和62年3月

財団法人 大阪文化財センター

理事長 坪井清足



例 言

1. 本書は日本道路公団が建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査のうち、八尾市神武町他に所在する久宝寺遺跡の埋蔵文化財発掘調査の南地区その2における概要報告書である。
2. 本調査は、大阪府教育委員会及び(財)大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施したものである。
3. 本調査に要した費用427,399,000円は、すべて日本道路公団が負担した。
4. 本調査は昭和57年7月5日から昭和60年6月30日までの間実施した。
5. 整理業務は、遺構図面や写真資料の整理、出土遺物の洗浄、登録を中心として実施し、その他の遺物整理業務に関して、本概要に必要な最少限にとどめた。それらに要した期間は現地調査と併行、及び昭和60年5月1日から6月30日までの2ヶ月間に実施した。
6. 本調査にあたっては、大阪府教育委員会の指導の下、(財)大阪文化財センターが実施したものである。実施は赤木克祝、一瀬和夫を担当者とし、(財)大阪文化財センター職員全員がこれにあたった。

現地調査 中西靖人、尾谷雅彦(現・河内長野市教育委員会)、寺川史郎、金光正裕、今村道雄、奥 和之、竹原伸次。

遺物整理 陣内陽子、大東康宏、竹原伸次。

写真撮影 平井貞子、立花正治、片山彰一。

自然遺物保存関係 山口誠治。他

また、調査に際して日本道路公団大阪工事事務所、大阪府八尾土木事務所、平野警察署及び八尾警察署等の諸関係機関の配慮を受けると共に、下記の学生諸氏、諸嬢の参加があった。

内山純一、岸田正志、中田諭志、川本新一郎、佐々木務、伊藤裕偉、蔵本晋司、旗手裕之、内山敦司、平工夏子、杉村知香、谷口喜美代、田出憲子、平工次子、乾 靖子、井田和代、池田恭子、卯野佳代、佐々木真弓、那須明恵、寺野清美、瀬川真子、荒木智子、坂井実由紀、安江かおる、荒木令子、吉岡直子、中村麻美、松下矢恵、村上まり、安田訓子、山本三千代、田口美紀、吉田温美、堂本久美、高橋優子、阿波ゆかり、稲地智子、寺前陽代、阿南辰秀、館 邦典、川村和子、坂下文孝、伊藤慎司、今西浩子、梅原久実、古谷みゆき、伊藤雅文。

なお、泉佐野市教育委員会 鈴木陽一氏には多大なる御指導と御協力をいただいた。

7. 本書の遺構実測図の座標は、国土座標軸を準用した。また、標高はT.P.(東京湾標準潮位)による。
8. 本書に記載した遺構番号及び標記は、現地調査の際のものを踏襲した。また、遺物は整理作業番号を観察表末尾に記した。

9. 本書の作成にあたっては、起稿を赤木克視、一瀬和夫が分担した他、竹原伸次、パリノ・サー
ヴェイ株式会社、山田 治・小橋川 明、島地 謙、井上 巖、奥田 尚の各団体、各氏にお
願いした。整図、編集は一瀬が行った。なお、石器の製図のみ竹原による。

久宝寺南 (その2)

— 久宝寺・加美遺跡の調査 —

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

本文目次

第I章 調査に至る経過	赤木克視	1
第II章 調査の方法	赤木克視	3
第1節 調査の方法		3
第2節 調査区の設定		5
第III章 調査の成果 一 検出遺構	一瀬和夫	7
第1節 基本層序と遺構面の概略		7
第2節 各区の土層		16
第3節 縄文時代		19
第4節 弥生時代前期		22
第5節 弥生時代中期		32
第6節 弥生時代後期		71
第7節 弥生時代後期、古墳時代		93
第8節 奈良・平安時代		191
第9節 近世以降		214
第IV章 調査の成果 一 出土遺物		235
第1節 玉及び金属器	一瀬和夫	235
第2節 石器類	竹原伸次	236
第3節 木器類	一瀬和夫	243
第4節 土器類	一瀬和夫	288
第5節 瓦類	一瀬和夫	554
第V章 調査試料の分析・鑑定		559
第1節 分析・鑑定内容	一瀬和夫	559
第2節 花粉分析、珪藻分析	バリノ・サーヴェイ株式会社	560
第3節 液体シンチレーション ¹⁴ C年代測定	山田 治・小橋川 明	574
第4節 出土船材並びに杭材の樹種	島地 謙	577

第5節 土器胎土分析結果	井上 巖	580
第6節 土器胎土の砂礫観察	奥田 尚	601
第VI章 まとめ	一瀬和夫	613

挿 図 目 次

fig. 1 遺跡位置図	2
fig. 2 調査区位置図 (大区画設定図)	4
fig. 3 調査区設定図	5
fig. 4 小区画設定図	6
fig. 5 南北土質図 (1) (E・Fトレンチ)	9
fig. 6 南北土色図 (1) (E・Fトレンチ)	10
fig. 7 南北土質図 (2) (Hトレンチ)	11
fig. 8 南北土色図 (2) (Hトレンチ)	12
fig. 9 南北土質図 (3) (I・Jトレンチ)	13
fig. 10 南北土色図 (3) (I・Jトレンチ)	14
fig. 11 Hトレンチ d5 土層断面図	17
fig. 12 I 3グリッド南壁 土層断面図	17
fig. 13 I 4グリッド南壁 土層断面図	18
fig. 14 第8遺構面 平面図	19
fig. 15 E 1グリッド第8遺構面 河道10下層平面図	20
fig. 16 I 1グリッド第8遺構面 足跡検出状況図	20
fig. 17 I 2グリッド第8遺構面 足跡等検出状況図	21
fig. 18 E区第7遺構面 a 平面図	23
fig. 19 F区第7遺構面 a・b 平面図	24
fig. 20 H区第7遺構面 a 平面図	25
fig. 21 J区第7遺構面 b 平面図	26
fig. 22 J区第7遺構面 a 平面図	26
fig. 23 I 1・I 2グリッド第7遺構面 a 前期河道平面図	28
fig. 24 I 1グリッド第7遺構面 a シガラミ111~113検出状況図	29
fig. 25 I 2グリッド第7遺構面 a シガラミ205及び前期河道下層平面、土層断面図	30
fig. 26 E区第6遺構面 c下及びc上 (E 1グリッド) 平面図	33
fig. 27 E区第6遺構面 b 平面図	34
fig. 28 Eトレンチ、E 1グリッド第6遺構面 c 河道10土層断面図	35

fig.29	F区第6遺構面 a	平面図	37
fig.30	H区第6遺構面 b	平面図	39
fig.31	H区第6遺構面 b	溝及び畦畔土層断面図	40
fig.32	Hトレンチ第6遺構面 b	溝S D98上層土器出土状況図	41
fig.33	H5グリッド第6遺構面 b	上部、下部方形周溝基平面図	44
fig.34	H5グリッド第6遺構面 b	方形周溝基南北及び東西土層断面図	45
fig.35	H5グリッド第6遺構面 b下	下部方形周溝基主体部平面、土層断面図	46
fig.36	H5グリッド第6遺構面 b上	上部方形周溝基主体部平面、土層断面図	46
fig.37	H5グリッド第6遺構面 a下	周溝S D530土層断面 及び下層土器出土状況図 (sec.B)	47
fig.38	H5グリッド第6遺構面 b上	方形周溝基周溝 S D531土層断面図 (sec.A上)	47
fig.39	H5グリッド第6遺構面 b上	方形周溝基陸橋部、周溝部土層断面図	48
fig.40	Hトレンチ第6遺構面 a下	平面図	49
fig.41	H区南端第6遺構面 a	大畦畔平面図	50
fig.42	H区第6遺構面 a	平面図	51
fig.43	I区第6遺構面 d	シガラミ群平面図	52
fig.44	I区第6遺構面 d	シガラミ関係土層断面図 (I1・2・4グリッド)	53
fig.45	I区第6遺構面 d	シガラミ205平面、立面図	54
fig.46	I区第6遺構面 d	シガラミ1、2及び402平面、立面図	55
fig.47	I区第6遺構面 d	シガラミ3、4、6、7、 103、110、111、112、115平面、立面図	56
fig.48	I3グリッド第6遺構面 d	シガラミ1及びビット群平面図	57
fig.49	Iトレンチ第6遺構面 d上	河道10第5流中層土器出土状況図	60
fig.50	I区第6遺構面 d上	平面図	61
fig.51	I区第6遺構面 c	平面図	62
fig.52	I1グリッド第6遺構面 c	溝S D116遺物出土状況図	63
fig.53	I1グリッド第6遺構面 c	溝S D117木器出土状況図	64
fig.54	I区第6遺構面 b	平面図	65
fig.55	I3~4グリッド第6遺構面 a~d	平面図及び等高線図	66
fig.56	J区第6遺構面 c	平面図	68
fig.57	J区第6遺構面 b	平面図	69
fig.58	Jトレンチ第6遺構面 b	足跡検出状況図	70
fig.59	E区第5遺構面 b	平面図	73

fig.60	E区第5遺構面 b 河道平面図	74
fig.61	Eトレンチ第5遺構面 b 上 落ち込み S-S K30土器出土状況図	74
fig.62	Eトレンチ南端第5遺構面 d シガラミ検出状況図	75
fig.63	E区南半、F区第5遺構面 d 平面図	77
fig.64	E区南半(c)、F区第5遺構面 b 平面図	78
fig.65	F2グリッド第5遺構面 b 土壌墓 S K202平面、土層断面図	79
fig.66	F2グリッド第5遺構面 b 溝 S D209土器出土状況図	80
fig.67	E区南半、F区第5遺構面 a 平面図	81
fig.68	H区第5遺構面 b 平面図	82
fig.69	H区北半第5遺構面 a 下 平面図	82
fig.70	Hトレンチ第5遺構面 a 溝 S D80最下層 シガラミ平面、立面、土層断面図	84
fig.71	Hトレンチ第5遺構面 a 土壌 S K70 及び溝 S D80下層 I 土器出土状況図	85
fig.72	H区第5遺構面 a 平面図	87
fig.73	I区第5遺構面 b 平面図	88
fig.74	I区第5遺構面 a 平面図	88
fig.75	J区第5遺構面 c 河道平面図	90
fig.76	Jトレンチ第5遺構面 c 上 畦畔状遺構平面図	91
fig.77	J区第5遺構面 a・b 平面図	92
fig.78	Eトレンチ第4遺構面 c 溝 S D61土器出土状況図	93
fig.79	E4グリッド第4遺構面 b 溝 S D459下層遺物出土状況図	94
fig.80	E区第4遺構面 b・c 平面図及び横断面図	95
fig.81	E区第4遺構面 a 平面図	96
fig.82	Eトレンチ第4遺構面 b 円形落ち込み S X13土器出土状況図	97
fig.83	Eトレンチ第4遺構面 a 円形落ち込み S X12平面、土層断面図	98
fig.84	Eトレンチ第4遺構面 a 円形落ち込み S X12内土器棺他出土状況図	99
fig.85	F2グリッド第4遺構面 c 溝 S D206上層土器出土状況、土層断面図	102
fig.86	F区第4遺構面 c・d 平面図	103
fig.87	F区第4遺構面 周溝基群平面図	104
fig.88	Fトレンチ第4遺構面 c 第1号墓平面図	105
fig.89	F区第4遺構面 第1、3、4号墓土層断面図	106
fig.90	Fトレンチ第4遺構面 c 第1号墓第1主体平面、土層断面図	107
fig.91	F3グリッド第4遺構面 b 第3号墓平面図	109

fig.92	F3グリッド第4遺構面b	第3号墓主体部平面、断面図	110
fig.93	F2グリッド第4遺構面a	第4号墓平面図	111
fig.94	F2グリッド第4遺構面a	第4号墓 墓墳及び木棺	112
fig.95	Fトレンチ第4遺構面a	第4号墓西側周溝S D58遺物出土状況図	113
fig.96	F区第4遺構面b	平面図	115
fig.97	F区第4遺構面a	平面図	116
fig.98	F区第4遺構面b	溝S D52・152土器出土状況、土層断面図	117
fig.99	F区第4遺構面b下	溝S D52・252土器出土状況図	118
fig.100	Fトレンチ第4遺構面a	土壌SK37土器出土状況図	119
fig.101	Fトレンチ第4遺構面a	土器群1及び2出土状況図	120
fig.102	Fトレンチ第4遺構面a	土器群4出土状況図	121
fig.103	Fトレンチ拡張区第4遺構面a	土器出土状況図	122
fig.104	H・I区第4遺構面c	平面図	124
fig.105	Hトレンチ第4遺構面d下	掘立柱集中区平面、断面図	125
fig.106	Hトレンチ第4遺構面d	土壌SK49土器出土状況、土層断面図	126
fig.107	Hトレンチ第4遺構面d	土壌SK61(SX10)平面図	127
fig.108	Hトレンチ第4遺構面c	溝S D70平面、土層断面図	129
fig.109	H2グリッド第4遺構面c	溝S D251(左)下層、 溝S D205(右)最下層遺物出土状況図	130
fig.110	H2グリッド第4遺構面c	溝S D251土器出土状況図	131
fig.111	Hトレンチ第4遺構面b下2	溝S D52(S D51)遺物出土状況図	132
fig.112	Hトレンチ第4遺構面b	溝S D51下層土器出土状況図	133
fig.113	Hトレンチ第4遺構面c	溝S D60最下層遺物出土状況図及び各遺構断面図	134
fig.114	Hトレンチ第4遺構面b下2	溝S D60下層遺物出土状況図	135
fig.115	H2グリッド第4遺構面b	溝S D260下層遺物出土状況図	136
fig.116	H区第4遺構面b	溝S D60・260最上層・上層及び最下層遺物出土状況図	137
fig.117	Hトレンチ第4遺構面b	溝S D60上層遺物出土状況図	138
fig.118	Hトレンチ第4遺構面b	溝S D42下層土器出土状況図	138
fig.119	Hトレンチ第4遺構面c	溝S D42下層(落ち込みSX46)土器出土状況図	138
fig.120	Hトレンチ第4遺構面a	溝S D42土器出土状況図	139
fig.121	Hトレンチ第4遺構面b・c	溝群切り合い関係土層断面図	140
fig.122	Hトレンチ第4遺構面c	溝S D66(SK47)等土器出土状況図	141
fig.123	Hトレンチ第4遺構面c	土壌SK63、溝S D42土器出土状況図	142

fig.124 Hトレンチ第4遺構面 c	土壌 S K45、 S K46、S K47、pit 403土器出土状況図	143
fig.125 Hトレンチ第4遺構面 c	土壌 S K38土器出土状況図	144
fig.126 Hトレンチ第4遺構面 c	土壌 S K32遺物出土状況、土層断面図	144
fig.127 Hトレンチ第4遺構面 c	土壌 S K31平面、土層断面図	145
fig.128 Hトレンチ第4遺構面 b	土壌 S K30土器出土状況図	145
fig.129 Hトレンチ第4遺構面 b	土壌 S-S X01土器出土状況図	146
fig.130 Hトレンチ第4遺構面 b	土壌 S-S K10、S-S K11平面、断面図	146
fig.131 Hトレンチ第4遺構面 c	住居址 S B20平面、土層断面図	147
fig.132 H 6 グリッド第4遺構面 c	井戸 S E601平面、土層断面図	148
fig.133 H 3 グリッド第4遺構面 c	土壌 S K306、落ち込み S X306遺物出土状況図	149
fig.134 H 4 グリッド第4遺構面 b	土壌 S K402土器出土状況図	150
fig.135 Hトレンチ第4遺構面 b 下	井戸 S K60遺物出土状況図	150
fig.136 Hトレンチ第4遺構面 a	土壌 S K15、18土器出土状況図	151
fig.137 Hトレンチ第4遺構面 a	土壌 S K07平面図	151
fig.138 H 3 グリッド第4遺構面 a	平面、土層断面図	152
fig.139 H 3 グリッド第4遺構面 a 上	焼土壌 S K302土器出土状況、土層断面図	153
fig.140 H 3 グリッド第4遺構面 a	焼土壌 S K303土器出土状況、土層断面図	154
fig.141 H 5 グリッド第4遺構面 a	溝 S D512遺物出土状況図	155
fig.142 H区第4遺構面 a・b及び第4遺構面 b 下	平面図	156
fig.143 Hトレンチ第4遺構面 b	土壌 S-S K10 土壌 S-S X01土層断面図	156
fig.144 I 区第4遺構面 c	溝 S D45東壁及び S D245遺物出土状況図	160
fig.145 I 区第4遺構面 c	溝 S D45・145遺物出土状況図	161
fig.146 I トレンチ第4遺構面 c	船材出土状況等高線図	162
fig.147 I トレンチ第4遺構面 c	船材出土状況図	163
fig.148 I トレンチ第4遺構面 c	溝 S D45平面、土層断面図	164
fig.149 I 1 グリッド第4遺構面 c 上	溝 S D111土器出土状況図	166
fig.150 I トレンチ第4遺構面 c	土壌 S K32最下層遺物出土状況、土層断面図	167
fig.151 I トレンチ第4遺構面 c	住居址 S B02平面、土層断面図	168
fig.152 I トレンチ第4遺構面 c	掘立柱建物平面、掘り方土層断面図	169
fig.153 I トレンチ第4遺構面 b	住居址 S X20平面、土器出土状況図	170
fig.154 I トレンチ第4遺構面 b	住居址 S B01平面、土層断面図	171
fig.155 I 1 グリッド第4遺構面 b 下	溝 S D120下北岸土器出土状況図	172
fig.156 I トレンチ第4遺構面 b	溝 S D20土器出土状況図	173

fig.157	I トレンチ拡張区第4遺構面b下 溝SD20土器出土状況図	174
fig.158	I トレンチ第4遺構面b 土壌SK42、43土器出土状況図	175
fig.159	I トレンチ第4遺構面b 土壌SK34平面、土層断面図	176
fig.160	I トレンチ第4遺構面c 河道I最下層護岸矢板シガラミ平面、立面図	176
fig.161	I 3グリッド第4遺構面c 河道301遺物出土状況図	177
fig.162	I 区第4遺構面c 河道I上層他遺物出土状況図	178
fig.163	I 区第4遺構面a・b 平面図	178
fig.164	I 3グリッド第4遺構面a下 溝SD301下層シガラミ材出土状況図	180
fig.165	I 4グリッド第4遺構面a 落ち込みSX401木材出土状況図	181
fig.166	J 区第4遺構面d 平面図	182
fig.167	J 1グリッド第4遺構面d 溝SD116土器出土状況図	183
fig.168	J 区第4遺構面c 平面図	185
fig.169	J トレンチ第4遺構面c 土壌SX01遺物出土状況、土層断面図	186
fig.170	J 1グリッド第4遺構面c 井戸SE101、土壌SK104土器出土状況図	187
fig.171	J 2グリッド第4遺構面c 土壌SK212土器出土状況図	188
fig.172	J 区第4遺構面b 平面図	189
fig.173	J 区第4遺構面a 平面図	190
fig.174	E トレンチ第3遺構面d 曲物井戸SE03平面、立面図	192
fig.175	E 区第3遺構面c・d 平面図	193
fig.176	E 区第3遺構面b 平面図	194
fig.177	E 1グリッド第3遺構面c 礎板転用材 及び土器、第4遺構面a 溝SD157土器出土状況図	195
fig.178	E 区第3遺構面a、F 区第3遺構面a・b、 F 3グリッド第3遺構面a下 平面図	197
fig.179	E・F 区第3遺構面 掘立柱平面図	198
fig.180	E トレンチ第3遺構面 pit60土器出土状況図	200
fig.181	E 1グリッド第3遺構面a・b 掘立柱土層断面図	201
fig.182	F トレンチ第3遺構面a 井戸SE02平面、土層断面図	202
fig.183	F 3グリッド第3遺構面a下 溝SD311最下層下遺物出土状況、土層断面図	203
fig.184	H 区第3遺構面b 平面図	205
fig.185	H 区第3遺構面a及び第2遺構面d 平面図	206
fig.186	H 区南半、I 区第3遺構面a・b 平面図	207
fig.187	H 区第3遺構面 掘立柱平面図	208
fig.188	H トレンチ第3遺構面 pit129土器出土状況図	211

fig.189	J区第3遺構面b下 平面図	212
fig.190	E区第2遺構面b・c 平面図	215
fig.191	E区第2遺構面a 平面図	216
fig.192	Eトレンチ第2遺構面a 井戸SE01平面、立面図	217
fig.193	Eトレンチ第2遺構面 井戸SE02平面、立面図	218
fig.194	F区第2遺構面d 平面図	220
fig.195	F区第2遺構面c 平面図	221
fig.196	F区第2遺構面b 平面図	222
fig.197	F区第2遺構面a 平面図	223
fig.198	Fトレンチ第2遺構面c 井戸SE01平面、断面図	224
fig.199	F1グリッド第2遺構面a 井戸SE101平面、立面図	225
fig.200	H区第2遺構面b 平面図	227
fig.201	I区第2遺構面d 平面図	228
fig.202	I区第2遺構面a 平面図	228
fig.203	Hトレンチ第2遺構面d 井戸SE01土層断面図	229
fig.204	Iトレンチ第2遺構面 井戸SE01平面、立面図	229
fig.205	Iトレンチ第2遺構面a 井戸SE02平面、断面図	230
fig.206	Iトレンチ第2遺構面 井戸SE03平面、立面図	231
fig.207	Iトレンチ第2遺構面 井戸SE04平面、立面図	232
fig.208	J区第3遺構面a・b上 第2遺構面a・b 第1遺構面 平面図	233
fig.209	出土玉及び金属器	235
fig.210	出土石鏝、石槍剝片	237
fig.211	出土石包丁、柱状片刃石斧	238
fig.212	出土敲石、凹石	240
fig.213	出土砥石、用途不明石製品	241
fig.214	小形木製品	251
fig.215	Iトレンチ第4遺構面c 溝SD46内出土船材(1)	252
fig.216	Iトレンチ第4遺構面c 溝SD46内出土船材(2)	253
fig.217	F2グリッド第4遺構面a 第4号墓主体部内出土割竹形木棺	254
fig.218	I区第6・7遺構面 出土枕	255
fig.219	I4グリッド第6遺構面d シガラミ402出土枕	256
fig.220	I1グリッド第6遺構面d シガラミ110出土枕	257
fig.221	I2グリッド第6遺構面d シガラミ205出土枕	258
fig.222	I2グリッド第6遺構面d シガラミ205出土枕	259

fig.223	I区第6遺構面d	シガラミ205、5、4出土杭	260	
fig.224	Iトレンチ第6遺構面d	シガラミ1出土杭	261	
fig.225	I区第6遺構面d	シガラミ1・301出土杭	262	
fig.226	I区第6遺構面d	シガラミ3・103出土杭	263	
fig.227	I4グリッド第6遺構面d	シガラミ402出土杭	264	
fig.228	I4グリッド第6遺構面d	シガラミ402出土杭	265	
fig.229	I4グリッド第6遺構面d	シガラミ402出土杭	266	
fig.230	I4グリッド第6遺構面d	シガラミ402出土杭	267	
fig.231	I4グリッド第6遺構面d	シガラミ402出土杭	268	
fig.232	I区第4・6遺構面	シガラミ2出土杭	269	
fig.233	Hトレンチ第5遺構面	出土杭	270	
fig.234	Hトレンチ第5遺構面a	シガラミ材出土杭	271	
fig.235	H・Iトレンチ第4遺構面	出土杭	272	
fig.236	Iトレンチ第4遺構面c	河道I最下層出土杭	273	
fig.237	I区、Eトレンチ第4遺構面	出土杭	274	
fig.238	I区第4遺構面	出土杭	274	
fig.239	I3グリッド第4遺構面c	河道301上層・最上層及び H4グリッド第5遺構面b	出土杭	275
fig.240	I区第4遺構面	出土木器類	276	
fig.241	I区第6・7遺構面	出土木器類	277	
fig.242	E・Hトレンチ第5遺構面	出土木器類	278	
fig.243	H区第4遺構面	出土木器類	279	
fig.244	H・I・J区第4遺構面	出土木器類	280	
fig.245	I区第4遺構面c	各溝出土木器類	281	
fig.246	I区第4遺構面c・d	河道I、J-2グリッド第4遺構面d 第5遺構面b上	出土木器類	282
fig.247	I3グリッド第4遺構面c	河道301中層及び上層出土木器類	283	
fig.248	I3グリッド第4遺構面c	河道301上層・中層出土木器類	284	
fig.249	I区第4遺構面c・d	河道301・401出土木器類	285	
fig.250	I3グリッド第4遺構面a下	溝SD301出土木器類	286	
fig.251	E・H・J区第3・4・5遺構面	出土柱及び礎板	287	
fig.252	Iトレンチ、H区第5・6遺構面	出土土器	430	
fig.253	I区、H・Eトレンチ第6・7・8遺構面	出土土器	431	
fig.254	H区第6遺構面a・b	周溝墓他出土土器	432	

fig.255	I区第6・7遺構面 出土土器	433
fig.256	I区、Jトレンチ第5・6・7遺構面 出土土器	434
fig.257	Eトレンチ第5遺構面b 大河道 流路I出土土器	435
fig.258	E1・2・4グリッド第5遺構面a・b 大河道 河道I出土土器	436
fig.259	Eトレンチ第5遺構面a・b 大河道 河道1・2・3出土土器	437
fig.260	Eトレンチ第5遺構面 出土土器	438
fig.261	E区、F2グリッド第4・5遺構面 各遺構出土土器	439
fig.262	Eトレンチ第4遺構面c 溝SD60、61出土土器	440
fig.263	E区第4遺構面b 溝SD59・459出土土器	441
fig.264	E4グリッド第4遺構面b 溝SD459出土土器	442
fig.265	Eトレンチ第4遺構面a・c 溝SD51、53 S-SD20出土土器	443
fig.266	E区第4・5遺構面 各遺構出土土器	444
fig.267	Eトレンチ第4遺構面 出土土器	445
fig.268	Eトレンチ第4遺構面a 円形落ち込みSX12出土土器	446
fig.269	Eトレンチ、F2グリッド第4・5遺構面 各遺構出土土器	447
fig.270	F2グリッド第4遺構面b・c 溝SD206 北側溝出土土器	448
fig.271	Fトレンチ第4遺構面b 溝SD52出土土器	449
fig.272	Fトレンチ第4遺構面b 溝SD52出土土器	450
fig.273	Fトレンチ第4遺構面b 溝SD52出土土器	451
fig.274	Fトレンチ第4遺構面b 溝SD52出土土器	452
fig.275	F区第4遺構面b 溝SD52・152出土土器	453
fig.276	F区第4遺構面b 溝SD52・252出土土器	454
fig.277	F2グリッド第4遺構面b 溝SD252出土土器	455
fig.278	F2グリッド第4遺構面b 溝SD252出土土器	456
fig.279	F区第4遺構面 周溝墓関係出土土器	457
fig.280	Fトレンチ第4遺構面a 土器群1、4出土土器	458
fig.281	Fトレンチ第4遺構面a 土器群2 溝SD40 土壌SK02 pit1出土土器	459
fig.282	Fトレンチ第4遺構面 出土土器	460
fig.283	H区第5遺構面 出土土器	461
fig.284	Hトレンチ第5遺構面 出土土器	462
fig.285	Hトレンチ第5遺構面a 溝SD80上層・中層出土土器	463
fig.286	H2グリッド第4遺構面c 溝SD205出土土器	464
fig.287	Hトレンチ第4遺構面c 溝SD70上層・最下層出土土器	465

fig.288 Hトレンチ第4遺構面 c	溝 S D70上層・最上層出土土器	466
fig.289 Hトレンチ第4遺構面	各遺構出土土器	467
fig.290 Hトレンチ第4遺構面 b	溝 S D51出土土器	468
fig.291 Hトレンチ第4遺構面 b	溝 S D51出土土器	469
fig.292 Hトレンチ第4遺構面 b	溝 S D51出土土器	470
fig.293 Hトレンチ第4遺構面 b	溝 S D51出土土器	471
fig.294 Hトレンチ第4遺構面 b	溝 S D51出土土器	472
fig.295 H2グリッド第4遺構面 c	溝 S D251下層出土土器	473
fig.296 H2グリッド第4遺構面 c	溝 S D251下層出土土器	474
fig.297 H2グリッド第4遺構面 c	溝 S D251上層・下層出土土器	475
fig.298 Hトレンチ第4遺構面 c・d	溝 S D62出土土器	476
fig.299 Hトレンチ第4遺構面 c	溝 S D60最下層出土土器	477
fig.300 Hトレンチ第4遺構面 b・c	溝 S D60下層・最下層出土土器及び土製品	478
fig.301 Hトレンチ第4遺構面 b	溝 S D60上層・下層出土土器	479
fig.302 H2グリッド第4遺構面 b	溝 S D260最上層出土土器	480
fig.303 H2グリッド第4遺構面 b	溝 S D260下層・最下層出土土器	481
fig.304 H2グリッド第4遺構面 b	溝 S D260最上層・上層出土土器	482
fig.305 H2グリッド第4遺構面 b	溝 S D260最上層出土土器	483
fig.306 H2グリッド第4遺構面 a・b	溝 S D260最上層 落ち込み S X241出土土器	484
fig.307 H2・5グリッド第4遺構面	各遺構出土土器	485
fig.308 Hトレンチ第4遺構面 b	溝 S D43出土土器	486
fig.309 Hトレンチ第4遺構面 c	溝 S D42下層出土土器	487
fig.310 Hトレンチ第4遺構面 a・b・c	溝 S D42上層・中層・下層出土土器	488
fig.311 Hトレンチ第4遺構面 c・d	落ち込み S X46出土土器	489
fig.312 Hトレンチ第4遺構面 c・d	落ち込み S X46出土土器	490
fig.313 Hトレンチ第4遺構面	各遺構出土土器	491
fig.314 Hトレンチ第4遺構面 b	土壇 S-S X01出土土器	492
fig.315 H6グリッド第4遺構面 c	井戸 S E601出土土器	493
fig.316 H3グリッド第4遺構面 c	落ち込み S X305 溝 S D311出土土器	494
fig.317 H3グリッド第4遺構面 c	落ち込み S X305出土土器	495
fig.318 H3グリッド第4遺構面 a	落ち込み S X303 焼土壇 S K302、303出土土器	496
fig.319 H3グリッド第4遺構面 a	落ち込み S X303下層出土土器	497

fig.320 H 3 グリッド第4 遺構面 a 落ち込み S X303最上層・上層出土土器	498
fig.321 H トレンチ第4 遺構面 出土土器	499
fig.322 H トレンチ第4 遺構面 出土土器	500
fig.323 H トレンチ第4 遺構面 出土土器	501
fig.324 H 4・5 グリッド第4 遺構面 各遺構出土土器	502
fig.325 H トレンチ第4 遺構面 各溝出土土器	503
fig.326 H 3・6 グリッド第4 遺構面 各遺構出土土器	504
fig.327 H区、I 2・F 3 グリッド第4 遺構面 各遺構出土土器及び土製品	505
fig.328 H トレンチ第4 遺構面 各遺構出土土器	506
fig.329 H トレンチ第4 遺構面 各土壇出土土器	507
fig.330 H トレンチ第4 遺構面 各土壇出土土器	508
fig.331 H トレンチ第4 遺構面 c 土壇 S K45出土土器	509
fig.332 H トレンチ第4 遺構面 c 土壇 S K45、47、48、50出土土器	510
fig.333 H トレンチ第4 遺構面 c 土壇 S K31、33、34、35、38、43出土土器	511
fig.334 H トレンチ第4 遺構面 c 土壇 S K32出土土器	512
fig.335 H・I トレンチ第4 遺構面 各土壇出土土器及び土製品	513
fig.336 I トレンチ第4 遺構面 b 土壇 S K42出土土器	514
fig.337 I トレンチ第4 遺構面 b 土壇 S K43出土土器	515
fig.338 I トレンチ第4 遺構面 各土壇出土土器	516
fig.339 I トレンチ第4 遺構面 c 溝 S D45下層及び最下層出土土器	517
fig.340 I トレンチ第4 遺構面 c 溝 S D45最下層・下層及び最下層出土土器	518
fig.341 I トレンチ第4 遺構面 c 溝 S D45下層出土土器	519
fig.342 I トレンチ第4 遺構面 c 溝 S D45下層出土土器	520
fig.343 I トレンチ第4 遺構面 c 溝 S D45下層・中下層・中層下出土土器	521
fig.344 I トレンチ第4 遺構面 c 溝 S D45中層出土土器	522
fig.345 I トレンチ第4 遺構面 c 溝 S D45中下層・中層下・中層出土土器	523
fig.346 I トレンチ第4 遺構面 c 溝 S D45中層出土土器	524
fig.347 I トレンチ第4 遺構面 c 溝 S D45中層出土土器	525
fig.348 I トレンチ第4 遺構面 c 溝 S D45上層出土土器	526
fig.349 I トレンチ第4 遺構面 c 溝 S D45上層出土土器	527
fig.350 I トレンチ第4 遺構面 c 溝 S D45上層出土土器	528
fig.351 I トレンチ第4 遺構面 各溝出土土器	529
fig.352 I トレンチ第4 遺構面 c 溝 S D45上層及び最上層 埴状遺構出土土器	530
fig.353 I 1・2 グリッド第4 遺構面 c 溝 S D145上層・下層 S D245中層出土土器	531

fig.354	I 2 グリッド第4 遺構面 c	溝 S D245 上層出土土器	532
fig.355	I トレンチ第4 遺構面 c	溝 S D46 出土土器	533
fig.356	I トレンチ第4 遺構面 b	溝 S D20 出土土器	534
fig.357	I トレンチ第4 遺構面 b	溝 S D20 出土土器	535
fig.358	I トレンチ第4 遺構面 b	溝 S D20 出土土器	536
fig.359	I トレンチ第4 遺構面 b	溝 S D20 出土土器	537
fig.360	I トレンチ第4 遺構面 b	溝 S D20 出土土器	538
fig.361	I 3 グリッド第4 遺構面 c	河道301 出土土器	539
fig.362	I トレンチ第4 遺構面	出土土器	540
fig.363	I トレンチ第4 遺構面 b・c	住居址 S B01、02 河道 I・II 出土土器	541
fig.364	I 1・2・3 グリッド第4 遺構面	出土土器	542
fig.365	H トレンチ第2・3 遺構面	出土土器及び土製品	543
fig.366	J トレンチ第4 遺構面	各遺構出土土器	544
fig.367	J トレンチ第4 遺構面 c	土壌 S X01 出土土器	545
fig.368	J 1・2 グリッド第4・5 遺構面	出土土器	546
fig.369	E・F・H トレンチ第2・3・4 遺構面	出土土器	547
fig.370	E トレンチ第2・3 遺構面	出土土器	548
fig.371	E トレンチ第2・3 遺構面	出土土器	549
fig.372	E区、F 2・3 グリッド第3 遺構面	出土土器	550
fig.373	H トレンチ第2・3 遺構面	出土土器	551
fig.374	H・F トレンチ第2・3・4 遺構面	出土土器	552
fig.375	E・H トレンチ第1・2・3 遺構面	出土土器	553
fig.376	H・F・E トレンチ第2・3 遺構面	出土瓦	555
fig.377	E・H・F トレンチ第1・2 遺構面	出土瓦	556
fig.378	E・H・F トレンチ第2 遺構面	出土瓦	557
fig.379	花粉、珪藻分析試料採取地点位置図		561
fig.380	花粉、珪藻分析試料採取地点模式土層柱状図		561
fig.381	H トレンチ試料主要花粉・胞子化石ダイアグラム		564
fig.382	I トレンチ試料主要花粉・胞子化石ダイアグラム		566
fig.383	H トレンチ(縄文時代晩期層) 試料主要珪藻化石ダイアグラム		569
fig.384	花粉胞子化石		571
fig.385	珪藻化石		572
fig.386	三角(A)、菱形(B) ダイアグラム位置分類図		586
fig.387	Mo-Mi-Hb 三角ダイアグラム		593

fig. 388 Mo-Ch, Mi-Hb 菱形ダイヤグラム(1)	594
fig. 389 Mo-Ch, Mi-Hb 菱形ダイヤグラム(2)	595
fig. 390 Qt-Pi 相関図(1)	596
fig. 391 Qt-Pi 相関図(2)	597
fig. 392 Pl-K-fels, Sr-Rb, Mn-Ti 相関図	598

表 目 次

Tab. 1 南北トレンチ土色記号名対照表	15
Tab. 2 土色記号名対照表	36
Tab. 3 F区第6遺構面c～第5遺構面bの立木の樹種(属)	36
Tab. 4 I区第6遺構面a・bの立木の樹種(属)	65
Tab. 5 E区第6遺構面a～第5遺構面bの立木の樹種(属)	73
Tab. 6 掘立柱一覽表(Eトレンチ)	196・198・199
Tab. 7 掘立柱一覽表(Hトレンチ)	205・208・209
Tab. 8 出土木器類観察表	244
Tab. 9 出土土器観察表	289
Tab. 10 出土瓦類観察表	554
Tab. 11 花粉、珪藻分析試料表	560
Tab. 12 Hトレンチ試料花粉分析結果表	563
Tab. 13 Iトレンチ試料花粉分析結果表	565
Tab. 14 検出花粉、孢子化石名一覽表	566
Tab. 15 Hトレンチ(縄文時代晩期層)試料珪藻分析結果表	568
Tab. 16 船材関係樹種同定結果	578
Tab. 17 胎土性状表	581～584
Tab. 18 蛍光X線分析表	585
Tab. 19 土器胎土砂礫観察表	607～610
Tab. 20 土器胎土砂礫器種と類型	610
Tab. 21 土器の砂礫構成と類型	611
Tab. 22 土器胎土砂礫 試料番号・挿図番号対照表	612

図 版 目 次

- CPL. 1 H・I・Fトレンチ第4遺構面 c
- CPL. 2 I 2グリッド第6遺構面 d シガラミ205検出状況
- CPL. 3 Hトレンチ第4遺構面 c 溝S D70土器出土状況
- CPL. 4 I区第4遺構面 c 出土木製品
- PL. 1 Eグリッド第8遺構面 河道10下層
- PL. 2 Iグリッド第8遺構面 b及びc 足跡検出状況
- PL. 3 F・H・I・Jグリッド第8遺構面上土層断面
- PL. 4 E 1・2グリッド第6・7遺構面
- PL. 5 E区第8遺構面
- PL. 6 Eトレンチ及びF 2グリッド第7遺構面
- PL. 7 Hトレンチ第7遺構面 a・b 全景及び土器出土状況
- PL. 8 Hトレンチ第7遺構面 全景
- PL. 9 Hグリッド第7遺構面 a
- PL. 10 I 1グリッド第7遺構面 全景及びシガラミ111～114
- PL. 11 I 2グリッド第7遺構面 a 前期河道
- PL. 12 Iグリッド及びJトレンチ第7遺構面
- PL. 13 Jトレンチ第6遺構面 b及びc 全景
- PL. 14 Eトレンチ第6遺構面 c 河道10上層全景
- PL. 15 Eトレンチ第6遺構面 c 河道10上層検出状況
- PL. 16 Eトレンチ第6遺構面 b下
- PL. 17 Eトレンチ第6遺構面 a 全景
- PL. 18 F 1・2グリッド第6遺構面 a 全景
- PL. 19 Hトレンチ第6遺構面 b 全景
- PL. 20 Hトレンチ第6遺構面 b
- PL. 21 Hトレンチ第6遺構面 b
- PL. 22 H 2グリッド第6遺構面 b及びb上 全景
- PL. 23 H 4グリッド第6遺構面 b及び第6・7・8遺構面土層断面
- PL. 24 Hグリッド第6遺構面 b
- PL. 25 Hグリッド第6遺構面 a下～b下2 全景及び土層断面
- PL. 26 H 5グリッド第5・6遺構面 (方形周溝墓)
- PL. 27 H 5グリッド第6遺構面 b 下部方形周溝墓
- PL. 28 H 5グリッド第6遺構面 b下 下部方形周溝墓

- PL. 29 H5グリッド第6遺構面b 下部方形周溝基及び主体部
- PL. 30 H5グリッド第6遺構面b上 上部方形周溝基及び主体部
- PL. 31 H5グリッド第6遺構面b上 上部周溝基溝断面及び土器出土状況
- PL. 32 Hトレンチ第6遺構面a下
- PL. 33 H6グリッド第6遺構面a下 全景
- PL. 34 Hトレンチ第6遺構面a 全景 畦畔及び断面
- PL. 35 H区第6遺構面a
- PL. 36 Iトレンチ第6遺構面d シガラミ群
- PL. 37 Iトレンチ第6遺構面d シガラミ群
- PL. 38 I1グリッド第6遺構面d シガラミ103・110全景
- PL. 39 I1グリッド第6遺構面d シガラミ103・110
- PL. 40 I1グリッド第6遺構面d シガラミ103・110
- PL. 41 I1グリッド第6遺構面d シガラミ103
- PL. 42 I1グリッド第6遺構面d シガラミ103・110
- PL. 43 I区第6遺構面d シガラミ3・103
- PL. 44 I1グリッド第6遺構面c
- PL. 45 Iトレンチ第6遺構面d シガラミ5
- PL. 46 I2グリッド第6遺構面d シガラミ205
- PL. 47 I2グリッド第6遺構面d シガラミ205土層断面
- PL. 48 I2グリッド第6遺構面d シガラミ205杭根入れ状況
- PL. 49 I2グリッド第6遺構面d シガラミ205
- PL. 50 Iトレンチ第6遺構面d シガラミ群
- PL. 51 Iトレンチ第6遺構面d シガラミ群
- PL. 52 I区南端第6遺構面d シガラミ2・402
- PL. 53 I3グリッド第6遺構面d シガラミ301・302
- PL. 54 Iトレンチ第6遺構面c下
- PL. 55 Iトレンチ第6遺構面c
- PL. 56 Iトレンチ第6遺構面a・c
- PL. 57 Iトレンチ第6遺構面b
- PL. 58 I区第5・6遺構面 河道
- PL. 59 I2グリッド第6遺構面
- PL. 60 Iトレンチ第6遺構面a
- PL. 61 Iトレンチ第5遺構面b
- PL. 62 J区第6・7遺構面

- PL. 63 Jトレンチ第5遺構面c及び第6遺構面b
PL. 64 J1グリッド第5遺構面c 河道
PL. 65 Eトレンチ第5遺構面b 大河道全景
PL. 66 Eトレンチ第5遺構面a
PL. 67 E1グリッド第5遺構面a・b 大河道全景及び土層断面
PL. 68 Eトレンチ及びF1・2グリッド第5遺構面
PL. 69 F2グリッド第5遺構面b
PL. 70 Eトレンチ第5遺構面b
PL. 71 Eトレンチ第4遺構面c下～第5遺構面c
PL. 72 Hトレンチ第5遺構面a
PL. 73 Hトレンチ第5遺構面a シガラミ
PL. 74 Hトレンチ第5遺構面a
PL. 75 Hトレンチ第5遺構面a北半
PL. 76 H6グリッド及びJトレンチ第5遺構面
PL. 77 Eトレンチ第4遺構面b
PL. 78 Eトレンチ第4遺構面a
PL. 79 Eトレンチ第4遺構面a・b
PL. 80 Eトレンチ第4遺構面b
PL. 81 Eトレンチ及びE1・2グリッド第4遺構面a・b
PL. 82 Eトレンチ第4遺構面a
PL. 83 Eトレンチ第4遺構面a 落ち込みS X12土器棺出土状況
PL. 84 E区第4遺構面
PL. 85 Eトレンチ第4遺構面c
PL. 86 Eトレンチ及びF2グリッド第4遺構面
PL. 87 Fトレンチ第4遺構面c
PL. 88 Fトレンチ第4遺構面c 第1号墓
PL. 89 Fトレンチ第4遺構面c 第1号墓
PL. 90 Fトレンチ第4遺構面c
PL. 91 F区第4遺構面b
PL. 92 F区第4遺構面b 溝S D52・152
PL. 93 Fトレンチ第4遺構面b 溝S D52
PL. 94 Fトレンチ第4遺構面b 溝S D52土器出土状況
PL. 95 F区第4遺構面b 溝S D52・252土器出土状況
PL. 96 F3グリッド第4遺構面b 第3号墓

- PL. 97 F 3 グリッド第4遺構面 b 第3号墓墳丘
- PL. 98 F 3 グリッド第4遺構面 c 第3号墓主体部
- PL. 99 F 2 グリッド第4遺構面 a 第4号墓
- PL. 100 F 2 グリッド第4遺構面 a 第4号墓
- PL. 101 F 2 グリッド第4遺構面 a 第4号墓
- PL. 102 F トレンチ第4遺構面 a
- PL. 103 F トレンチ第4遺構面 a 土器群土器出土状況
- PL. 104 I トレンチ第4遺構面 d
- PL. 105 H トレンチ第4遺構面北端溝群
- PL. 106 H トレンチ第4遺構面 c 溝 S D70土器出土状況
- PL. 107 H トレンチ第4遺構面 b 下2 溝 S D51
- PL. 108 H トレンチ第4遺構面 b 溝 S D51
- PL. 109 H 2 グリッド第4遺構面
- PL. 110 H 2 グリッド第4遺構面 c
- PL. 111 H トレンチ第4遺構面 d
- PL. 112 H トレンチ第4遺構面 d
- PL. 113 H トレンチ第4遺構面 c
- PL. 114 H トレンチ第4遺構面 c
- PL. 115 H トレンチ第4遺構面 c
- PL. 116 H トレンチ第4遺構面 b 下2 溝 S D60上層土器出土状況
- PL. 117 H トレンチ第4遺構面北端溝群
- PL. 118 H 2 グリッド第4遺構面 a・b 土器出土状況
- PL. 119 H 3 グリッド第4遺構面 c
- PL. 120 H トレンチ第4遺構面 c
- PL. 121 H トレンチ第4遺構面 c
- PL. 122 H トレンチ第4遺構面 c 各遺構
- PL. 123 H トレンチ第4遺構面 b・c 各遺構
- PL. 124 H トレンチ第4遺構面 a～c 各遺構
- PL. 125 H トレンチ第4遺構面 b 各遺構土器出土状況
- PL. 126 H トレンチ第4遺構面 a・b
- PL. 127 H トレンチ第4遺構面 b 下 溝 S D42下層土器出土状況
- PL. 128 H トレンチ第4遺構面 a・b
- PL. 129 H トレンチ第4遺構面 b
- PL. 130 H区第4遺構面 a・b

- PL. 131 H 3 グリッド第 4 遺構面 a 土壌 S K302
- PL. 132 H 3 グリッド第 4 遺構面 a 土壌 S K303、落ち込み S X303
- PL. 133 H 4 グリッド第 4 遺構面
- PL. 134 H 5 グリッド第 4 遺構面 a～c
- PL. 135 H 6 グリッド第 4 遺構面 b～d
- PL. 136 H 6 グリッド第 4 遺構面 c 井戸 SE601 土器出土状況
- PL. 137 I トレンチ第 4 遺構面 d
- PL. 138 I トレンチ第 4 遺構面 c 北半
- PL. 139 I トレンチ及び H 5・6 グリッド第 4 遺構面
- PL. 140 I トレンチ第 4 遺構面 c 住居址
- PL. 141 I トレンチ第 4 遺構面 b 土壌 S K42、43
- PL. 142 I トレンチ第 4 遺構面 c 航空写真
- PL. 143 I トレンチ第 4 遺構面 c
- PL. 144 I トレンチ第 4 遺構面 c 船材検出状況
- PL. 145 I トレンチ第 4 遺構面 c 船材出土状況細部
- PL. 146 I トレンチ第 4 遺構面 c 船材出土状況細部
- PL. 147 I トレンチ第 4 遺構面 c 船材出土状況細部
- PL. 148 I トレンチ拡張区第 4 遺構面 c
- PL. 149 I 1 グリッド第 4 遺構面 c 溝 S D145
- PL. 150 I トレンチ及び I 2 グリッド第 4 遺構面 c 溝 S D45・245
- PL. 151 I トレンチ拡張区及び I 2 グリッド第 4 遺構面 c
- PL. 152 I トレンチ第 4 遺構面 b・c
- PL. 153 I トレンチ第 4 遺構面 b・c
- PL. 154 I トレンチ第 4 遺構面 b 下 溝 S D20 土器出土状況
- PL. 155 I 1 グリッド第 4 遺構面 b・c
- PL. 156 I トレンチ第 4 遺構面 b 各遺構
- PL. 157 I トレンチ第 4 遺構面 d 河道 I
- PL. 158 I トレンチ第 4 遺構面 c・d 河道 I
- PL. 159 I トレンチ第 4 遺構面 c
- PL. 160 I トレンチ第 4 遺構面 c 河道 I・II 遺物出土状況
- PL. 161 I 3 グリッド第 4 遺構面 c 河道 301
- PL. 162 I 3 グリッド第 4 遺構面 c 河道 301 上層
- PL. 163 I 3 グリッド第 4 遺構面 c 河道 301
- PL. 164 I 3 グリッド第 4 遺構面 c 河道 301 上層 シガラミ

- PL. 165 I 4 グリッド第4・5遺構面
PL. 166 I 3 グリッド第4遺構面 a 下
PL. 167 I 区第4遺構面 a 河道
PL. 168 J トレンチ第4遺構面 c、c 下
PL. 169 J トレンチ第4遺構面 c
PL. 170 J 1 グリッド第4遺構面 d
PL. 171 J 1 グリッド第4遺構面 b・c
PL. 172 J 2 グリッド第4遺構面
PL. 173 第4・5遺構面 各調査区柱穴断面
PL. 174 E トレンチ第3遺構面 c
PL. 175 E トレンチ第3遺構面 b・c
PL. 176 E トレンチ第3遺構面 b
PL. 177 E トレンチ第3遺構面 a
PL. 178 E 1・2 グリッド第3遺構面
PL. 179 E トレンチ第3遺構面南側
PL. 180 F トレンチ第3遺構面 a
PL. 181 F 区第3遺構面 b
PL. 182 E トレンチ及びF トレンチ第3遺構面 各遺構
PL. 183 F 3 グリッド第3遺構面 a 下
PL. 184 H トレンチ第3遺構面 b
PL. 185 H トレンチ第3遺構面 a
PL. 186 H トレンチ第3遺構面 a 建物 S B01
PL. 187 H 区第3遺構面 a・b
PL. 188 H 4・6 グリッド第3遺構面 a・b
PL. 189 H 区南半、I・J 区第3遺構面
PL. 190 H トレンチ及びE トレンチ第3遺構面 掘立柱掘り方内土器出土状況
PL. 191 各調査区第3遺構面 柱穴礎板出土状況
PL. 192 各調査区第3遺構面 掘立柱及び立ち割り断面
PL. 193 E トレンチ第2遺構面
PL. 194 F トレンチ第2遺構面
PL. 195 H トレンチ第2遺構面 d
PL. 196 H トレンチ第2遺構面 a～c
PL. 197 H トレンチ及びH 4 グリッド第2遺構面
PL. 198 H・I・J トレンチ第1・2遺構面

- PL. 199 Eトレンチ第2遺構面 井戸SE01・02
- PL. 200 F・H・Iトレンチ及びF1グリッド第2遺構面 井戸
- PL. 201 Iトレンチ第2遺構面 井戸SE01~04
- PL. 202 出土玉、金属器、石器
- PL. 203 出土石器
- PL. 204 Iトレンチ第6遺構面d シガラミ1出土杭
- PL. 205 Iトレンチ第6遺構面d シガラミ1、2出土杭
- PL. 206 I4グリッド第6遺構面d シガラミ402出土杭
- PL. 207 I4グリッド第6遺構面d シガラミ402出土杭
- PL. 208 Iトレンチ第6遺構面d シガラミ1、3、4、5出土杭
- PL. 209 I2グリッド第6遺構面d シガラミ205出土杭
- PL. 210 Hトレンチ第5遺構面a シガラミ出土杭
- PL. 211 Hトレンチ第5遺構面a シガラミ出土杭
- PL. 212 Hトレンチ第4・5遺構面 出土杭
- PL. 213 Iトレンチ第4遺構面c 出土木器
- PL. 214 Iトレンチ第4遺構面c 河道I最下層護岸木板出土杭
- PL. 215 Iトレンチ第4遺構面c・d 河道Iシガラミ出土杭
- PL. 216 E・Iトレンチ第4遺構面c・d 河道シガラミ出土杭
- PL. 217 I区第6遺構面 出土木器
- PL. 218 I・J区第5・6・7遺構面 出土木器
- PL. 219 Eトレンチ第5遺構面b 大河道出土木器
- PL. 220 H・I区第4・5遺構面 出土木器
- PL. 221 Hトレンチ第4遺構面 溝SD60出土木器
- PL. 222 Hトレンチ第4遺構面 溝SD60出土木器
- PL. 223 H・J区第4遺構面 出土木器
- PL. 224 Iトレンチ第4遺構面c 溝SD45出土木器
- PL. 225 I区第4遺構面c 溝SD45・145出土木器
- PL. 226 Iトレンチ第4遺構面c 溝SD145出土木器
- PL. 227 Iトレンチ第4遺構面 河道I出土木器
- PL. 228 I区第4遺構面c 河道301出土木器
- PL. 229 I3グリッド第4遺構面c 河道301出土木器
- PL. 230 I3グリッド第4遺構面c 河道301出土木器
- PL. 231 I区第4遺構面 出土木器
- PL. 232 I区第4遺構面 河道I上層他 出土木製品類細部

- PL. 233 I区第4遺構面 出土木器
- PL. 234 I3グリッド第4遺構面a下 溝S D301下層出土木器
- PL. 235 E・H区第3遺構面 出土柱
- PL. 236 H・Jトレンチ第3・4・5遺構面 出土柱・礎板・曲物
- PL. 237 出土船材の樹種
- PL. 238 出土船材の樹種・杭
- PL. 239 H・I区第6・7遺構面 出土土器
- PL. 240 E・H・I区第4・5遺構面 出土土器
- PL. 241 Fトレンチ第4遺構面 周溝蒸開係出土土器
- PL. 242 Hトレンチ第5遺構面 溝S D60下 出土土器
- PL. 243 Hトレンチ第4遺構面c 溝S D70出土壺形土器(1)
- PL. 244 Hトレンチ第4遺構面d 溝S D70出土壺形(2)・甕形土器(1)
- PL. 245 Hトレンチ第4遺構面d 溝S D70出土甕形土器(2)
- PL. 246 Hトレンチ第4遺構面d 溝S D70出土甕形土器(3)
- PL. 247 Hトレンチ第4遺構面d 溝S D70出土甕形土器(4)
- PL. 248 Hトレンチ第4遺構面d 溝S D70出土甕形土器(5)
- PL. 249 Hトレンチ第4遺構面d 溝S D70出土甕形(6)・高坏形土器(1)
- PL. 250 Hトレンチ第4遺構面d 溝S D70出土高坏形土器(2)他
- PL. 251 Hトレンチ第4遺構面d 溝S D70出土甕形土器他・土器胎土電子顕微鏡写真
- PL. 252 Hトレンチ第4遺構面c 溝S D51出土壺形土器(1)
- PL. 253 Hトレンチ第4遺構面c 溝S D51出土壺形(2)・甕形土器(1)
- PL. 254 Hトレンチ第4遺構面c 溝S D51出土甕形土器(2)
- PL. 255 Hトレンチ第4遺構面c 溝S D51出土甕形土器(3)
- PL. 256 Hトレンチ第4遺構面c 溝S D51出土甕形土器(4)他
- PL. 257 Hトレンチ第4遺構面c 溝S D51出土鉢形土器
- PL. 258 Hトレンチ第4遺構面c 溝S D51出土高坏形土器他
- PL. 259 Hトレンチ第4遺構面b 溝S D42出土壺形土器(1)
- PL. 260 Hトレンチ第4遺構面b 溝S D42出土壺形(2)・甕形土器(1)
- PL. 261 Hトレンチ第4遺構面b 溝S D42出土甕形土器(2)
- PL. 262 Hトレンチ第4遺構面b 溝S D42出土甕形土器(3)
- PL. 263 Hトレンチ第4遺構面b 溝S D42出土高坏形土器(1)
- PL. 264 Hトレンチ第4遺構面b 溝S D42出土高坏形(2)・鉢形土器(1)
- PL. 265 Hトレンチ第4遺構面b 溝S D42出土鉢形土器他
- PL. 266 Hトレンチ第4遺構面b 溝S D60出土壺形土器(1)

- PL. 267 Hトレンチ第4遺構面 b 溝S D60出土壺形土器 (2)
- PL. 268 Hトレンチ第4遺構面 b 溝S D60出土壺形土器 (3)
- PL. 269 Hトレンチ第4遺構面 b 溝S D60出土壺形土器 (4)
- PL. 270 Hトレンチ第4遺構面 b 溝S D60出土壺形土器 (5)
- PL. 271 Hトレンチ第4遺構面 b 溝S D60出土壺形土器 (6)
- PL. 272 Hトレンチ第4遺構面 b 溝S D60出土壺形 (7)・甕形土器 (1)
- PL. 273 Hトレンチ第4遺構面 b 溝S D60出土甕形土器 (2)
- PL. 274 Hトレンチ第4遺構面 b 溝S D60出土甕形土器 (3)
- PL. 275 Hトレンチ第4遺構面 b 溝S D60出土甕形土器 (4)
- PL. 276 Hトレンチ第4遺構面 b 溝S D60出土高环形土器 (1)
- PL. 277 Hトレンチ第4遺構面 b 溝S D60出土高环形土器 (2)
- PL. 278 Hトレンチ第4遺構面 b 溝S D60出土高环形土器 (3)
- PL. 279 Hトレンチ第4遺構面 b 溝S D60出土高环形 (4)・器台形土器 (1)
- PL. 280 Hトレンチ第4遺構面 b 溝S D60出土器台形土器(2)
- PL. 281 Hトレンチ第4遺構面 b 溝S D60出土器台形土器(3)他
- PL. 282 Hトレンチ第4遺構面 b 溝S D60出土鉢形土器 (1)
- PL. 283 Hトレンチ第4遺構面 b 溝S D60出土鉢形土器 (2)
- PL. 284 Hトレンチ第4遺構面 b 溝S D60出土鉢形土器 (3)土鏝他
- PL. 285 Hトレンチ第4遺構面 b 溝S D60出土土器線刻及び底部
- PL. 286 Hトレンチ第4遺構面 b 溝S D60出土土器細部
- PL. 287 Hトレンチ第4遺構面 b 溝S D60出土土器
- PL. 288 H・Iトレンチ第4遺構面 b Hトレンチ溝S D60・Iトレンチ河道群土器細部 (1)
- PL. 289 Iトレンチ第4遺構面 河道群出土土器細部 (2)
- PL. 290 Iトレンチ第4遺構面 河道群出土土器細部 (3)
- PL. 291 Iトレンチ第4遺構面 河道群出土土器細部 (4)
- PL. 292 Iトレンチ第4遺構面 河道群出土土器細部 (5)
- PL. 293 Iトレンチ第4遺構面 河道I出土壺形土器文様
- PL. 294 Iトレンチ第4遺構面 河道I出土土器 (1)
- PL. 295 Iトレンチ第4遺構面 河道I出土土器 (2)
- PL. 296 Iトレンチ第4遺構面 河道I出土壺形土器 (1)
- PL. 297 Iトレンチ第4遺構面 河道I出土壺形土器 (2)
- PL. 298 Iトレンチ第4遺構面 河道I出土壺形土器 (3)
- PL. 299 Iトレンチ第4遺構面 河道I出土壺形 (4)・甕形土器 (1)
- PL. 300 Iトレンチ第4遺構面 河道I出土甕形土器 (2)

- PL. 301 Iトレンチ第4遺構面 河道I出土甕形(3)・鉢形土器(1)
PL. 302 Iトレンチ第4遺構面 河道I出土鉢形土器(2)
PL. 303 Iトレンチ第4遺構面 河道I出土器台形土器
PL. 304 Iトレンチ第4遺構面 河道I出土高坏形土器(1)
PL. 305 Iトレンチ第4遺構面 河道I出土高坏形土器(2)
PL. 306 Iトレンチ第4遺構面 河道I・II出土遺物
PL. 307 Iトレンチ第4遺構面 河道II出土甕形・甕形土器(1)
PL. 308 Iトレンチ第4遺構面 河道II出土甕形(2)・高坏形土器
PL. 309 Iトレンチ第4遺構面 河道II出土土器・土器胎土電子顕微鏡写真
PL. 310 第2・3遺構面 出土土器及び瓦

付 図 目 次

- Appendix. 1 H・I区第4遺構面c 航空写真
Appendix. 2 H・I区第4遺構面c 平面図

第I章 調査に至る経過

久宝寺遺跡は、八尾市西久宝寺を中心として、北端が東大阪市大蓮東、南端が八尾市神武町に及ぶ広大な範囲に所在している。調査は、日本道路公団が進めている近畿自動車道天理～吹田線建設に伴うもので、府道中央環状線中央分離帯内の高速道路用地を対象としている。調査範囲は、北が府道大阪～八尾線、南が国鉄関西線までで、道路公団の測量測点でSTA109+40から124+40までの1.5kmである。北で佐堂遺跡、南で亀井北遺跡と接している。また、西に接する大阪市域側は、大阪市によって加美遺跡として調査されている。

なお、これらの各遺跡は、現況の市域、道路、鉄道等で便宜的に区分されたものであり、地表下の遺構面の分布限界を示すものではない。沖積地のように平坦で、しかも土砂の堆積が早く、微地形の変化の激しい地域では、各時期で遺構面の分布位置や拡がりが大きく異なっている。そのため、遺跡名称が異なっても同一の遺構面が連続している場合もあるし、逆に同一遺跡内にあっても各遺構が別の集落に属している可能性もある。久宝寺遺跡の場合においても、周辺の亀井北、加美遺跡の調査の進展によって、特に古墳時代前期を主として遺構面の共通性の高いことが明らかになっている。

久宝寺遺跡の存在は、昭和10年に行われた調査区東方の小字西口・栗林での道路工事中に弥生式土器、土師器、刺船の残片が発見されたことで知られるようになった。しかし、その後は周辺において発掘調査が行われず、遺跡の概要は不明のままであった。

そうした中で、名神高速道路より分岐し、近畿圏をネットする高速道路網の一環として、高速自動車国道・近畿自動車道天理～吹田線が日本道路公団により建設されることになった。その内の河内平野を南北に縦断する吹田～松原間（通称・大阪線）は昭和42年に基本計画、整備計画が決定され、43年度より吹田側から工事が着手された。遺跡の存在する東大阪～松原間については、46年度より大阪府教育委員会と日本道路公団との間でその取り扱いが協議されてきた。久宝寺遺跡も、その想定範囲が道路予定地にかかるため、協議の対象となった。協議の結果、周知の遺跡に限って遺構分布と埋没深度を探る目的で第1次調査を実施することになり、現地調査を大阪文化財センターが担当することになった。

久宝寺遺跡の第1次調査は、亀井、友井東遺跡とともに昭和48年度に実施された。久宝寺遺跡の範囲では、5×5mの7カ所のトレンチが設定され、5mの深さまで調査された。その結果、GL-4mまでの間に1～4枚の遺構面が検出され、すべてのトレンチで遺構、遺物の存在が確認された。しかし、遺構面の埋没深度については、場所によりかなりの差があることが明らかとなり、遺構面の分布も複雑な様相を呈していた。一応、遺跡の中心時期は、弥生時代末から古墳時代前期にかけてであり、遺物の出土量も多かった。この他、古墳時代から中世にかけての多数のピット群や、近世の溝、井戸等の遺構も検出された。しかしながら、この時の調査が面積の狭

さと機械掘削を主としたものであったため、本調査において、遺構面が実際にはより多数存在することが判明している。

久宝寺遺跡の本調査は、調査区延長が長い為、南北2地区に分けて実施された。北地区は、昭和55年度より先行着手されており、59年度に調査を終了している。

南地区は、調査区をさらに2分割し、市道加美久宝寺線から府道平野中高安線北側約120mの水路までを第1調査区、これより関西線までを第2調査区とし、昭和57年7月より現地調査に着手した。

第2調査区は、当初掘削深度がGL-2mの予定であり、調査終了期間も59年2月までとしていた。ところが、調査の進展とともに、最終遺構面が弥生時代前期にまで遡って大幅に深くなり、しかも遺構、遺物も膨大な量になった。そのため、調査期間を2度にわたって延長し、60年5月に現地調査を終了した。



fig. 1 遺跡位置図

第II章 調査の方法

第1節 調査の方法

久宝寺遺跡南地区第2調査区は、府道平野中高安線北側120mの水路から国鉄関西線までを範囲としている。道路公園の測量測点でSTA120+70から124+40までの間約370mである。

調査は、「トレンチ調査方式」という大阪線特有の二段階調査方式で進められた。この方式は、まず「トレンチ部の調査」として、幅約30mの路線中央に幅10mのトレンチを遺跡全長にわたって設定し、遺構、遺物の分布状態を把握する。このトレンチは、実際には道路、水路、地下埋設管によって分断され、第2調査区ではE～Jの6本のトレンチが設定された。このトレンチ部は、原則として最終遺構面まで調査することになっているが、方形周溝基や住居跡等の性格の明らかな遺構が検出された場合には、適宜それ以下の掘削を停止し、保存協議を受けることになっている。今回の調査では、古墳時代前期遺構面において2基の方形周溝基の検出されたFトレンチ全域と、Hトレンチの堅穴住居跡1棟を協議の対象とし、当該遺構については保存措置がとられた。そのため、それらの遺構の下層部分は、未調査で保存されている。

トレンチ部の調査終了後、調査結果がただちに大阪文化財センターから大阪府教育委員会に報告され、それを基に教育委員会は、日本道路公園と協議し、遺構、遺物の破壊の少ない場所に橋脚位置を決定する。後半の「切掘り部の調査」(グリッド)は、トレンチ部に既に調査済の部分を除いた橋脚基礎部+1mした範囲を対象として実施する。この+1mは、橋脚建設時の作業スペースと施工誤差を考慮して調査範囲を拡げたものである。

第2調査区の調査は、当初、掘削深度がGL-2mまでに納まる予定であった。-2mであれば鋼矢板の打設基準に達しないため、素掘で調査することになり、最終調査面でのトレンチ幅を10mとし、そこから1/1の法を切って壁面の崩壊を防ぐことにした。そのため、先行して着手したE、F、Hトレンチでは、地表面のトレンチ幅が14mに拡がっている。ところが、調査の進展とともに下層から次々と遺構面が検出されたため、鋼矢板を打設しなければならなくなった。そこで、トレンチ幅10mで鋼矢板を打設し、さらに深くなれば切梁等を架設して安全を確保しながら調査を進めた。調査開始が遅れたI、Jトレンチについては、当初よりトレンチ幅10mで鋼矢板を打設している。

なお、神武川筋のGトレンチについては、神武川がこの地域の幹線水路であり、しかも、農業用水路が合流する地点でもあったため、関係機関との近接施工協議に時間がかかった。そのため、今回は調査を見送り、この部分の橋脚部の調査も、その他の補足調査とともに久宝寺南3として後に追加調査することになった。また、E地区切掘り部のE3グリッドについては、溜池埋め立て時に最終遺構面下まで破壊されていることが判明したため、調査を取り止めている。

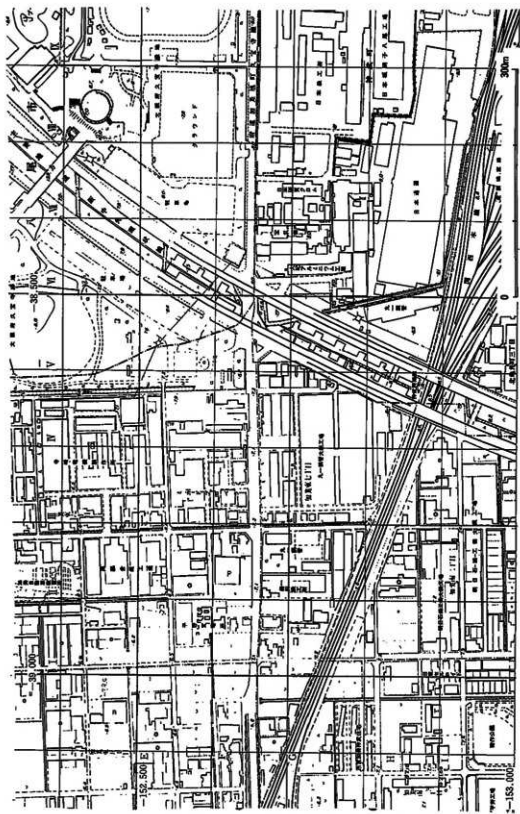


Fig. 2 居住区位置图 (A区面积图)

第2節 調査区の設定

第2調査区は、水路、道路等の障害物によりE～Jの6地区に分割された。それぞれの地区は、中央にトレンチ部のトレンチ、その両側に橋脚基礎部の調査となる切拡げ部のグリッドが設定される。それぞれの呼称は、トレンチ部がEトレンチ、Fトレンチのように地区名をつけ、切拡げ部が、各地区の北西端を1、北東端を2とし、以下その順でE1、E2、E3グリッド…のように命名している。

各地区は、以下のようなものである。

E地区…第1調査区との境界である水路から、関西電力の高圧地下埋設管までの約65mの区間で、切拡げ部が4カ所である。その内のE3グリッドは、既に遺構面が破壊されていたため、調査を取り止めている。

F地区…埋設管から府道平野中高安線までの約40mの区間で、切拡げ部が3カ所である。このFトレンチについては、古墳時代前期の方形周溝墓が2基検出されて全域保存協議にかけられたため、それ以下の調査は停止された。その結果、切拡げ部では橋脚基礎部全域を対象として調査している。また、F3グリッドは、南隅が道路部分にかかるため、隅切りをしている。

G地区…府道平野中高安線南側の神武川、及び農業用水路が合流している地点に設定予定であったが、協議が遅れたため、調査を延期した。

H地区…神武川から分離帯中央を縦断する水路屈曲部までの約80mの区間で、切拡げ部が6カ所である。その内のH1グリッドについては、神武川の形状変更を伴うために調査を延期した。

I地区…水路屈曲部から横断道路までの約70mの区間で、切拡げ部が4カ所である。この地区は、中央に大規模な縦断水路が存在したために、その取り扱いについての協議が必要であり、着手が若干遅れた。協議の結果、水路を一時撤去して調査を進めることが認めら

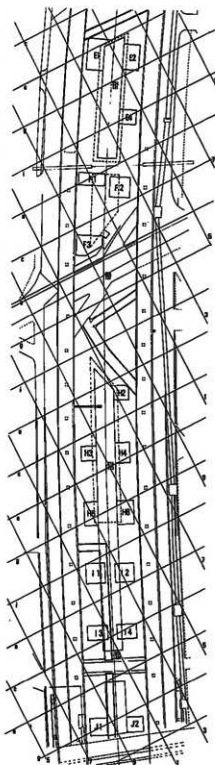


fig. 3 調査区設定図

れたために、鋼矢板打設とともにHトレンチと連結して1本のトレンチとしている。

J地区…横断道路から関西線までの約25mの間で、切抜げ部が2カ所である。ここも、水路の撤去と関西線への近接施工の協議で着手が遅れ、当初より鋼矢板を打設している。

地区割は、国土座標軸第VI系のメッシュをそのまま利用している。第VI系は福井県の越前岬付近の北緯36°0′、東経136°0′を原点とするもので、X軸は奈良県東部の山地を通り、和歌山県と三重県の県境付近で海に抜けている。原点より南、西についてはマイナス表示となる。

区画は、X-152,100.000、Y-39,000.000を基点として、大・中・小の3区画を設定している。大区画は南へアルファベット大文字、東へローマ数字を使用する100m角、中区画は大区画内を南へa~j、東へ1~10とする10m角に区分している。この10m角はさらに1m角に細分され、南、東へそれぞれ0から9までの区画を設定している。この小区画は、本文内の遺構挿図にも必ず表示しており、各遺構の絶対位置を常に換算できるようにしている。

地区割の表記は、大・中区画のみ表示する場合はA1a 1、大・中・小区画を表示する場合はAI a010ようになる。また、挿図等で3区画を表示すると長くなる場合には、大区画を省略している。なお、この地区割方法内の大・中区画については、亀井北遺跡においても地区名を延長して使用している。

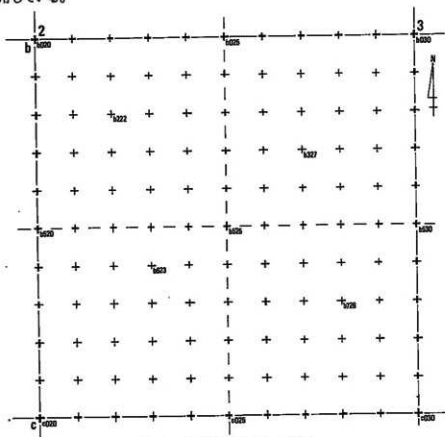


fig. 4 小区画設定図 (S=1/100)

第Ⅲ章 調査の成果 — 検出遺構 —

第1節 基本層序と遺構面の概略

当調査区は、工事延長（STA120+70.2～124+44）に対して、機械掘削4,618m³、人力掘削14,552m³の土砂を上げ、総精査面積75,000m²をこえる。掘削深度はT.P.6.9～7.8mの現地表から、最も深いところでT.P.0.1mとなり、厚さ約7.0mに及ぶ。その間の土層は、様々な砂、砂質・粘質シルト、粘土などから構成され、形成過程が面的に抽出できるものが合計28層であった。それらを面として整理し、基本的な堆積からもたらされる遺構面は、以下のごとく8群に大分類することが可能である。

第1遺構面 中央環状線布設直前の遺構面である。道路盛土とあわせ、厚さ0.4～1.5mに及ぶ。

第2遺構面 近世以降の農耕活動を主とするものであり、褐色、灰色系の砂・粘質シルトを中心に構成される遺構面である。その主たる堆積土は、おおむね0.2～0.7mの厚さである。最大4面に細分できる。

第3遺構面 飛鳥時代以降、奈良時代を中心とする面であり、褐色系の土である。E・F・H区は主に0～0.5mの厚さの砂質・粘質シルトの整地土で構成され、I・J区は主に0.2～0.5mの厚さの粘質シルトによって構成される。最大4面に細分できる。

第4遺構面 弥生時代後期以降、特に、庄内期から布留期古段階を中心とする面である。全体に最上面上には暗褐色の粘質シルト及び粘土が薄く覆っており、それは布留期中段階を中心とする。その下は、黄褐色・灰色系の色調で粘質・砂質シルトを主体とした整地層である。整地層上は赤色変化した酸化細層が認められる。総じて、厚さは0.1～1.0mである。最大6面に細分できる。

以上までの面は、河道堆積土以外の多くが、人為的な改変（削平・整地）でもって複雑な構造を呈している。

第5遺構面 主に弥生時代後期の河川堆積層によって構成される面である。土層は大半が砂であるが、上部を中心として、褐色、灰色系の粘質・砂質シルトを一部、含む。また、最下面は植物層と緑灰色系で粘質・砂質シルトの細層が互層をなしている。厚さは0.6～2.5mの厚い堆積である。これらは最大5面まで細分できる。

第6遺構面 弥生時代中期の堆積層であり、灰色を中心とする粘質シルト層の自然堆積とH区の粘質・砂質シルトブロックを主体とする人為的な堆積に分かれる。0.05～1.0mの厚さの堆積である。最大5面に細分できる。

第7遺構面 弥生時代前期の堆積層であり、I区以外ではほぼ全域で確認できる黒色粘土、黒灰色粘質シルトが堆積する。遺構はその下面において顕著である。厚さは0.05～0.3mの堆積である。2面に細分できる。

第8遺構面 弥生時代前期中葉以前の黒色粘土及び粘質シルトと淡い灰色系の粘質・砂質シルトよりなる互層で、人為的な堆積は認められない自然堆積層である。

以上のような堆積状況を基本として、各遺構面は大分類できる。しかしながら、調査区全域に及ぶ自然堆積は、ほぼ、弥生時代後期の砂層によってその大きな沖積作用は停止するといつてよく、それ以降は、その沖積作用がもたらした起伏を削平、整地することによつてもたらされた人為的な改変による堆積が主体的である。したがつて、各トレンチごとで複雑な層序を第3・4遺構面は特に示すこととなる。つまり、E区北端部では、第2遺構面から第5遺構面への間隔は、ほとんどなく、F区南半部でも第2遺構面と第4遺構面が同様な関係にあるといった具合である。

こうした状況から各大遺構面の細分は間隔がない地点では、2面と少なく、鞍部となるような土砂堆積余地を残す地点では、6面をこえる多いものとなっている。各細分面の各々の関係は、土質等によつて極力、照合はしたが、それらの厳密なる共通性には、遺構面を形成せしめる地形によつて、不可能に近い。したがつて、遺構面の細分は、その地点での層位的な上下関係の序列を考える上で、有効性を発揮するものである。

各時期の表示にあたっては、弥生時代は、佐原 真『弥生式土器集成』本編Ⅱ 1968年の畿内編年に依つた。

弥生時代末から古墳時代前半期は、石野博信・関川尚功『纏向』桜井市教育委員会 1977年の編年を軸とするが、本遺跡において、纏向2式と3式との間にかなりの画期を意識しながらも、しかも研究者間で不統一の時代区分観、すなわち、弥生時代と古墳時代の分離をさけるため、本来、土器形式である庄内式と布留式を時期名として扱い、庄内期、布留期と呼称することとした。編年観は、纏向1式併行を弥生時代末とし、纏向2式併行を庄内期古段階、纏向3式のうち新しい段階（辻土壇4下層）を除く併行を庄内期新段階、辻土壇4下層を含む纏向4式併行を布留期古段階、広義の小若江北式を布留期中段階、船橋0-I地点を布留期新段階と表現した。ただし、本遺跡出土の一括群の微妙なとり扱いについては、併行資料と一致しない。

これら以降については、年代表示とした。

なお、土層名の記号表記は、一連の南北方向のトレンチ土層断面図のものをP.15のTab. 1 南北トレンチ土色記号名対照表にかかげ、本文中の土層断面図の多くなるものについてはP.36のTab. 2 土色記号名対照表にかかげた。そして、土質については、挿入中にスクリーントーンで表現した。また、少ないものは各挿入図内に収めた。

なお、土色名についてはトレンチ部では主に『新版 標準土色帖』農林省農林水産技術会議事務局 監修 財団法人 日本色彩研究所 色票監修（昭和45年）を使用しており、使用分にはその表示記号を合わせ列記している。

Tab. 1 南北トレンチ土色記号名対照表

Ag	灰褐	5YR 6/2	Dd	浅黄	2.5Y 7/4	Ga	灰白	10Y 7/1
Al	褐灰	5YR 5/1	De	明黄褐	2.5Y 7/6	Gf	灰	10Y 6/1
Ap	明赤褐	5YR 5/6	Df	黄灰	2.5Y 6/1	Gl	灰	10Y 5/1
Ar	褐灰	5YR 4/1	Dg	灰黄	2.5Y 6/2	Gm	オリーブ灰	10Y 5/2
As	灰褐	5YR 4/2	Dh	にぶい黄	2.5Y 6/3	Gr	灰	10Y 4/1
At	にぶい赤褐	5YR 4/3	Di	にぶい黄	2.5Y 6/4	Gw	オリーブ黒	10Y 3/1
Au	赤褐	5YR 4/4	Dj	明黄褐	2.5Y 6/6	Gx	オリーブ黒	10Y 3/2
Av	赤褐	5YR 4/6	Dl	黄灰	2.5Y 5/1	H ₁	灰	N 5
Ax	暗赤褐	5YR 3/2	Dm	暗灰黄	2.5Y 5/2	H ₂	灰	N 4
Bf	褐灰	7.5YR 6/1	Dn	黄褐	2.5Y 5/3	H ₃	暗灰	N 3
Bl	褐灰	7.5YR 5/1	Do	黄褐	2.5Y 5/4	If	オリーブ灰	2.5GY 6/1
Bm	灰褐	7.5YR 5/2	Dp	黄褐	2.5Y 5/6	Il	オリーブ灰	2.5GY 5/1
Bn	にぶい褐	7.5YR 5/3	Dr	黄灰	2.5Y 4/1	Ir	暗オリーブ灰	2.5GY 4/1
Bo	にぶい褐	7.5YR 5/4	Da	暗灰黄	2.5Y 4/2	I ₁	黒	2.5GY 2/1
Bp	明褐	7.5YR 5/6	Dt	オリーブ褐	2.5Y 4/3	Jf	オリーブ灰	5GY 6/1
Bq	明褐	7.5YR 5/8	Du	オリーブ褐	2.5Y 4/4	Jl	オリーブ灰	5GY 5/1
Br	褐灰	7.5YR 4/1	Dw	黒褐	2.5Y 3/1	Jr	暗オリーブ灰	5GY 4/1
Bs	灰褐	7.5YR 4/2	Eb	灰白	5Y 7/2	J ₁	オリーブ黒	5GY 2/1
Bt	褐	7.5YR 4/3	Ec	浅黄	5Y 7/3	Kf	緑灰	7.5GY 6/1
Bu	褐	7.5YR 4/4	Ed	浅黄	5Y 7/4	Kl	緑灰	7.5GY 5/1
Bv	褐	7.5YR 4/6	Ee	黄	5Y 7/6	Kr	暗緑灰	7.5GY 4/1
Bw	黒褐	7.5YR 3/1	Ef	灰	5Y 6/1	Lf	緑灰	10GY 6/1
Bx	黒褐	7.5YR 3/2	Eg	灰オリーブ	5Y 6/2	Ll	緑灰	10GY 5/1
Bz	暗褐	7.5YR 3/4	Eh	オリーブ黄	5Y 6/3	Lr	暗緑灰	10GY 4/1
Cg	灰黄褐	10YR 6/2	Ei	オリーブ黄	5Y 6/4	Lw	暗緑灰	10GY 3/1
Ci	にぶい黄橙	10YR 6/4	El	灰	5Y 5/1	Mf	緑灰	5G 6/1
Cj	明黄褐	10YR 6/6	Em	灰オリーブ	5Y 5/2	Ml	緑灰	5G 5/1
Ck	明黄褐	10YR 6/8	En	灰オリーブ	5Y 5/3	Mr	暗緑灰	5G 4/1
Cl	褐灰	10YR 5/1	Eo	オリーブ	5Y 5/4	Mw	暗緑灰	5G 3/1
Cm	灰黄褐	10YR 5/2	Er	灰	5Y 4/1	Nf	緑灰	10G 6/1
Cn	にぶい黄褐	10YR 5/3	Ew	オリーブ黒	5Y 3/1	Nl	緑灰	10G 5/1
Co	にぶい黄褐	10YR 5/4	Fa	灰白	7.5Y 7/1	Nr	暗緑灰	10G 4/1
Cp	黄褐	10YR 5/6	Fb	灰白	7.5Y 7/2	Nw	暗緑灰	10G 3/1
Cq	黄褐	10YR 5/8	Ff	灰	7.5Y 6/1	Of	青灰	5BG 6/1
Cr	褐灰	10YR 4/1	Fg	灰オリーブ	7.5Y 6/2	Oi	青灰	5BG 5/1
Cs	灰黄褐	10YR 4/2	Fh	オリーブ黄	7.5Y 6/3	Or	暗青灰	5BG 4/1
Ct	にぶい黄褐	10YR 4/3	Fl	灰	7.5Y 5/1	Ow	暗青灰	5BG 3/1
Cu	褐	10YR 4/4	Fm	灰オリーブ	7.5Y 5/2	O ₁	青黒	5BG 2/1
Cv	褐	10YR 4/6	Fr	灰	7.5Y 4/1	Pl	青灰	10BG 5/1
Cy	暗褐	10YR 3/3	Fs	灰オリーブ	7.5Y 4/2	Pr	暗青灰	10BG 4/1
Dc	浅黄	2.5YR 7/3	Fw	オリーブ黒	7.5Y 3/1	Qr	暗青灰	5B 4/1

图中記号・土色名・土色表示記号

第2節 各区の土層

前節に記したように、各区の土層断面は、基本層が共通しながらもそれぞれに特徴がある。これら各区に特徴的な堆積を列記する。

E区 E区の北半の埋設土の多くは、第5遺構面に河道の堆積が主たるものである。その堆積層はT.P.1.3~5.9m前後にまで及んでおり、上下の遺構面に対してかなりの影響を与えている。上位の遺構面では、この砂層の上部をかなり削平した人為的な改変の跡が見受けられる。また、下位では、同様な位置に河道が錯綜しており、粘質シルト層に砂層をはさみ湧水がはげしい。

F区 F区では、他の調査区より、かなり安定した層序を呈するものの、第5遺構面の河道堆積がもたらした起伏を周溝墓墳丘築造に利用しており、その起伏は第3遺構面まで影響している。

H区 H区は第7遺構面において形成された平坦面が、第6遺構面に踏襲され、人為的な整地層が目立つ他、南端部分はその整地範囲からはずれて、複雑な様相を呈する。第5遺構面の河道堆積土は、H区中央に微高地を形成したようであり、北側部分はF区とH区の間の第3遺構面までは直接につながる河道域として存在しつづけ、南側部分もまた、第3遺構面まで段差となって影響する。この段差は、第3遺構面中の低いH区南端とI区北半が、粘質シルトを堆積することによってかなり解消される。fig.11は、H区微高地北側の安定した東西土層断面を図示したものである。

I区 I区は第3遺構面以下がほぼ全時期を通じて、何らかのかたちで河道とかかわり合いをもつ。特に、第6遺構面での河道は、他の調査区の遺構面の下位レベルがT.P.4.0m前後であるのに対して、I区のはほぼ全域がT.P.2.5mまで落ち込んでいる。この遺構面で見出せる河道域の肩部は北側がトレンチ北端、南側がI3・4のグリッド部の南西、南東部分のみであり、トレンチ部の南北土層断面図には、南側肩部が表現できないので、fig.12、13に図示した。また、この河道域は第5遺構面の河道堆積によって、他の調査区とあまり隔たりのない高低差となるが、第5遺構面に設定されたI区南端の河道域が第3遺構面まで、垂直に移動し、天井川状となり、周囲より高くなる。

J区 J区は他の調査区において認められるような第5遺構面の堆積層がなく、粘質シルトを多くはさんだ複雑な層序を呈する。また、J区は全体に灰色層が多く、第8遺構面の構成層としては、砂層を主体としていることも、その特徴である。

こうした特徴から生じる遺構面の細分層が特に多くなる地点は以下のとおりである。

E区南端・F区 第5遺構面 F区 第2遺構面 H区北端 第4遺構面 H区南端・I区 第6遺構面 J区 第5・6遺構面

また、遺構面表示と時期の関係については、ほぼ全域を通じて存在する第7遺構面・黒色粘土層系、第5遺構面・緑灰色粘質・砂質シルト互層系、第4遺構面・赤色酸化層系、暗褐色粘土系等を除いて、同一遺構面表示であっても、北側調査区から南へ順に新しい時期面となる傾向がある。

第3節 縄文時代

縄文時代は、T.P. -1.0m 前後より下部において鋼矢板に付着した貝によって、かつて水面下であったことが知られる。

それより上部は、全体に河道状堆積物が認められる。それらがおちつくまでに3本以上の黒色粘土層をはさみ、数度は泥沼状にあったと考えられる。そしてT.P.2.0mの面においては、荒砂を伴った大きな河道を本調査区内で2本検出した。

この2本の河道のうち、1本はEトレンチ、E1・E4グリッドで見られ、もう1本はF1グリッドで見られた。双方とも淡青灰色粘土を肩としているが、途中で堆積した弥生時代前期と考えられる黒色粘土層がたれ込んでいる。

これより下位の黒色粘土層上面には、顕著に足跡が認められる。

E1グリッドでは、河道10上層直下に同様な河道10下層が存在するが、その河道の法面中途のテラスと下面側には鹿、鳥、人と考えられる足跡が無数に重なっており、河道底の小溝にも足跡を検出して

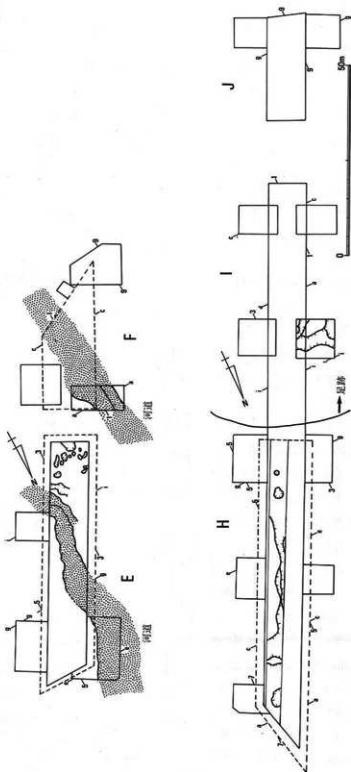


fig.14 第8遺構面 平面図

いる。この河道10下層は、西側の鋼矢板側で再度、急激に落ち込む。

さて、H・Iトレンチはシルト系の土が堆積し、比較的好だやかな層序をなすが、所々に砂をかんでいる。Iトレンチでは、T.P. 2.5mあたりに位置する黒色粘土上面には、鹿と考えられる動物類の足跡が全体に認められ、それらの上部のほとんどは砂層で覆われ、Jトレンチまで拡がる。

その中で、I1グリッド南西隅においては、人間の足跡をわずかながら検出している。

これら3本以上の黒色粘土層のうち、記述にかがた下2本の時期についてはいずれの黒色粘土層ないし砂層からも遺物の出土はなかった。

ただ、2本の上については、これを切り込んだ弥生時代後期のE区の大河道の下部において、縄文時代晩期前半頃の土器の出土が見られることから、この頃の可能性が強い。

また、下のものは北側の調査区より、後期が想定される。

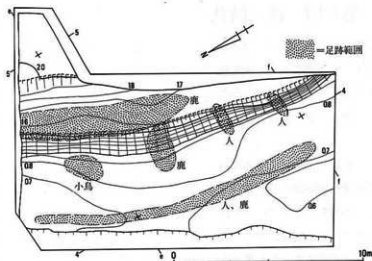


fig.15 E1グリッド第8遺構面 河道10下層平面図
(等高線はメートル)

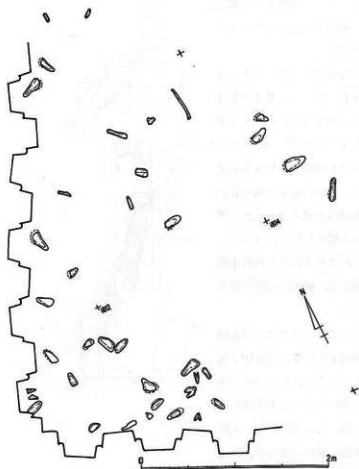


fig.16 I1グリッド第8遺構面 足跡検出状況図

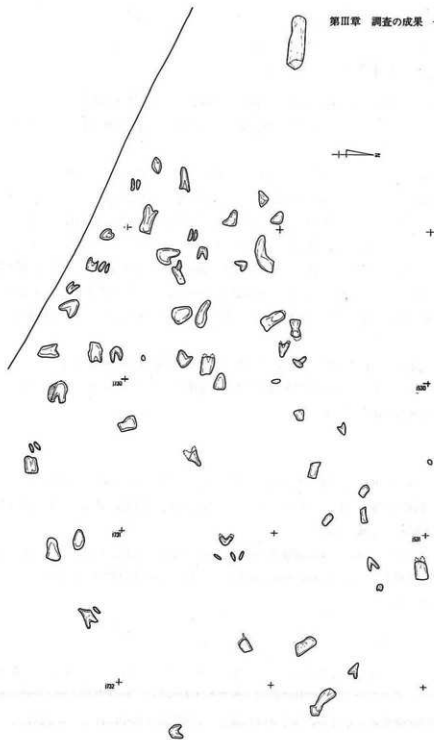


fig.17 12グリッド第8遺構面
足跡等検出状況図

第4節 弥生時代前期

弥生時代前期の遺構面は、固くしまった淡青灰色粘質シルト及び灰色砂をベースとする。このベースの上にはこれもしまった黒色粘土層が堆積し、これより弥生時代前期の土器が出土する。

A. E区

E区は北側が後期の河道、中央が現代のため池に切られており、良好には遺存しない。この時期の面は、T.P.2.5~3.0mの間にあり、E区全体は中央がくぼんだ状態となっている。これは前段階の河道10下層に影響されていると考えられる。また、E区、F区の前段階の河道に包含層である黒色粘土層がたれ込んでおり、この時期においても、それらが踏襲されている。

さて、E区北側では、南北方向に不明瞭でゆるやかな溝群が存在する。これらの溝は浅い2.0~3.0m幅のものが5本である。そのうち最も西側の西肩近くにある幅1.0m、深さ0.25mの幅せまい溝SD80からは、前期の壺形土器体部片が出土している。また、北端には遺構面上面より掘り込んだピットが存在する。

中央には、東西方向に幅2.0~3.0m、深さ0.15mの浅い溝があり、遺構面はそれより南側へ上昇する。その南半は水溜り状の不定形な深さ0.1m内外の浅い落ち込みが不規則に存在し、その間に人間の足跡を検出している。

B. F区

F1グリッドではE区と同様、下層の河道は埋設していないが、この時期の間に完全埋没し、その両側で小溝を検出している。F2グリッドはE区南端と同様の状況であるが、西側の安定した面では7個の柱穴を検出した。

F3グリッドは、全体に南側に遺構面がゆるやかに下降しており、黒色粘土が2層に分離できる。ちょうど下降際近くに幅1.0mの溝が弧を描いており、その北側で柱穴を検出し、心柱の残るものが存在した。

C. H区

H区は、安定した平坦な遺構面を形成しており、中央から北半はトレンチに沿って落ち込みと溝が存在する。C5区の「L」字状に曲がった落ち込みからは、ほぼ完形に近い壺形土器が上層の中期整地面の影響を受けてか、厚さ5cmに満たない黒色粘土層中に押しつぶされたように出土している。

H区南端には、環状にまわる溝SD96・696下層がある。この溝は幅0.8mで両法面がほぼ垂直に掘り込まれており、0.4~0.5mの深さの底面は中央がくぼむ。総じて逆家形の断面を呈するが、「U」の字形の部分もあり、かなりしっかりとした溝である。ただ、環状にはまわるものの、両法面には差がなく、何を意図して掘削したかは不明であり、また、それぞれに直線部分があり、

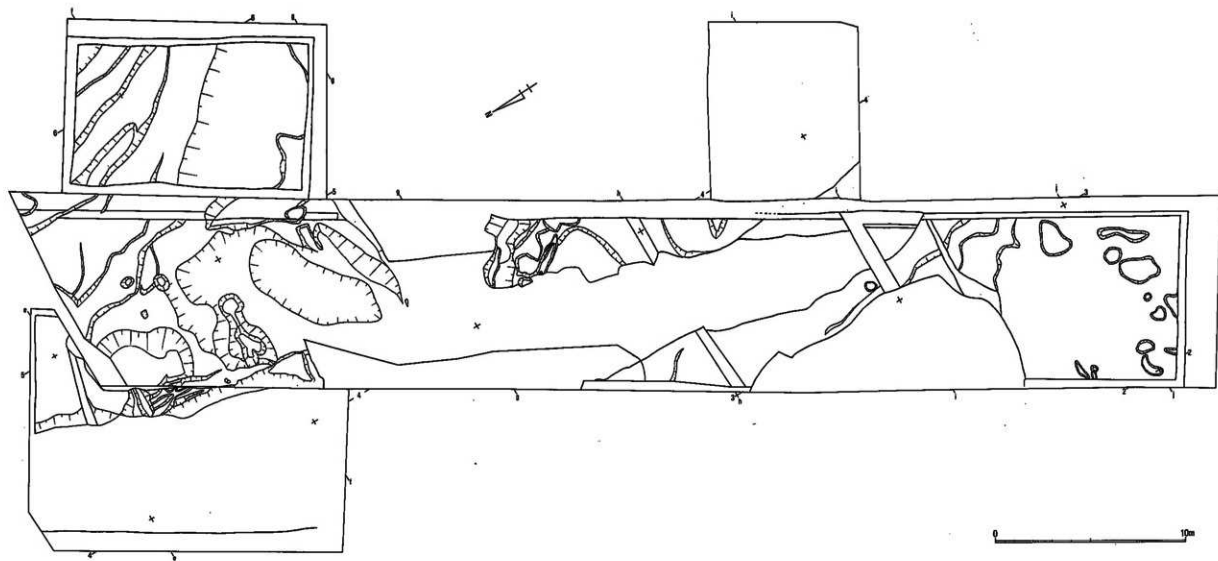


Fig. 18 Ⅱ区第7号墓面 a 平面图

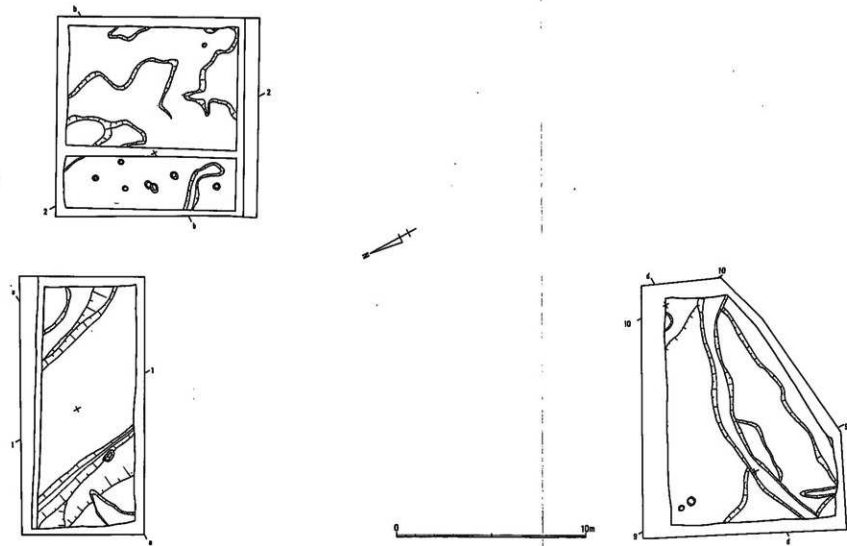


fig.19 F区第7遺構面 a · b · 平面図

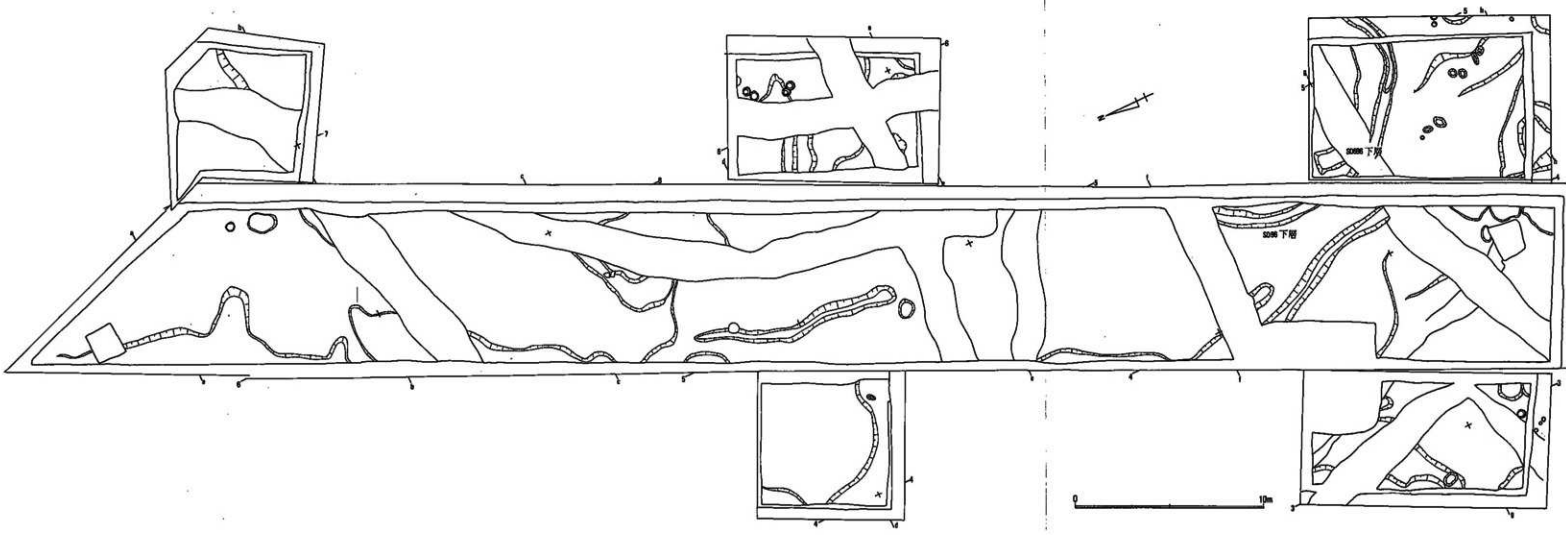


fig.20 H区第7透梯面a 平面图

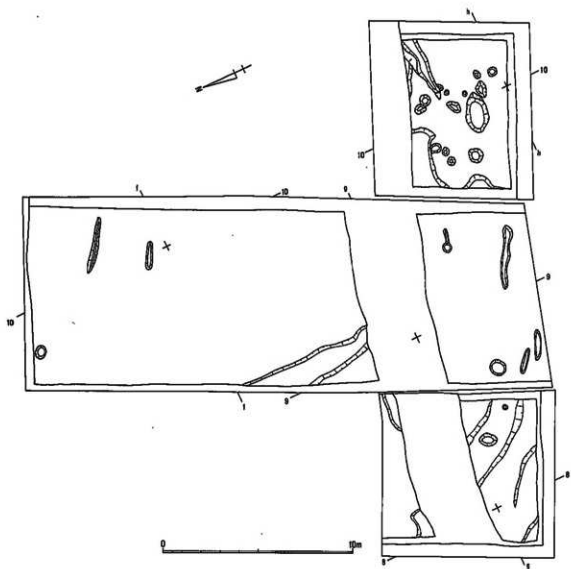


fig. 21 J区第7透视图b 平面图

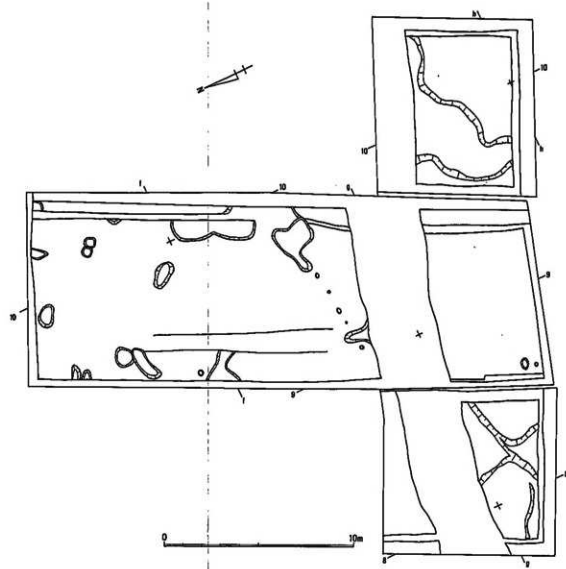


fig. 22 J区第7透视图a 平面图

多角形状を呈する。

この西側には、断面逆台形の幅1.0m、深さ0.4mの溝SD94下層も存在する。両者は中途に黒色粘土層が陥没したように落ち込み、その上部のくぼみに中期前葉に相当すると考える白色粘土が堆積するので、最終埋没は中期に下る。

これら、溝の周囲では、水溜り状の落ち込みとピットを検出している。

D. I区

I区はほぼ全域にわたる中期河道群に浸食され、その北端と南端に前期包含層を約1mにも満たない範囲で確認するにとどまった。しかしながら、その北端法面近くの下面では河道とシガラミを、南端法面近くの下面ではシガラミを検出している。

〈シガラミ及び杭列〉

I1グリッドでは、遺構面が北側に下降し、主に地形の段差が激しいところを中心として、杭列、シガラミ111~114を検出している。これらは北東-南西方向を示すものである。うち、最も良好に遺存していたのは、シガラミ112のみである。

シガラミ111 4群に分かれる杭群のうち、最も北西側の低いところのものである。主にi1区のi2~i4、16~20の区域に不規則に集中する。杭群の大半は、抜け落ち、杭の抜け穴のみが残る。これは、水流の激しさを物語っているものと考えられ、この群を中心として6.0×3.0mの範囲にわたって落ち込みが複雑に切り合っている。杭の根入れは浅く、深いものでも0.2mである。打ち込み方法には直立と斜め方向の2種がある。杭近辺からの出土土器より、畿内第I様式と考えられる。

シガラミ112・113 群中、最も良好に遺存するものである。シガラミ112の方は、不規則であり列をなさないが、杭頭が南側に傾斜するという傾向が認められる。シガラミ113は、北東側が比較的密に杭が打ち込まれ、0.1~0.4mほどの間隔で杭列をなしている。杭列はシガラミ113とは逆に全体に頭を北東方に向けて傾斜する。両者の根入れは0.3~0.4m前後と平均している。両者の杭は、たがいに杭頭を向け合う関係にあり、横断面合掌形を呈することとなり、シガラミ112の方は、シガラミ113の控え杭になると考えられる。

シガラミ114 群中の最も南東にあるもので、第6遺構面のシガラミ110と重複し合うことから、後のfig.47中を含めた。シガラミ111の上部も同様である。さて、このシガラミ114は、ベース面の灰色粘土が0.4m程、隆起するところに打ち込まれているために、上部のシガラミ110の北側杭列と重複するのであるが、両者は分離することが可能である。それは、粘土層上面上の比較的低い位置で、北西側と南東側の傾斜をもつ杭列の上部が重なり合うからである。杭の根入れは0.6~0.7mであり、シガラミ110よりも細い径5cm前後の材を使用している。北西側のものは0.5m、南東側のものは1.0mと粗い間隔で打ち込まれている。南東側のものが粗く、不規則であるので控え杭と考えられる。

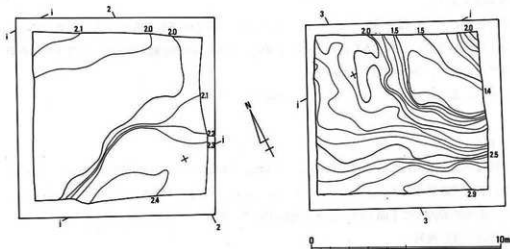


fig. 23 I 1・I 2グリッド第7道構面 a 前期河道平面図 (等高線はメートル)

このシガラミ114とシガラミ112・113は使用材に同様な杭を用い、主たる杭列が向い合うことから、両者を含めて一つのユニットとすることが可能であるかと考えられる。もし、そうであるならば、シガラミ112・113の背後の北東側は土砂により、ある程度、埋没した段階で両者が打ち込まれ、水の誘導的な機能をもっていたかもしれない。また、シガラミ114がある程度、埋没した段階で、その上部により堅固なシガラミ110を設定した可能性が高い。

これら杭列・シガラミに伴う主河道は、I 1グリッドが北東に向かって下降すること、I 2グリッドの北東部が、平面三日月状に0.6m程が急激に落ち込んでいることからその輪郭が推定される。すなわち、弥生時代前期の主河道は、I 2グリッド北端中央の東からの流れが、同グリッド北東隅に北方向へ屈曲した後、また、北西方向に向きを変えするという、複雑に蛇行した流路を形成していたものと考えられる。I 1グリッドで検出したシガラミ群の杭は、この主河道が埋没した際に打ち込まれたものと考えられるが、東側のI 2グリッドでは、I 1グリッドと関係すると考えられるものと、主河道に伴うと考えられるもの双方を検出している。

主河道に伴うと考えられるものは、実際に杭が打ち込まれた状況では検出しておらず、I 1グリッドのシガラミ111と同様に、その抜け穴を検出したにすぎない。しかしながら、その河道底において、径10cmをこえる1.45mの長さの杭が横倒しになっている他、その周辺には、径5cm前後の杭材と同様な状況で密集している。主河道の埋土の下3分の1程の0.6mの厚さには、弥生時代前期包含層の黒灰色粘質シルトが、南屑口よりたれ込んでおり、主河道中においては3層に分かれる。杭材は主にこの粘質シルト層と互層になった青灰色系の砂層中に含まれることから、当該時期になることは間違いない。それら互層となった上部には、同様な層が0.4m続き、その上部から畿内第I様式の壺形土器の上半部が出土しており、これより下部が、この時期の土器に限定される。その上には、約1.0mの緑、茶、青灰色系の粘質シルトと茶灰色系の砂層の互層が堆積する。この土層中から出土するほとんどの土器は畿内第I様式に属するが、第II様式細片も



fig.24 I 1 グリッド第7遺構面 a シガラミ111~113検出状況図

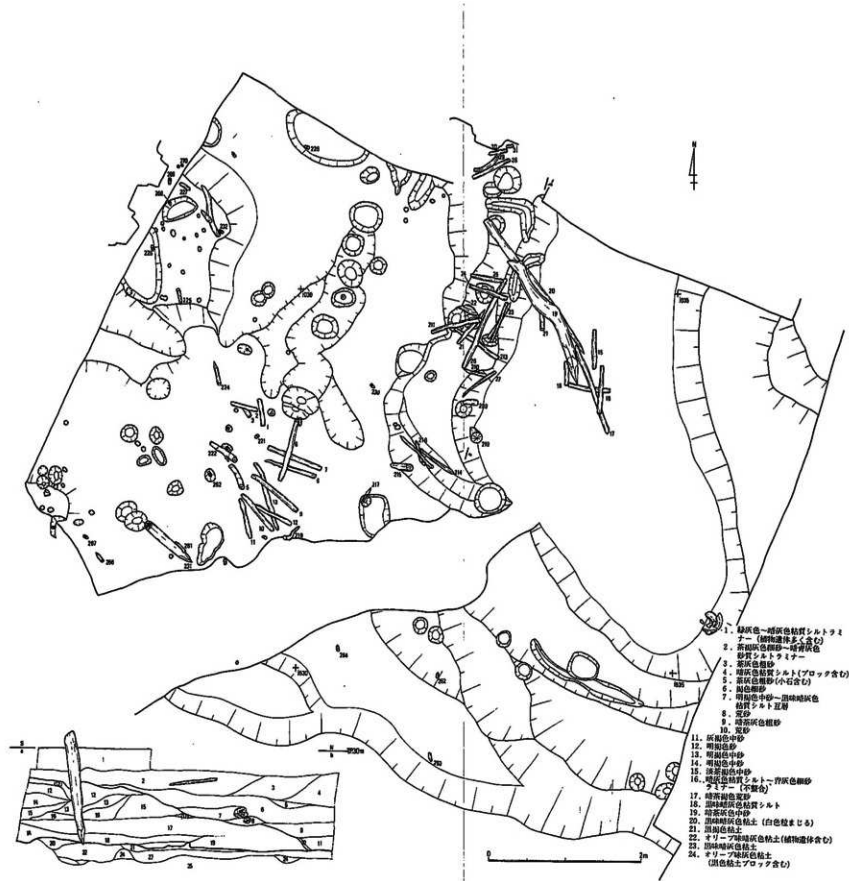


fig. 25 1 2 グリッド第 7 遺構面 a シガラミ 206 及び前期河道下層平面、土層断面図

わずかに含まれており、畿内第II様式となる。これらの一連の土砂堆積を含む流路を前期河道と称した。

I 2 グリッドの西半部の高くなった部分では、黒灰色粘質シルトを剥いだ面から、その土と褐色砂を埋土とする落ち込みと杭の抜け穴及び杭を検出している。黒灰色粘質シルト中よりは、杭材が出土する。これらのうち、規則性をもつものは、I 2 グリッド西壁から東へ3.0mで平行するところにある杭列に見出すことができる。杭は密なところで0.2~0.5m間隔で打ち込まれたと考えられる。各杭が存在したと考えられる周囲は、第6遺構面のシガラミ402の杭と同様な理由（水流の巻き込み）によって生じた不定形な落ち込みが列状につながる。

I 3 グリッドの河道南側の下には、第6遺構面のシガラミ1があるが、その西側には、杭とともにその抜け穴があり、それらの一部も第7遺構面に含まれる可能性がある。

E. J 区

J 区の第7遺構面は、ほぼ平坦な面をなしている。弥生時代前期包含層の黒色粘土層下には、淡青灰色粘質シルトが0.1m以下の厚さで、下部の緑灰色、黄色、灰色砂層に貼りつくようにして堆積している。この淡青灰色粘質シルトの上下で2面に細分できる。

下位のb面は、砂層のわずかな起伏に粘質シルトが堆積するのみであり、不定形な浅い落ち込みを検出したにすぎない。

上位のa面は、浅い大きな落ち込みと、0.5~2.0m程の小さな落ち込みが存在する。gラインより3.5m北に平行して柱穴状のビットが5個、東西方向に並ぶが、それらとの関連遺構は見い出せなかった。このビット列は、南北軸よりやや西にふる程度のものである。

第5節 弥生時代中期

A. E区

E区の最も下面のc面は、前期の黒色粘土層をベースとして、上にはそのほとんどが南北方向の河道10上層と、その指状砂堆及びその延長となる堆積物におおわれている。河道10上層はEトレンチとE1グリッドでその断面形状が一変する。Eトレンチの方は縄文時代晩期に流れていたであろう土砂の多くをえぐっているのに対して、E1グリッドは上半部の砂層をえぐった後には、その上面で砂質シルト、粘土層が堆積する程度である。また、南側では幅4.0~5.4mであるが、北側ではその幅が追えないほど広がっている。しかしながら、E1グリッドの上層粘土が堆積する時点では、その幅は4.0m程に安定する。

こうしたc面でのEトレンチとE1グリッドの差異から、東西方向に後期河道の存在した位置に何らかのくぼみ、もしくは河道がオーバーラップして存在していたことが予想される。特に、その存在は第6遺構面bにおいて、Eトレンチ北半で東西方向にそれより一まわり大きい溝状のくぼみ部分があり、それに向って全体が下降することから東西河道を示唆するに充分である。

次の第6遺構面bの下面では、その東西方向のくぼみを幅約25mの範囲で検出している。このくぼみに向って、河道10最上層にあたる幅4.4m、深さ0.7mの溝がEトレンチ中央に流れ込む。この溝全体の堆積土は砂であるが、その合流点付近は急激に下降し、落ち込み状を呈する。その部分は黒色粘土及び淡灰色粘質シルトブロックを多量に含んだ土砂によって埋められている。この埋土は、人為的な埋め戻しと考えられる。

この面の上のb面は、河道10によってもたらされた指状砂堆によってトレンチ中央がややふくらみをもつ。そして、それを含めて全体に0.2mの厚さの灰色粘質シルトがおおう。その高まりの周辺には、ピット、柱穴、落ち込み等が密集する。うち、E4グリッドでは幅0.2m、深さ0.15mの断面「V」の字形の明瞭な溝を東西方向に検出した。埋土は暗灰色粘質シルトである。柱穴は櫛状に並ぶものが2列ある。また、先の河道10最上層の埋め戻しと考えられる箇所は、凹みの状況呈する。

E区における第6遺構面aは、その南半部にヘドロ状の暗灰色粘質シルト層が堆積した後、灰色、暗灰色主体の砂層、砂質シルト層、粘質シルト層の河川状堆積が認められる。その間にヤナギ類を中心とした立木が生育しており、それぞれそのための凹凸面がはげしく、各々の堆積状況はかなり不安定である。そして、立木部分では上位の第5遺構面の褐色系の砂層と分離が困難な地点があり、それぞれの層位面は安定しない。

また、南端部においては水溜り状のところで、足跡が点在する。

このように、E区の第6遺構面では河道10上層とそれに直交するであろう東西方向の落ち込みを核にした中心河道が存在し、それに伴って順次、全体が河道状堆積物によって覆われていった状況にあることが分かる。

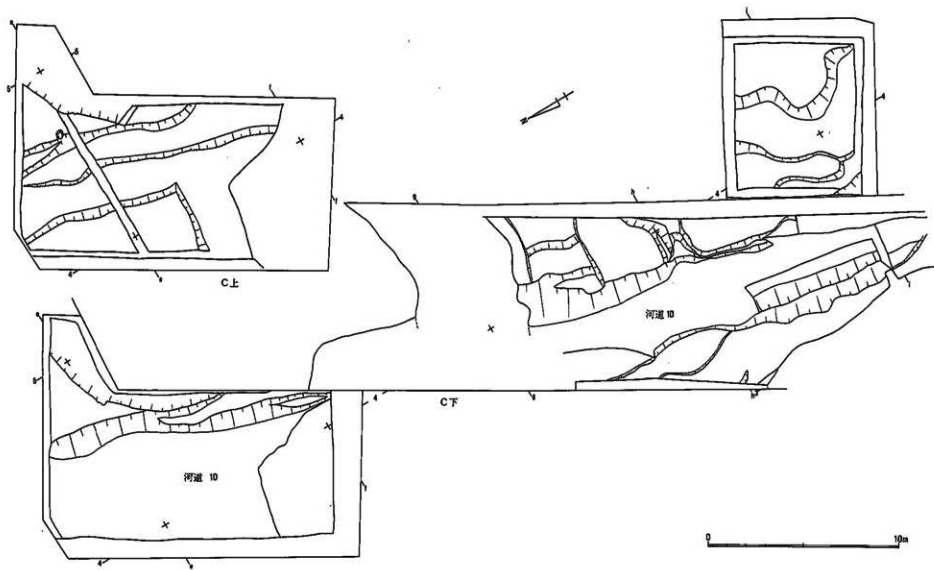


fig. 26 E区第6遺構南c下及びc上(E1グリッド) 平面図

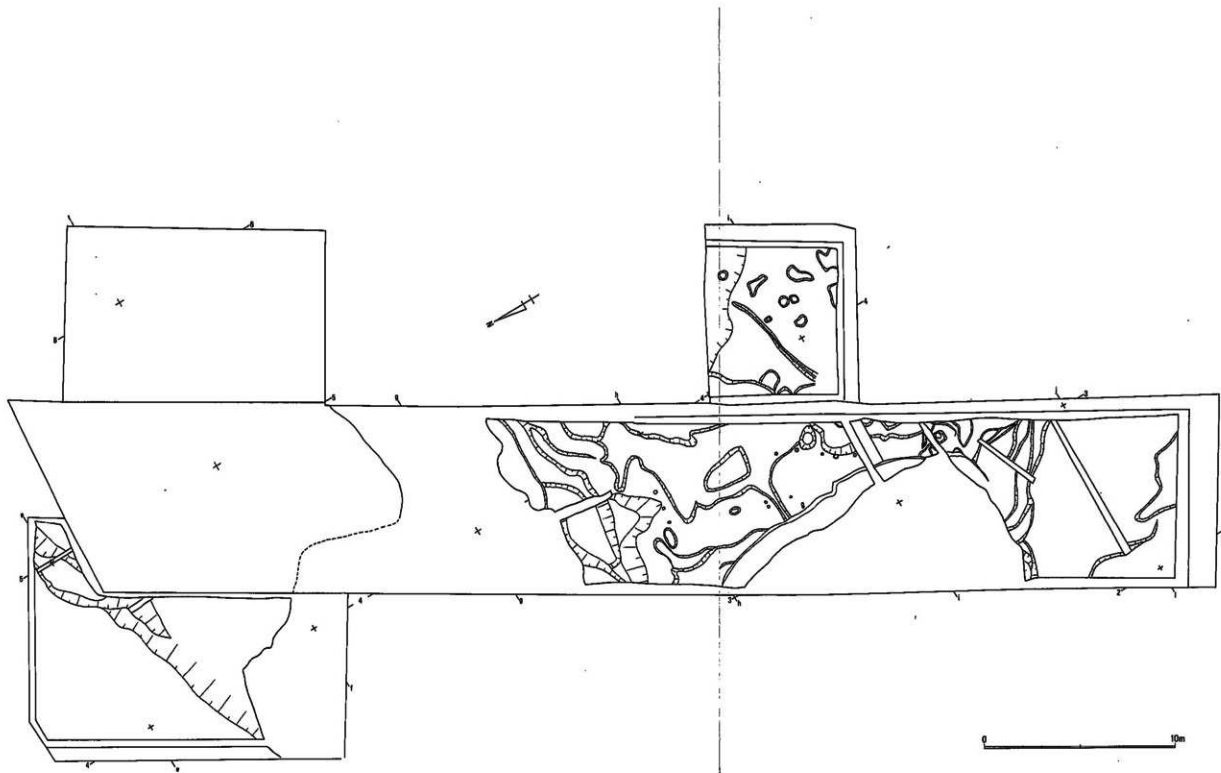


fig. 27 B区第6道梯间b 平面图

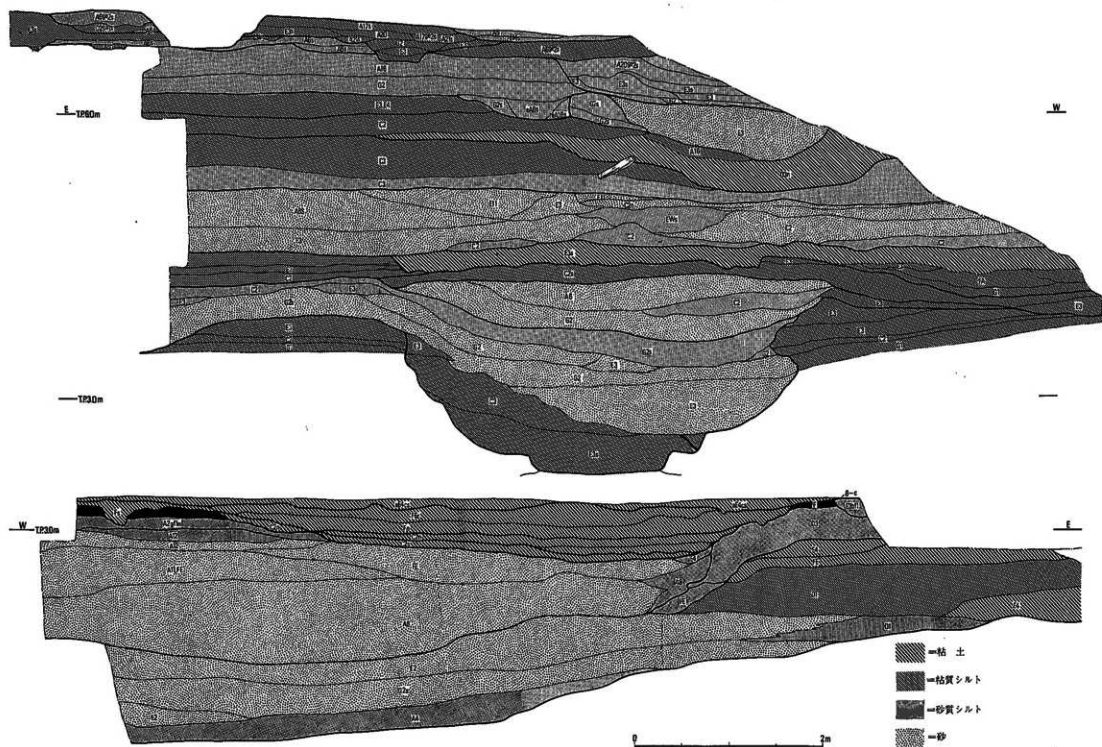


Fig. 28 Eトレンチ、E1グリッド線6連構面c 河道10土層断面図

Tab. 2 土色記号名対照表

記号	色						包含の粒 (g), ブロック (b)		記号	その他							
	色	記号	色	調	記号	色	調	記号									
a	赤	A1	明赤	褐	C1	明緑	灰	FA	黒	褐	a 1	褐	s	砂まじり			
b	黄	A2	暗茶	灰	C2	緑	灰	FE	黒	灰	a 2	黒	n	有機物含む			
c	緑	A3	明茶	灰	C3	暗緑	灰	FE1	淡	黒	灰	a 3	灰	m	植物遺体含む		
d	青	A4	暗	灰	褐	C4	淡緑	灰	FE2	暗	黒	灰	a 4	赤	褐	c	カルシウム含む
e	灰	A5	茶	褐	D1	淡	青	灰	G1	明	オリーブ	灰	a 5	茶	褐		
f	黒	A6	黄	褐	D2	青	灰	G2	オリーブ	灰	a 6	黄	褐				
g	茶	A7	茶	灰	D3	暗	青	灰	G3	明	オリーブ	灰	b	黄	灰		
h	濃	A8	淡	茶	灰	D4	明	青	灰	G4	淡	オリーブ	灰	c 1	緑	灰	
		A9	淡	灰	褐	E1	明	灰	G5	オリーブ	d	青	灰				
		A10	灰	褐	E2	淡	灰	G6	明	オリーブ	e 1	淡	灰				
		A11	淡	黄	褐	E3	灰	G7	淡	オリーブ	e 2	灰					
		A12	暗	茶	褐	E4	暗	灰	G8	オリーブ	黄	e 3	暗	灰			
		A13	淡	赤	褐	E5	淡	灰	黄	G9	明	オリーブ	黄	f 1	黒		
		A14	明	灰	褐	E6	明	灰	黄	G10	暗	オリーブ	黄	f 2	黒	灰	
		A15	暗	黄	褐	E7	赤	灰	G11	淡	オリーブ	黄	w	白			
		A16	明	黄	褐	E8	明	赤	灰	W1	白						
		A17	赤	褐	E9	淡	赤	灰									
		A18	淡	茶	褐	E10	暗	赤	灰								
		A19	明	茶	褐	E11	灰	黄									
		A20		褐	E12	暗	灰	黄									
		A21	明	褐	EW	灰	白										
		A22	暗	褐	EW1	明	灰	白									
		A23	淡	褐	F	黒											

記号凡例

(例) 白色粒含む黒色ブロック含む砂まじり黒味灰色土
=E3gwbls

Tab. 3 F区第6選標面c~第5選標面bの立木の樹種 (個)

F 2 グリッド	
Pw 1 ヤナギ	Pw 9 ヤナギ
Pw 2	Pw 10
Pw 3 ヤナギ	Pw 11 ヤナギ
Pw 4	Pw 12 ヤナギ
Pw 5 ヤナギ	Pw 13 ヤナギ
Pw 6 ヤナギ	Pw 14 ヤナギ
Pw 7	
Pw 8	

B. F区

F区は、E区の第6遺構面aと同様な状況である。

遺構面が比較的安定するF1グリッドでは、人、動物の足跡が密集する。足跡類は判別が困難なものが多いが、グリッド内ではやや高くなったところに集中する。

このグリッドでは、暗灰色粘質シルトと灰色砂が互層になっており、その粘質シルト系の2層の上面に足跡が見られる。

F2グリッドでは、E区で認められた箇所のもも不安定な部分と共通し、E区のそれよりも、立木類が小ぶりではかも、数多く密集した状況である。立木が樹立する部分を中心として高まりが生じ、その間が溝状に複雑に落ち込んでいる。土層は、F1グリッドと同様であるが、その下面は粘質シルトを主体としている。

F3グリッドの堆積は、それに比べ、灰色砂を中心としている。その下面は、東西方向に3本の溝状のものが凹みをなし、全体に河道状堆積層で覆われる。ここからはF1・F2グリッドで検出した立木類もほぼなく、流木類の自然遺物がわずかに見られる。

こうしたF区の状況は、E区と同様な環境下におかれていたものと推察される。

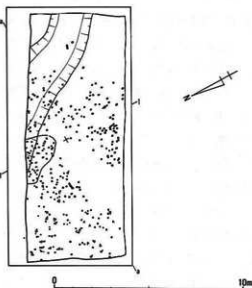
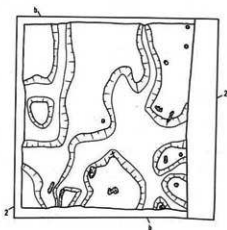


Fig. 29 F区第6遺構面a 平面図

C. H区

H区はE・F区とは異なり、かなり安定した層序を呈する。

第6遺構面bは、第7遺構面aの上部の黒色粘土層の上面を削平することによって整えられており、その上層にはそれより下部の青灰色系の粘質シルトと黒色粘土のブロックを多く含んだ整地層が全体に認められる。整地層中より、弥生土器細片と石鏃などが出土している。

〈溝群〉

H区の大部分において、急角度で切り込んだ幅2.0m前後の溝を南北及び東西方向に計9本検

出している。それぞれの溝の埋土の多くは、上記の整地層と同じく粘土主体のブロック土の混入がはなはだしく、溝の埋め戻しを行ったような状況のものがほとんどである。しかも、各ブロック土の混入の割合は検出面より下層の周辺層序に対応したあり方を示し、淡青灰色系の土層のレベルには淡青灰色系のブロックの混入率が高いといった具合である。

溝 S D90・290 H区の最も北側 a b 5～7区に位置し、ほぼ東西方向のもので断面逆台形を呈し、幅2.5m、深さ0.6～0.7mである。同種の溝中では最も深くしっかりしている。埋土層が上下に分離でき、最下層にはカルシウム塊が多く存在し、その上部の埋土はブロック土が特に多い。

溝 S D91・291 H区北半をゆるく弧を描きながら南北方向に蛇行する溝である。比較的に浅く幅2.2m、深さ0.4～0.5mであり、断面は平たい逆台形であり、ブロック土の混入はやや少ない。その北端では、溝 S D290と切り合いがあり、本溝が後出する。また、南端では溝 S D92と合流してとぎれるが、この切り合い関係もまた、同様に本溝が切っている。溝底は北に向い下降する。

溝 S D92・492 H区中央部、d 456区で検出する溝で、先の溝 S D91と d 5区で合流する。溝 S D91に比べ、深く掘り込んでおり、幅2.0m、深さ0.8mになる。断面は半円形を呈し、大きく3層に分離できる。ブロック土の混入はやや少なく、クリーム味の粘質シルトをやや多くはさむ。

溝 S D93 溝 S D92に南側で平行する溝で、不定形なものである。幅1.4～2.3m、深さ0.7～1.0mを計る。断面は半円形及び三角形形状を呈し、埋土は大きく2層に分離でき、下方は他の溝と同様であるが、その上方はクリーム味の灰色粘土を主体としている。

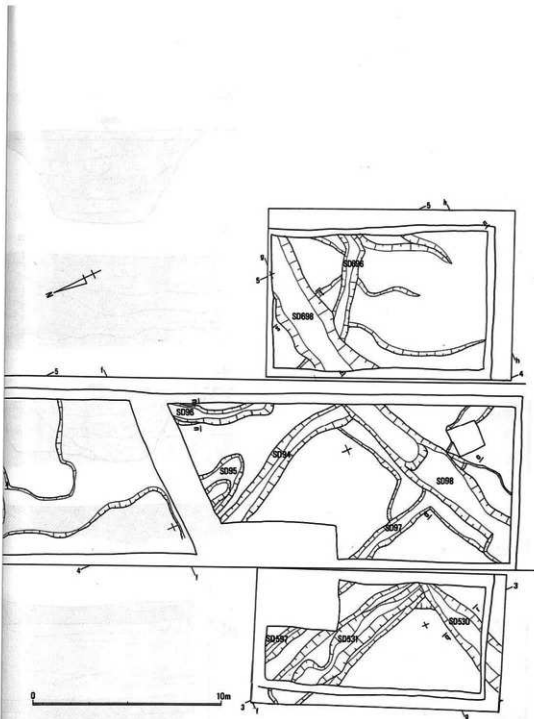
溝 S D94・SD96 この2本の溝は、第7遺構面で掘り込まれ、当遺構面では陥没状況にあったと考えられ、断面皿状の0.2m程の深さの浅いものである。埋土もまた、溝 S D93上層と同様、緑灰色系の粘質シルトであり、自然埋没であったと推定される。これら、クリーム味の緑灰色粘土は、出土した土器細片より、畿内第Ⅱ～Ⅲ様式頃と考えられる。

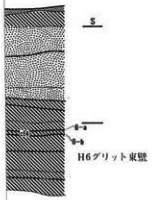
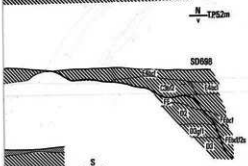
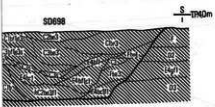
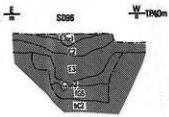
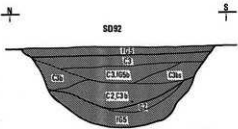
溝 S D97・597 溝 S D94の西側に平行する南北溝であり、その関連性も考えられるが、とりあえず、当溝は上面の大畦畔を画したものと考えられ、後述する。

溝 S D98・698 H区では最も南端の g 345区に位置する溝で、g 3区と g 4区とはかなり趣き異なる。両者は基本的には、断面逆台形状をなすのであるが、g 3区の方は埋土の状況から、一度掘りなおしが行われていたようであり、2段の肩をもつ。上部は幅2.5m、下部は幅1.8m程であり、東に深くなっている。下部の肩口の灰色粘土層中には、菱形土器が横位で出土している。

(fig. 32) その土器を含む上層は、溝 S D93などと同様に灰色系の粘土が埋土となっており、自然埋没したと考えられる。その下層は他の多くの溝と同様、ブロック土が混入する。そして、ちょうど H トレンチと H 6 グリッドの境界付近で溝の形状が異なる。g 4区は、溝 S D90などの他の溝同様、明瞭に切り込まれた断面逆台形の溝となる。幅2.0m、深さ0.8mであり、ほとんどがブロック土によって埋没している。

溝 S D430 H 4 グリッドのみで検出している溝で、直交する溝 S D92・492を切って南北方向にはしる。幅2.2m、深さ0.5mの断面逆台形を呈しており、埋土は溝 S D91と類似する。H 2 グリッ





ドで検出して
いる溝SD291
の南側がやや
拡がるので、
これと合流す
る可能性が考
えられる。
溝SD95 こ
の溝は、f 4
区に位置し、
北側を試掘ト
レンチによっ
て切ってしまったため、その
延長は分から
ないが、長円
形の落ち込み
となると考え
られる。埋土
は、溝SD94
の上層と類似
する。

こうした溝
のそれぞれの

上面はやや落ち込んだ状況となっており、各溝上部にのる整地層は厚く敷かれている。

この整地層は薄いところもあるが全体に検出できる。最終的に中期後葉頃に削平を受けており、溝SD98上層のような中期中葉に相当するであろう灰色粘土層は極わずかに認められるのみである。ただ、H 6 グリッドではI区に拡がる河道との境界に土堤状に残された区域が存在し、その範囲内に方形周溝墓を検出しており、第6遺構面 a 下及び b 上と細分層した。

〈中期方形周溝墓〉

中期に属する方形周溝墓をH 6 グリッドにおいて1基検出している。この方形周溝墓は一旦、墳丘を築き、埋葬を行った後に、さらにその上に墳丘を積み重ねたもので、結果として、2つの墳丘が重複したものとなる。それらを上部、下部とに分けて記述を行う。

下方方形周溝墓 この墳丘は西半部が調査区外となり、一辺8.0m以上である。溝底よりの高さ

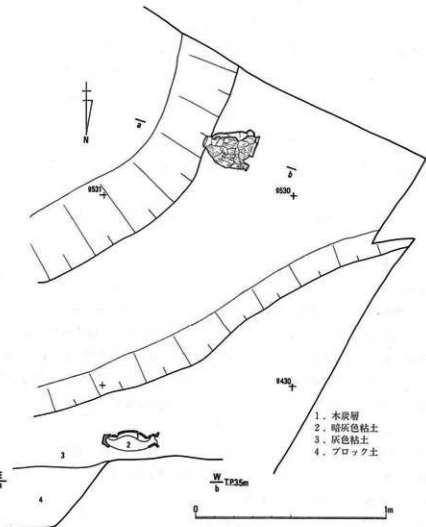


fig. 32 Hトレンチ第6遺構面b 溝SD98上層土器出土状況図

は約1.1mである。墳丘の南法面の中位には、幅0.6m程の緩慢な斜面になった所があり、テラス状をなしており、一見、二段に構築されたものに感じられる。このテラスの東隅には、方形周溝墓築成後に立木が生育していたと考えられる木の根を検出している。

墳丘は比較的にフラットな旧地形を利用して粘土層上に構築されており、その上部に0.3~0.5mの盛土が認められる。盛土は、暗い灰色系の粘質シルトが基調であり、周縁部下位は白色粒を含むものが多く、その上位は黒色及び白色ブロックを含むものを主体としている。中央部は、全体に黒色ブロックを含むものが多い。こうした傾向から、築造前の表層を墳丘予定範囲の低いところに集め、その後、墳丘際を垂直掘りに近い状況で溝を掘削した際に得られた土を墳丘周縁部に用い、その周囲の水平掘りに近い状況のものを墳丘中央に充当しているようである。盛土方法については周縁部から順次中央部に積み上げる一回の工程ですましている。使用盛土と先の溝群を埋めた下部の土を比較すると、墳丘盛土は旧地表下上位の暗灰色系が強いことから、溝群より方形周溝墓は後出すると推定される。

周溝は、四隅の掘削が充分でなく、各辺の中央部が拡がる平面半円形状を呈するもので、最深部もまた中央が深くなるものである。東側の最大幅は2.7m、深さ0.4mを計る。南側は幅2.0m、深さ0.4mである。断面は基本的には「U」の字状であるが、墳丘側の法面勾配が急で、反対側はそれに比べゆるやかであり、「レ」の字状気味である。埋土は黒色、淡灰、灰色系の粘質シルトを主体とする。2本の周溝のうち、溝S D530の方はその法面両側に断面逆台形を呈したブロック土をよく混入する部分が見られることから、上述の溝群の一部の利用を行い、そこを掘削したものと考えられる。

周溝内よりの土器はあまりなく、細片である。土器は、南側の墳丘テラス状の部分より下方の法面で比較的良好に出土している。また、上部墓に使用される盛土中よりの土器などから、畿内第Ⅲ様式古段階頃の時期が与えられる。

墳丘上坦面に穿いた主体部は、3主体と不明瞭なもの1主体である。いずれも残存状況はよくない。

第1主体は、上部の第1主体の直下で検出している。墓壇は西側がせばまった台形状を呈し、2.25×0.85mの南北方向のものである。深さは上部墓との重なりのため0.2m程のみを検出しているにすぎない。しかし、土層断面の状況から判断すると0.6mの深さはあったと考えられる。墓壇には木棺の痕跡のみ検出した。木棺は外寸が2.12×0.7mであり、小口板をはさみこんだ組合せ式と考えられる。土層の状況から、蓋板が早い段階で陥没したものと推定される。

第2主体は、木棺の痕跡は認められず、また墓壇掘り方もその側面にあたるであろう東肩が不明瞭であることから、主体部とするのには保留したい。

第3主体は、主軸を東西方向にし、南東小口部分を第1主体に切られている。そして、東は調査区外であることからその全容は不明である。墓壇幅は1.18m、木棺幅は0.75mを計る。

第4主体は第3主体に南接して平行する。本主体部もまた東側小口部を第1主体に切られ、そ

の全長は不明である。墓墳の幅は0.68m、木棺幅は0.52mを計る。

上部方形周溝墓 上部は一辺9.0m以上の方形を呈すると考えられる。この墳丘に特徴的であるのは東側一側辺中央よりに突出部状の陸橋がとりつくことである。この陸橋部は長さ3.0m、幅3.0mであり、上坦面は墳丘から外方へ行くにしたがって下降して、墳丘より一段下がった周辺部にとりつく。特に外方半分のスロープが急であり、その下端端は溝SD597に切られている。全体的な形状は、一見、古式の前方後円墳の前方部を思わせる。陸橋部は下部の周溝が暗灰色粘土系の土砂によって0.7m自然埋没した状態から掘削され、上へ0.35m程積み上げられている。上方に積み上げた土砂も暗灰、青灰色の粘質シルト系の下部の周溝埋土と共通したものであり、陸橋部両側の周溝埋土をその盛土にあてたと考えられる。盛土の方法は、内方から順次、積み上げを行っており、この陸橋部が付随的なものであったことを示すものと推察される。

墳丘の四隅は丸くなっており、その上坦の肩も丸味を持っている。高さは周溝底より1.2mあり、比較的腰高な墳丘形状をなす。墳丘は、下部の墳丘をほとんど利用するように、上方に0.3～0.6mの盛土を覆い被せている。使用している盛土は、灰色、青灰色及び、黒色・白色粒を含んだものを主体とするブロック土である。これらの土は中期中葉頃を中心として堆積したと考えられる土砂であることから、下部周溝埋没土及び表層を中心として採取したものによっている。盛土方法は、墳丘周縁部の下端から、水平気味に積み重ね、下部の墳丘上坦レベルに達したところで周縁部から中央に積んでいる。そして、その墳丘の周溝がある程度、埋没してから、それら全体を黒灰色の有機土細層が覆っている。

周溝は比較的幅の安定した約3.0mのものである。ただ、断面形状は東側のものが「U」の字形を呈し、南側のものがゆるい「V」の字形を呈する。周溝埋土は、灰色粘土を主体とする。周溝底もまた、比較的平坦であるが、陸橋部の両側辺のみが落ち込んだ状態となっている。このこともまた、陸橋部が墳丘本体より後で付随的に作出されたことを呈示するであろう。周溝から出土した土器は南側隅に集中する傾向が認められる。うち一点は周溝底より横向きで変形土器の半完形のものがあり、またこの墳丘に直接伴うかどうか分からないが、周溝外側の肩口に壺形土器の完形が横向きで出土した。両者はいずれも畿内第Ⅲ様式古段階に属すると考えられ、下部のものどあまり時期差がない。

主体部は、2主体と不明瞭なもの1主体が墳丘上坦面にある。

第1主体は南北方向を主軸とした方形の墓墳である。中に木棺を納めたと考えられるが、双方とも北側小口が広がっている。墓墳掘り方は 2.87×1.45 mを計る大きなもので、深さは0.5mである。木棺の痕跡は外寸で 2.38×0.82 mを計る。土層の状況より、木棺は8～10cm位の厚さがあったものと考えられ、上蓋の陥没状況も認められる。木棺側縁に充填した土砂と木棺内に落ち込む土砂及びその上層の土砂には若干の差異が認められた。前者は暗青灰、灰色を主体としたブロックを含む粘質シルトで、後者は緑味の暗青灰色を主体とした粘質シルトでブロックが顕著でない。

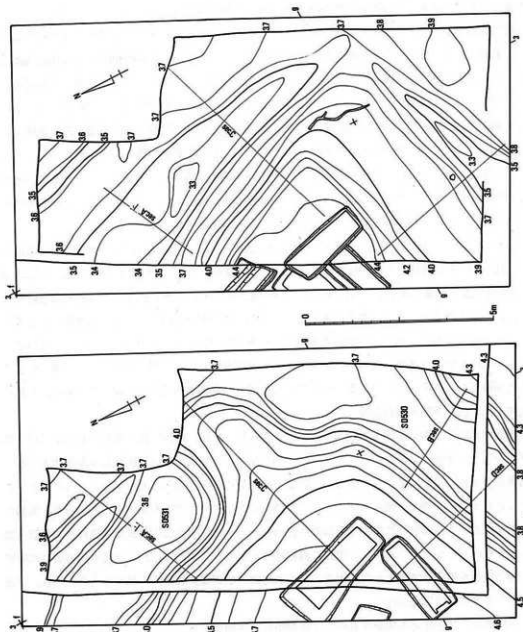


Fig.33 H5 グリッド第6遺構面 b 上部、下部方形周溝墓平面図 (等高線はメートル)

第2主体は第1主体と直交しており、切り合い関係をしめさず、東西方向の主軸である。方形の墓壇掘り方は $2.32 \times 0.93\text{m}$ を計り、同様に 0.5m の深さであるが、幅がせまいため深く感じる。木棺の痕跡は西側小口の状況から、小口板をはさみ込んだ組合せ式木棺であることがわかる。外寸は $2.1 \times 0.62\text{m}$ を計り、西側小口がやや拡がる。墓壇の埋土は第1主体と同様な傾向にある。

第3主体は墓壇小口部と考えられる。しかし、その大半が西側の調査区外に出るため不明とするしかないが、そうであるならば、方形の南東-北西方向を主軸とし、幅は 1.0m のものとなる。

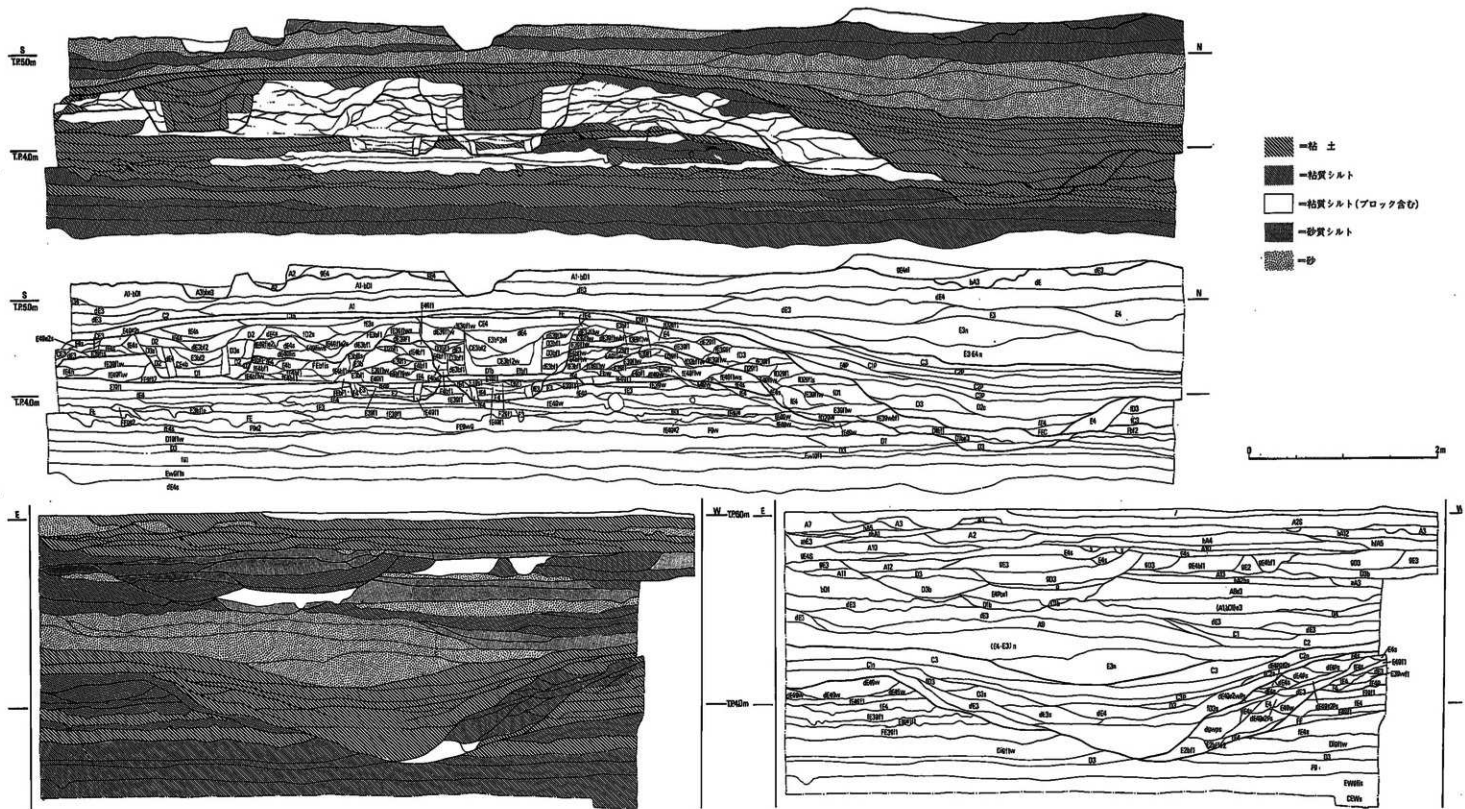


Fig. 34 H5グリッド第6透断面 b 方形周溝基南北及び東西土層断面図

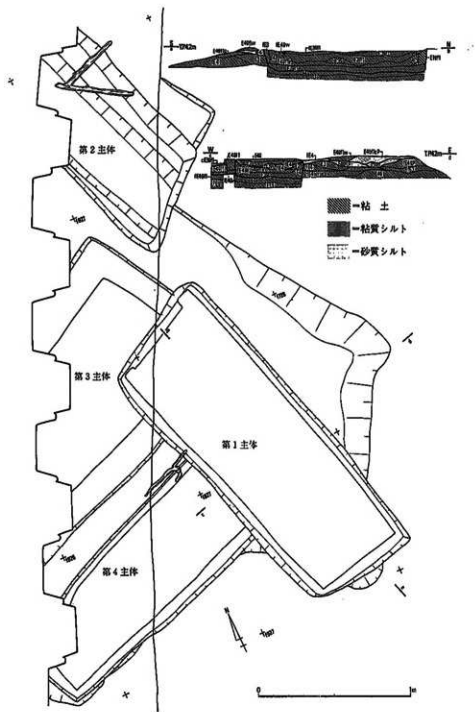


fig. 35 H5グリッド第6遺構面b下 下部方形周碑墓主体部平面、土層断面図

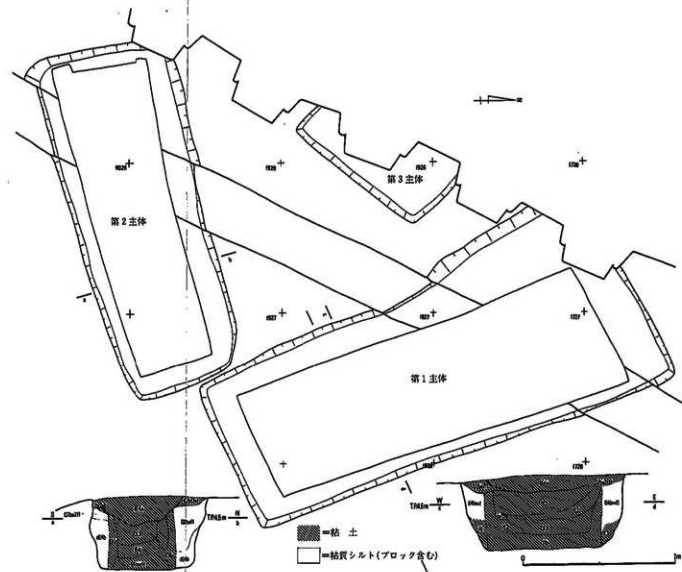


fig. 36 H5グリッド第6遺構面b上 上部方形周碑墓主体部平面、土層断面図

この方形周溝墓の他に今回の調査区では、その周囲で確認することはできなかったが、HトレンチとIトレンチの保存区域の間に土堤状の起伏範囲を想定するならば、東大阪市山賀遺跡の中期初頭の3基の方形周溝墓のような土堤起伏を利用し、列をなして築造するあり方も予期することは可能である。g 3区南半に若干の起伏の兆候の見られるものがその候補として上げられる。

また、Iトレンチ全体で検出した河道の北方延長が昭和59年の大阪市文化財協会の調査区の東

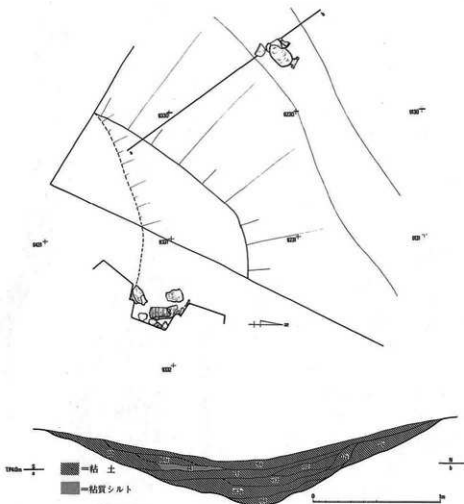


fig. 37 H 5 グリッド第6遺構面 a 下 周溝 S D530 土層断面
及び下層土器出土状況図 (Sec. B)

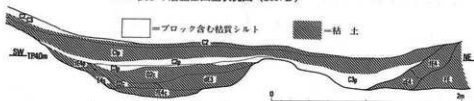


fig. 38 H 5 グリッド第6遺構面 b 上 方形周溝墓周溝 S D531
土層断面図 (Sec. A上)

側、大区画のEFN区に認められ、その西岸にあたる地点から方形周溝墓が南北に並んで検出されることから、こうした所見は、大河道域両岸での方形周溝墓の立地分布を充分に予測される状況下にある。

第6遺構面aは、bの遺構面全体を明緑灰色系の粘土に覆っており、その間に有機物層と褐色系の砂層などと互層になる。

下面の明緑灰色粘土層では、それを掘り込んだ0.3~0.5mの幅の暗灰色粘質シルトを埋土とする深さ0.3mの東西溝をHトレンチ中央de45区で検出した。これと平行して南側に2本、そして異なった方向に1本の小溝を検出している。

Hトレンチ中央、北半でのこの面の顕著な遺構はこれのみであるが、それより上面では、足跡が2層に分かれて認められた。

足跡群 足跡群はH区中央でやや地形が下降する地点から北半に分布し、a67区とc5区を中心にする2つのブロックに分かれる。その中で特に濃密なのは、H2グリッドのものであり、不規則なものがほとんどである。

これとHトレンチのものは北側のブロックの中でも2者に分けることが可能である。

南側のブロックのものもまた、東西に分離することが可能である。そのうち、東側のものは不規則である

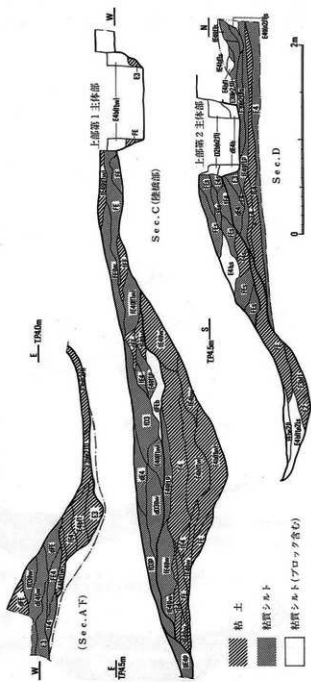


fig.39 H5グリッド第6遺構面b上 方形周溝墓陸橋部、周溝部土層断面図

が、西側のもは列をなすものが多く認められる。

これら各ブロックの間には分布しない一定の幅が存在し、その幅の帯は1.0m程で東西南北と比較的直線的である。こうしたブロック間の方向性は後述するH区南端の「L」の字に曲がる大畦畔の東西南北軸とも呼応するようである。足跡分布における各ブロック間には調査区内では小畦畔を検出することはできなかったが、本来この面には小畦畔が存在したことを示唆するものと見て間違いないであろう。

〈大畦畔及び溝〉

H区の南端では、大畦畔と溝、落ち込み、ピットを検出している。それらの多くは大畦畔の関連遺構である。この大畦畔はH区の南端に「L」の字に曲がるもので、上坦が0.2~1.8m、下端裾が1.6~3.4mの幅で、最大高が0.7mの断面台形を呈するものである。これとf g区において西接して南北方向に平行する溝S D97とこの溝に直交して分枝する東向方向の溝がある。また、中期方形周溝墓の周溝は埋没しているが、くぼんだ状態となってこれら溝と接して存在する。溝S D97はg 4区南西隅で分かれ、大畦畔のみが東西方向に屈曲するがその東端部南側の平坦面に円形の落ち込みを検出している。

大畦畔の多くは盛土によって構成され、その盛土は緑灰、暗緑灰、灰、暗灰色の粘土を主体とし、土層にカルシウム粒及び砂が混入している。最も下部は、北側裾に0.15m程の高さで幅1.0

~1.2mに削り出した畦畔状の起伏が認められる。

そして、その南側に同じような起伏を盛土した後、北側の縁部を高くしながら順次積み上げる地点と、南側からさらに0.15m程盛り上げ概略を整えた後に北側に補充してその上部を前者と同じく積み上げている地点とがあり、盛土方法はそれほど規則性はもたない。ただ、北側縁部を最終的に優先して盛土していることは共通しており、北方側を意識して整えているようである。また、g 4区の南

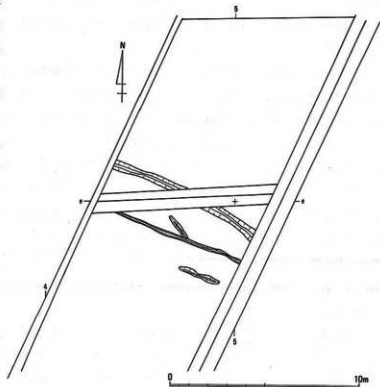


Fig.40 H トレンチ第6遺構面a下 平面図

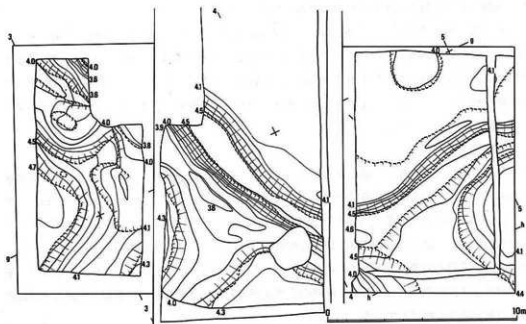


fig.41 H区南端第6遺構面 a 大畦畔平面図（等高線はメートル）

側法面があまり明瞭なものでないことも対照的である。大畦畔の使用盛土はその内容から西接する溝S D97からの可能性は乏しく、盛土当初の旧地表を薄く削いでいるようであり、南側、西側にその採取地を求めるよりも、北側の平坦面の削出の際に生じた土砂の表面的な採取にとどまるものと考えられる。

この畦畔の築造時期は、使用盛土やその盛土中より、畿内第Ⅲ様式の土器片が散見されることから、当該時期以降と考えられる。そして、先の方形周溝墓よりも後出する。

溝S D97は幅0.6~1.6m、深さ0.6mのものである。断面は南北方向のものが「V」の字状を呈し、東西方向のものが逆台形を呈する。両者の合流点付近は幅広くなっている。埋土は暗灰色、緑灰色の粘質シルトを中心として、その間には有機物層も含まれ互層となっている。この溝はⅠ区の河道よりの引き込み用の溝であろうか。ただ、下層はあまり水の流れた形跡はないものの、中層には砂層が含まれており、その形跡がうかがえるような状況である。

最も東側で検出した落ち込みは、ゆるく落ちる深さ0.5m程のものであり、埋土はこれも有機物を含む緑灰色の粘質系シルトである。

H区のこれらの遺構上には、全体に暗緑灰・緑灰の細層と有機物層、砂層などが6層程の互層をなして覆っている。

H区第6遺構面で見られた遺構の性格であるが、大畦畔、整地層と中央・北半の遺構面の平坦さから、水田域であったと考えてよさそうである。弥生時代中期全般を通じて、何回か手を入れ、継続して経営されたものと推測される。その際の水田区画は100m近い比較的に大きな単位であったことが足跡群より相定できる。

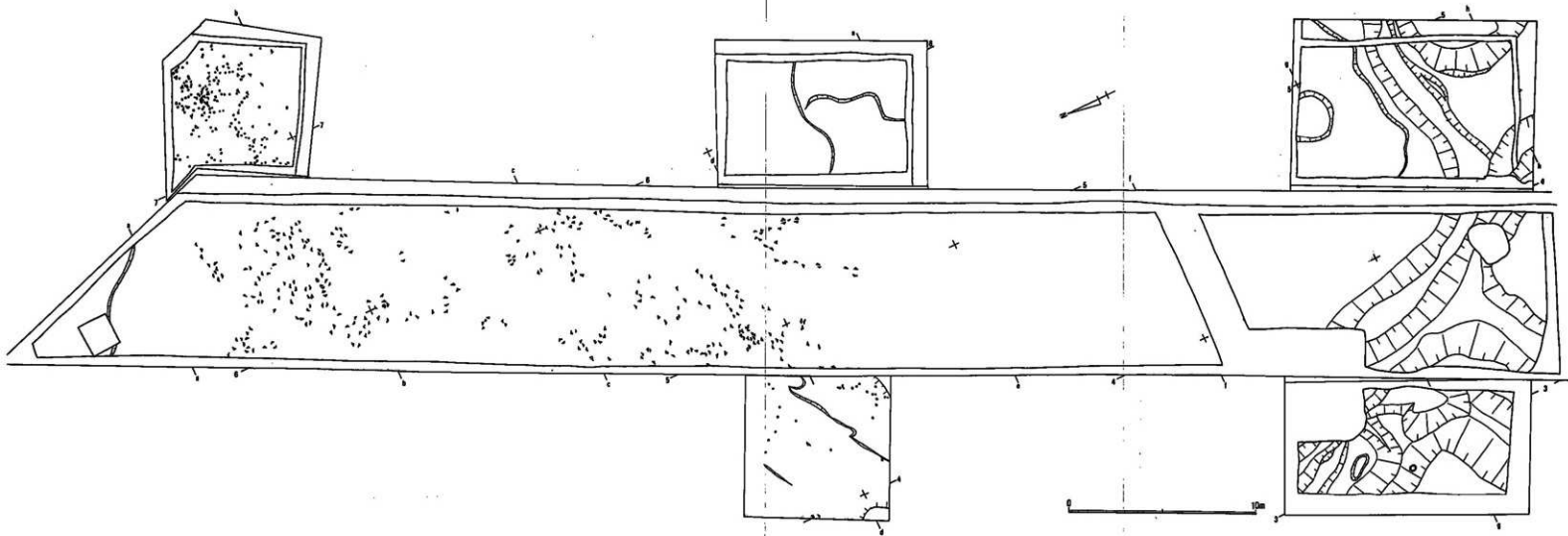


fig. 42 H区第6遺構面a 平面图

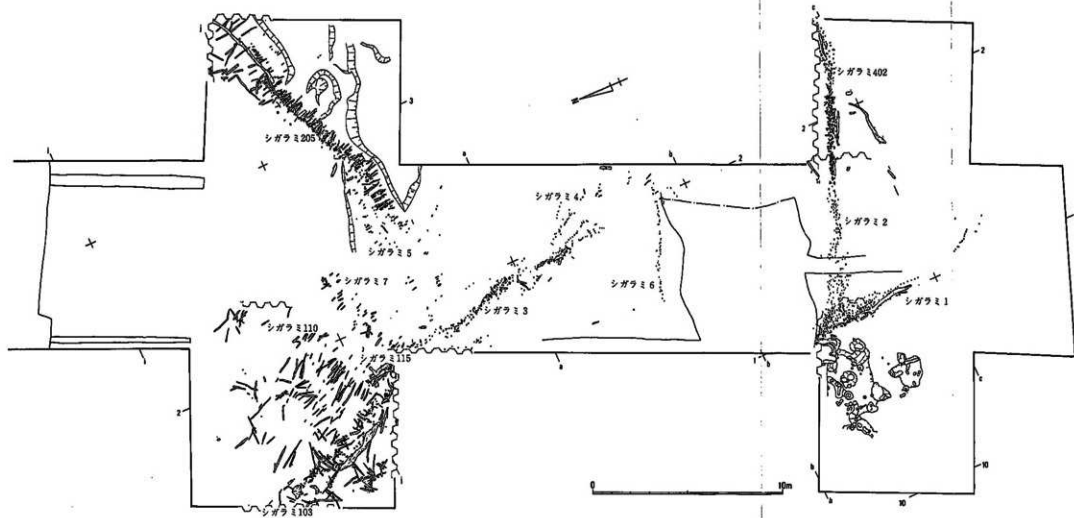


Fig. 43 I 区第 6 遺構面 d シガミ群平面図

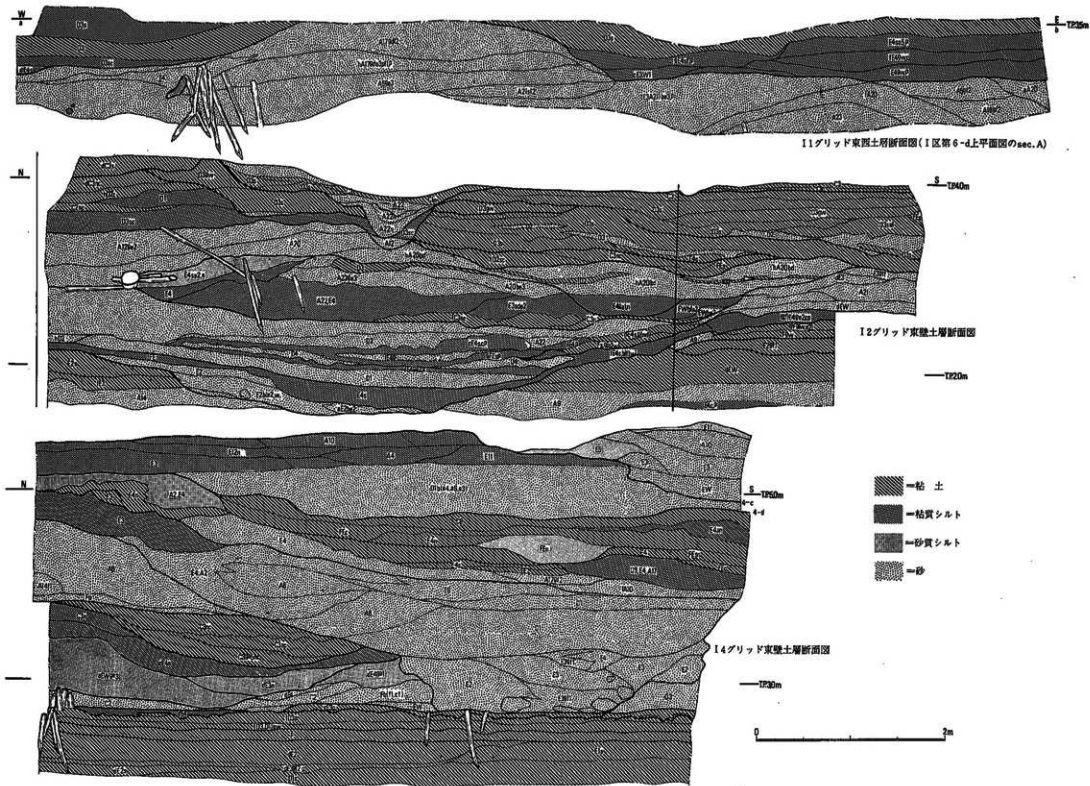


Fig. 44 I区第6連構面d シガミ関係土層断面図 (11・2・4グリッド)

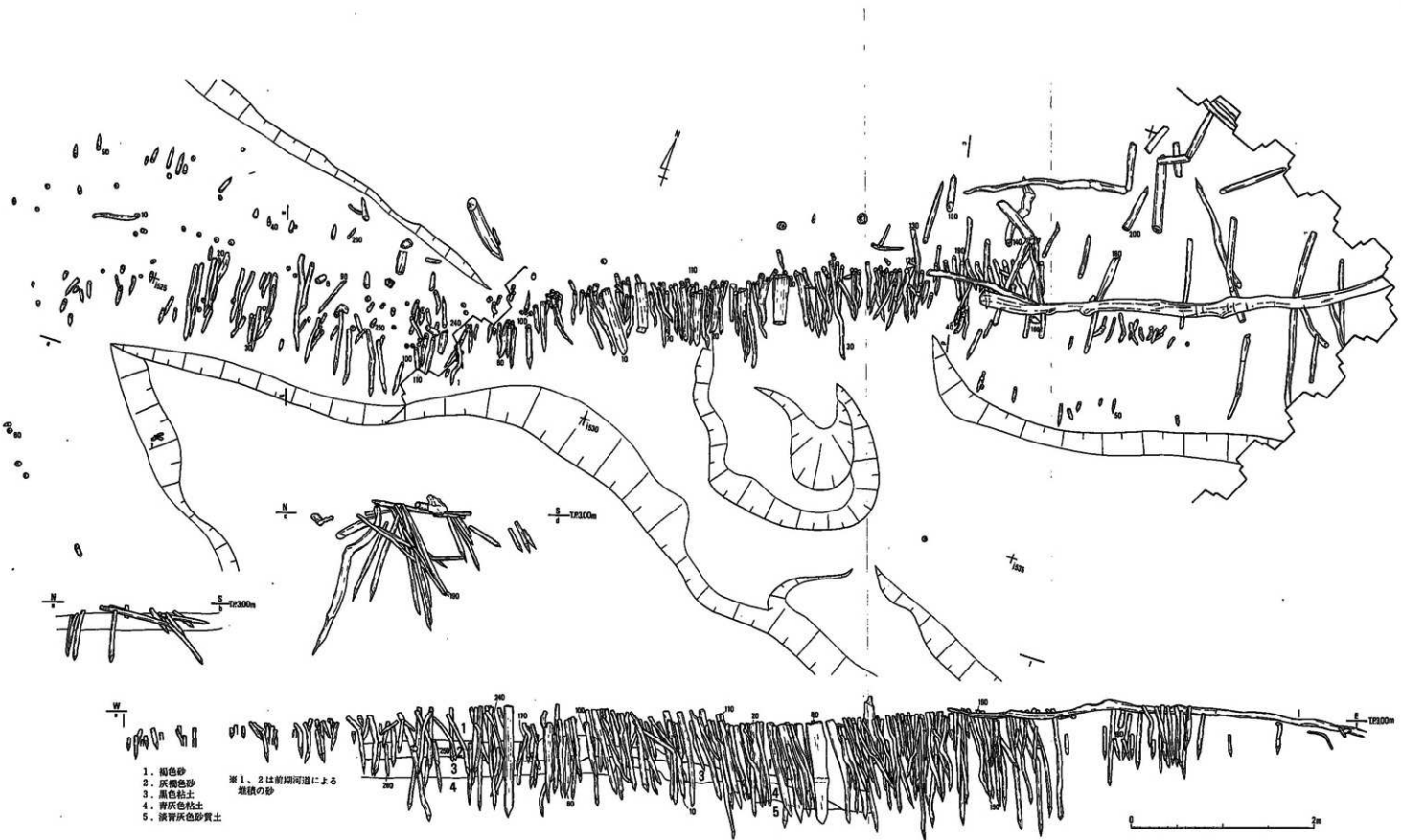


Fig. 45 I 区第6遺構面 d シガラ 205平面、立面図

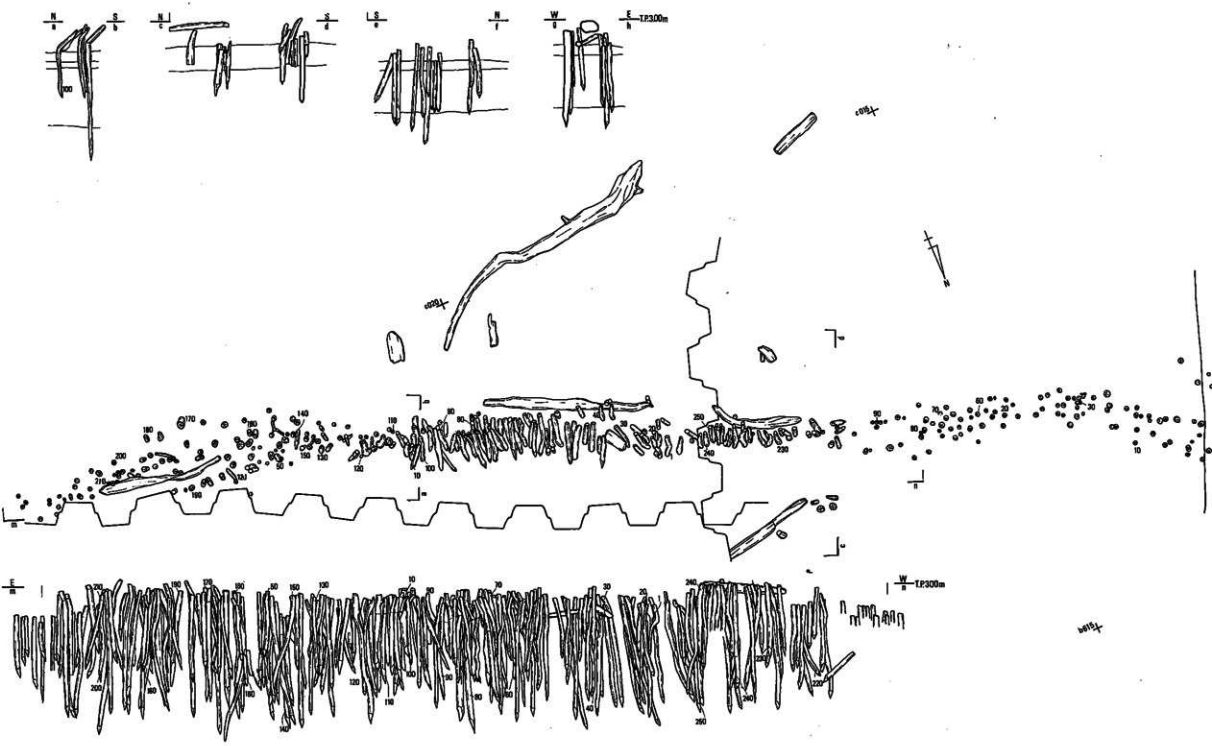


Fig. 46 I区第6遺構面d シガラミ1・2及び402平面、立面図



Fig. 47 I 区第 6 遺構面 d シガタミ 3、4、6、7、103、110、111、112、115 平面、立面図

D. I区

第6遺構面のI区は、Iトレンチ北端とI3・4グリッドの南西隅、南東隅で河道の肩を検出しただけで、ほぼ全域が河道範囲となっている。したがって、河道内の流路がもたらす土砂とそれによって変化する流路の運動によってその大半が平面的に埋没してゆき、最も新しい流路は弥生時代後期以降の垂直方向の埋没（河道幅の限定）になって継続する。

この時期の河道内埋土は、青灰・灰・赤褐色系の砂層、砂質シルト、粘質シルト、粘土による複雑な堆積状況を呈する。その上部は全体的に暗灰色系の泥土状の土層を呈するが、それらほとんどの土砂は畿内第IV様式の堆積と考えられ、シガラミ及び枕杭がその頭を見せはじめるのは、ほぼ全て第6遺構面の最終面であるd面からである。

シガラミ類の他には立木類を樹立した状態で検出しており、それらの間には溝と溜り状の落ち込みが存在する。

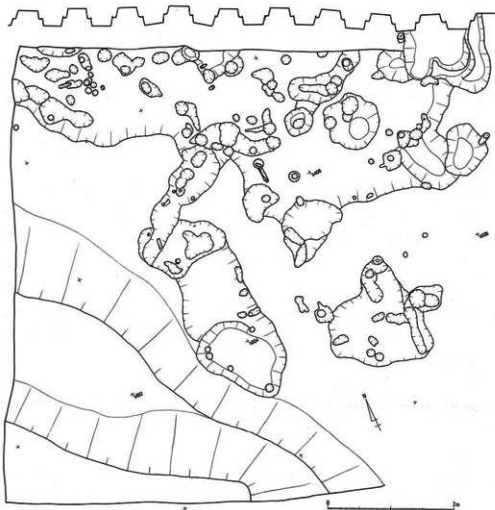


fig.48 I3グリッド第6遺構面d シガラミ1及びピット群平面図

〈シガラミ及び杭列群〉

I地区全域にシガラミ、杭列が存在し、中期全般にわたって杭が打ち込まれ、その総数は検出分だけで1700本をこえる。

中期初頭の杭列は北側に集中しており、これは前期よりの河道部分が埋没した位置に相当する。流路はこの段階ではやや南側に位置を変え、シガラミ5・205の南側に存在したと考えられる。この段階のものとしてはシガラミ5・205、8、110、7・115があげられ、いずれも基本的には合掌形の断面形状を呈すると考えられる。

シガラミ110 シガラミ110はI1グリッドのi1区を中心とする東西方向のもので、全長11m程である。検出杭の中では最も上部が良好に遺存するものである。上部は粘質系の土層が砂質系に変わるところで折れているものの、連続するのが分かるように0.8m程の長さで倒れ込んでいる。シガラミ5・205 シガラミ5・205はI2トレンチ、I2グリッドにまたがる東西方向のもので、18.5mの長さを検出している。中央部分に関しては、南側片面に少なくとも4列の杭列が打ち込まれ、杭材もミカン割りした材を矢板状に使用して、何度も補強した跡が見られる。この中央の部分は周囲の土層状況からも水の直接的な攻撃面に相当したと示唆される。また、数度打ちなおしたことは杭先端の打ち込み角が異なることから分かる。(fig.45)

杭の根入れの長さについては、0.12~1.8mであるが、打ち込み面から、下層の粘土、粘質シルトの支持層に接近しているものは短く、粘層が下降する深い部分は長くなっている。

最も東側では打ち込み杭数が粗くなり、まばらに杭が分布する。そして、上部には2.3m以上の径8cmの横木がかけられており、護岸近くの状況を呈するのであろう。

シガラミ7・8・115 これらはI1グリッドとI2トレンチの間のi2・3区に散在するもので、6m程の東西方向範囲に拡がる。残存状況が悪く、0.2~0.5m程の杭先端部のみを検出であるが、本来はこれらで一組のシガラミを構成していたと考えられる。

これらのシガラミ、杭列の間及び直上面では土器が出土している。特にシガラミ5の上面には流水文様の壺形土器片が散乱するような状況で出土している。また、シガラミ110の折れまがった木と根入れ部分との間の砂質土にも土器片が認められた。シガラミ7・8では流れた杭材と同じようにして、畿内第I様式の土器が多く出土しているが、これらは全体に畿内第II様式に属する土器を中心としている。

ところで、シガラミ5・205がのる砂層については、畿内第I様式に属する土器がほとんどであるが、その上層下部に第II様式細片をわずかに含んでいる。このことは、前段階に固定していた流路がこの段階で埋没しその活用が停止するのを防ぐため対処したものであったのではないかと考えられる。

シガラミ3・4・103 シガラミ3・4・103は南北方向2ライン沿いに帯状をなして連続する。それらは南北25.4mを検出している。使用材は4cm前後の細いものが中心で一部転用材が見られる。杭の根入れは長いもので1.4m程あり、いずれも直立して打ち込まれており、護岸機能を

果たすものと考えられる。流路が存在したと考えられる西側の水際に相当する箇所には、自然木の横木が据置かれている。また、これら杭間には、細木などとともに土器、石器がからみついており、特にシガラミ103については稲穂がひっかかった状態で出土した。

これら遺物より、この杭列群は中期中葉（畿内第Ⅲ様式）に属すると考えられるが、シガラミ4は中期後葉（畿内第Ⅳ様式）の可能性がある。

シガラミ2・402 シガラミ2・402は調査区南端、トレンチに直交して東西方向に列をなしており、先の杭列群より杭の密集率が非常に高い。検出した長さは18m程で杭が4～5列に重なり合っている。杭の根入れは長いもので1.7mのものがある。

そして、これに南斜めから交差するシガラミ1があり、これと交差する部分から東へ6mは上部の横木が欠けるが、その東側は存在する。北側に10m程離れて平行するシガラミ6が存在する。これらは上部の出土遺物から中期後葉の時期を与えられ、特に、シガラミ2と1の交差点の直上で完形の甕形土器が出土する。ただ、シガラミ1の一部は前期～中期中葉のものを含んでいる可能性がある。この段階の流路はシガラミ2・402とシガラミ6の間に存在すると考えられ、双方は流路の両護岸の杭列にあたると思われる。これらの中で、シガラミ402は上部が斜めに南側へ倒れ込んで合掌形状をなすかに見えるが、杭の根入れ位置の砂、砂質シルト主体の上部が水流のまき込みによって、ロート状にえぐり込まれ岸側に倒れ込んだもので、この状況は土層断面によって観察できる。

したがって、本来、打ち込まれた方向性を示す粘土、粘質シルト層で構成される下部は直立している。シガラミ2・402に用いられる材は、細い木の枝が多く、何度も屈曲するものや枝はらしいの時の切断面をわずかに調整しただけのもの、径3～4cmの細長いものがある。細木を使用するためか、量は多くなり根入れの深さも全体に長さ160cmに及ぶものが多い。

シガラミ1 シガラミ1は11.5mの長さを検出しており、北側の2に近づくと、杭の使用量が増加する。全て、杭は直立する。また、シガラミ2の交差点から西側では細い材の中に径10cm前後の太い材が目立つ。そして、それより西方では、杭の抜け穴とともに、そうした水流によって巻き込んで生じたと考えられる落ち込みがI3グリッド北半に存在する。落ち込み内には、畿内第Ⅰ様式の土器細片が混じる。各杭の根入れは0.05～0.42mであり、比較的浅いが、中でも長いものに太いものが多い。こうしたことから、シガラミ1の東側は西側のものとやや異なっており、両者を明確に分離することは困難であるが、2群の杭列及びシガラミ2が重なり合ったものと言える。

シガラミ6 長さ7m程を検出しているこのシガラミは、ほぼ一列で構成され、直立する。根入れも0.4～0.5mと全体に浅く、細い材である。非常に短期的なものか、北側護岸が安定していたものと考えられる。

中期の主流路は一定の河道の範囲内を南へ移動させ、シガラミ・杭列もそれに伴って移動するが、初期のものはしっかりとした材を用い、組んでいるのに対し、時期が下降するにつれて、細

い粗末なもので量をこなすといった状況へと変化する。これらは北側のH地区に想定される水田へと機能すると考えられるが、それにしても、この継続的な枕の打ち込みと維持管理、規模は南方約400mに広がる亀井遺跡の集落を前提としたもので、互いに直接的な不可分の関係にあったと考えられる。

〈河道内での堆積〉

I 区の弥生時代中期において、特にその後半は土砂が多く堆積する。それらは厚いところで2m近く、主に粘質シルト系の泥土を中心とする。

第6遺構面d上及びcは先のシガラミの新しい群があらかた埋没した状況下であり、それらに影響された流路がくぼみ状の溝となって存在する。

溝S D117 まず、シガラミ3・4・103の西側沿いの南北方向にあるもので、I 1グリッドの溝S D117下層とその延長のものがあがる。これは北側の幅が3.0mであるが、南側に行くにしたがって6.0mをこえるものとなる。深さも0.7mから南へ行くと0.1m程となり浅くなる。埋土は全体

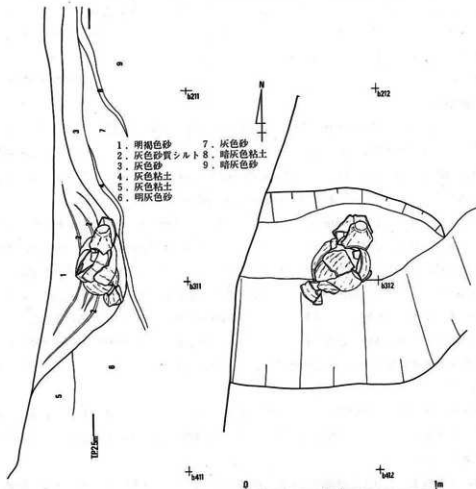


fig. 49 I トレンチ第6遺構面d上 河道10第5流中層土器出土状況図

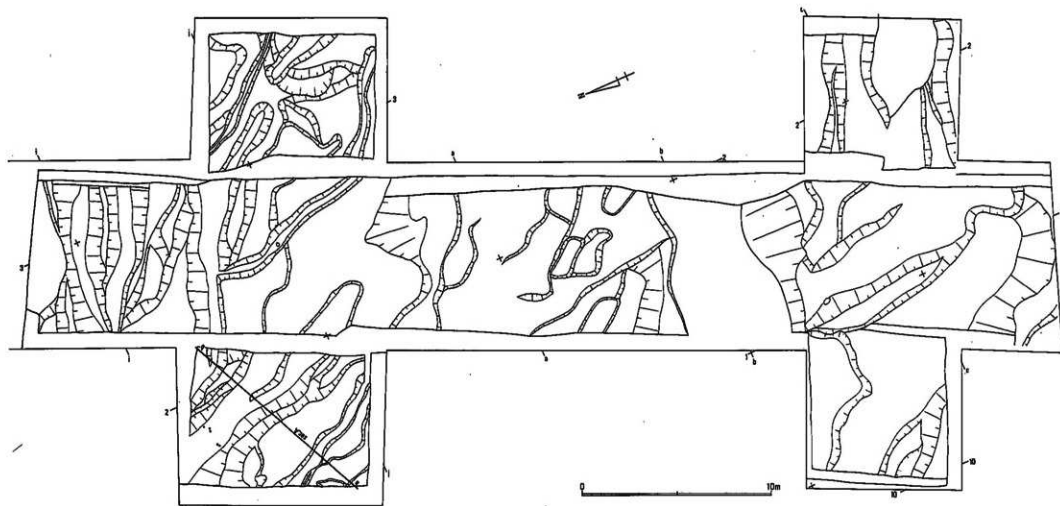


fig. 50 I区第6透模面d上 平面图

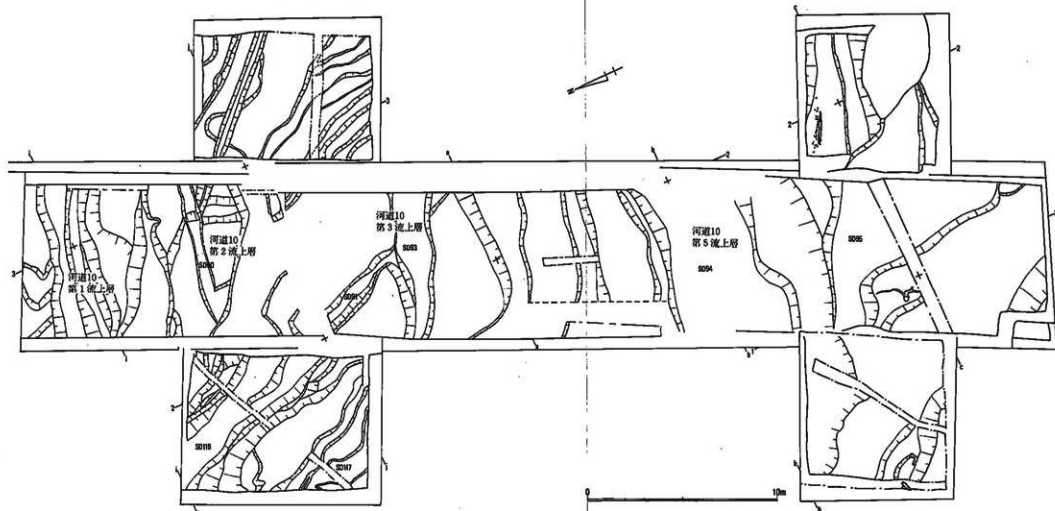


Fig. 51 1区第6連線圖c 平面圖

にカルシウム粒を多く含む暗灰色粘質シルトであり、砂層細層を含む。溝SD117下層の溝底より、木製品とともに土器片も出土しており、畿内第Ⅲ様式のものである。

溝SD116 I区の北側は東西方向に幅1.0～2.0m程の溝が多く見られる。うち、Iトレンチの最も北側のものは河道域沿いを流れるもので、この溝の北肩は河道北岸と共通する。埋土は暗灰色の粘質シルトで畿内第Ⅰ様式の土器を含む。したがって、Iトレンチで検出した北側岸は0.2～1.6mの幅にすぎない。

それらの溝群の中には南北方向のものもまざる。西側の溝SD117と平行する溝SD116は、I1グリッドとIトレンチにまたがり、Iトレンチ中央でとぎれる。これは、溝SD117と同様、南側で幅広かったものが北側でせばまっており、その最もせまくなる場所では幅が3.2mであり、深さ約0.5mとなる。ちょうどその地点に、5本の杭が溝主軸と直交して垂直に打ち込まれており、ダム的な機能を果たしたものと考えられる。埋土は上層が砂まじりの暗青灰色粘土で、下層が茶味暗灰、緑味灰色の粘質シルトでその上部は砂と植物層及び黒色粒を含み、下部は白色粒を含んでいる。埋土中より木製品が出土しただけで、詳細な時期は不明である。

これらの他に、Iトレンチのi2区で両肩を垂直に掘り込んだ断面「コ」の字形のしっかりした溝SD90がある。この溝の埋土は淡灰色系の粘土であり、H区の溝SD96・696との関連性が考えられるが、下部の中期初頭に属するシガラミよりも上位にあり、両者の関係はつかめない。河道10 シガラミ2・402と6の間には、河道10第5流（溝SD94）を検出している。これは、中期の上位の堆積を促進する中心的な役割を果たす主流路である。幅は8.0m、深さが1.6mであるが、レンズ状の堆積の厚さは2.1mある。溝底は西に向かって下降する。堆積土は荒砂を含む灰・褐色の砂層を主体とし、その最下層は灰色系の砂質シルト層である。中層下のIトレンチ西側の

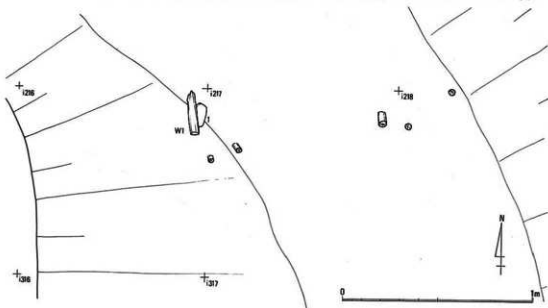


Fig.52 I1グリッド第6遺構面c 溝SD116遺物出土状況図

南岸付近には、立木による水流の巻き込みのえぐられた部分で完形の壺形土器が横位で出土している。この他にも、畿内第Ⅰ様式から第Ⅳ様式までの土器が少量ながら、まんべんなく出土する。溝S D95 東西方向の河道10第5流の南側に南から流れ込む溝S D95がある。この溝の位置はⅠ区全体の河道幅を示す南側岸をⅠ3・4グリッドで0.5~1.2mの幅で検出している。そのちょうど中央のⅠトレンチを中心としてその岸を分断し、えぐり込んだ鞍部を形成するが、その底部にあたる。先ほどのシガラミ群で言えば、iライン上のシガラミ1の東側沿いに幅2.4m、深さ0.5mの溝となって検出している。また、この溝と河道10第5流の交差地点に東から流れ込む溝がある。この東西溝と河道10第5流の間はシガラミ2をはさみ込んだ状況を呈した小規模な土手状のものとなって存在する。これらの埋土は溝S D117とよく似るが、全体的に粘質がまさる。

第6遺構面cの上は、河道10第5流上層の両岸からⅠ区南半を中心に粘質シルトが覆っており、北側をのぞいてシガラミ群の影響が地形の起伏からなくなる。

第6遺構面bは、河道がⅠ区南半にせまめられる段階である。河道10上層は幅10m程であり、その両岸は土手状に若干のふくらみをもつ。その南岸のⅠ4グリッドでは、河道10に平行して東側では幅5.0mの断面皿形の溝がⅠトレンチで大きく拡がり、Ⅰトレンチで大きなくぼみとなる。

また、Ⅰトレンチ南西隅から南北方向に流れる溝がⅠ3グリッドで河道10上層と接するあたりで幅1.0mを残して西へ屈曲する。この溝は幅5.0mのもので断面逆台形状を呈し、深さは河道城南岸から1.4m程である。埋土は最下層が植物層を含む黒味があった青灰色粘質シルト、中層が緑味の暗灰色粘質シルトでカルシウム、植物層を含んでおり、上層は同じ色相で粘土となっており (fig.12) 水の流れの跡が顕著でない。この溝と同様にⅠ3・4グリッドとⅠトレンチ南端部は、河道10上層の土手状の起伏と相まって、一種の大きな溜り状の落ち込みを形成し、終始、水がよどんだような状況で埋没したと考えられる。

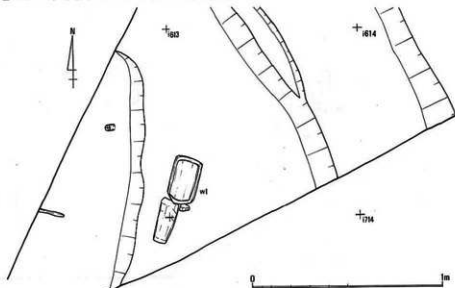


fig.53 Ⅰ1グリッド第6遺構面c 溝S D117木器出土状況図

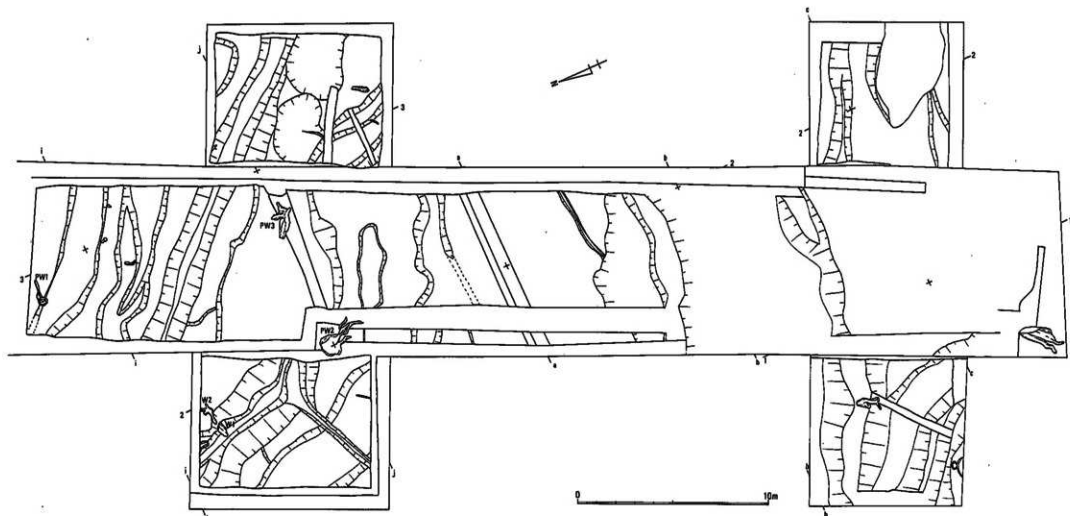


Fig. 54 I区第6遺構面b 平面図

Tab. 4 I区第6遺構面a・bの立木の樹種(風)

Iトレンチ	
Pw1	Pw3
Pw2	ヤナギ
I3グリッド	
w1	ヤナギ
w2	ヤナギ

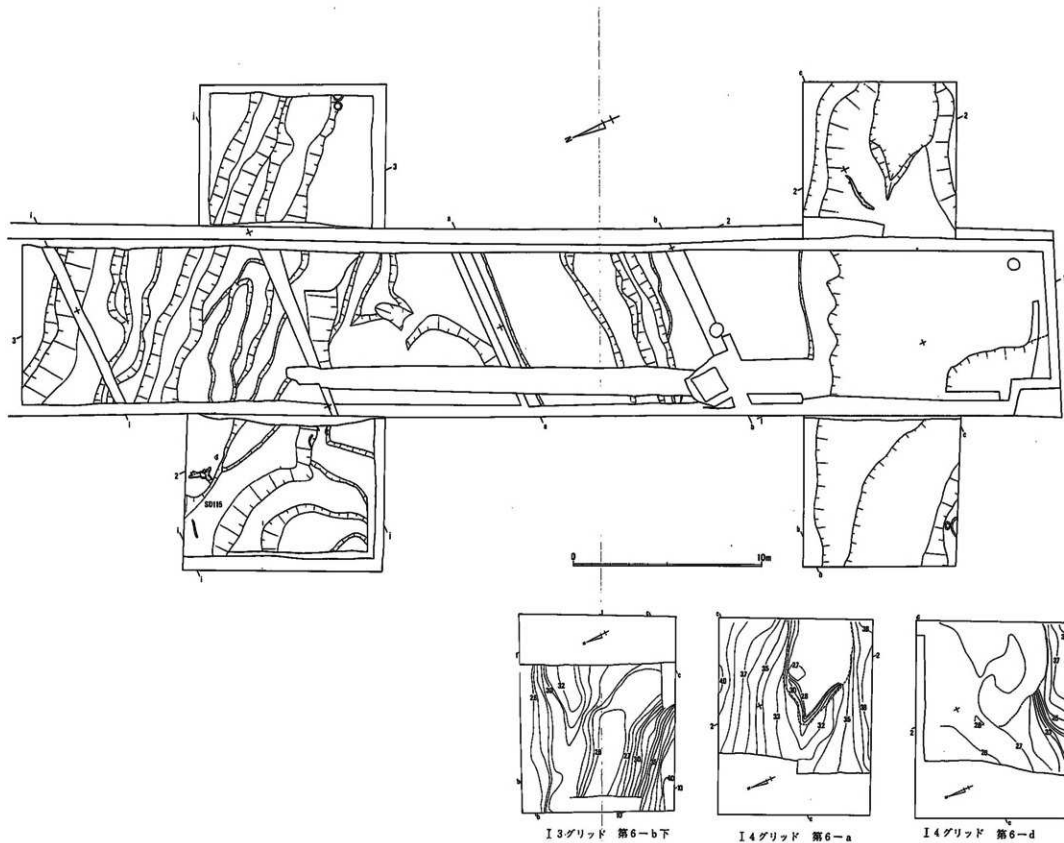


fig.55 I3~4グリッド第6建構面a~d 平面図及び等高線図

河道10上層の北側の10m程は落ちついた状態で、河道のすぐ北に平行して細い溝が存在するのみである。それより北側は、下面に影響された落ち込み状の溝や不規則な落ち込みが広がる。唯一、Iトレンチ、I 2グリッドにまたがって、幅2.0m、深さ0.4mの断面「V」の字形に切り込んだ溝を南東—北西方向、一直線に検出している。この溝は、下層に砂が堆積している。他に、下面の溝の落ち込みを利用した最も北側の断面「U」の字形の幅2.0m、深さ0.4mの溝もまた、砂が堆積しており、I区北半の中ではこの2本のみが多く水の流れたことを示している。うち、北側の溝が埋没状況より先行すると考えられる。

第6遺構面bは植物層が多く混じり、互層をなしているとともに立木も溝と落ち込みの肩付近に数多く生育している。また、立木にはヤナギ属が多いことからこの面は泥湿地状態にあったと言える。

さて第6遺構面aはbの起伏を踏襲するが、河道10は完全に埋没し、土堤状の高まりを形成する。そして、新たに、その起伏の両側がくぼみ、bラインの北側3mのところではほぼ東西に幅1.4m、深さ0.25mの溝が掘られている。一方、南側は下面の各溝と落ち込みがつながった状態となっており、上面の第5遺構面の河道域を決定づけるであろうくぼみが発達し、形成されている。

これらの落ちには、H区同様、緑灰色・暗灰色粘質シルトと植物細層の互層が南端部をのぞいてI区全域にまんべんなく覆っている。その南端部は、この細層が切られており、これは、I 4グリッド東半で見られる溝底を0.6mの深さにえぐった水流によるものであろう。(fig.44)

E. J区

J区の第6遺構面における堆積は、H区では失われたであろう下半部に相当する淡灰色系の粘質シルトが厚いことから、その土砂の堆積は厚さ0.6mを計り、安定した堆積状況を呈する。

第6遺構面cは前期の包含層である黒色粘土層をベースとし、不規則な落ち込みがあり、特に中央部に集中する傾向を見せる。比較的安定した面であるが、深さ5cm程の溜り状の落ち込みを形成している。落ち込みは不定形なものばかりであるが、全体的に西側に下降し、ほぼ東西方向に向く傾向がある。Jトレンチ南端では幅0.2m程の小溝がはしる。

第6遺構面bは、水田面を形成すると考える。しかしながら、明瞭な畦畔は検出しえなかったが、不規則な畦畔状隆起は存在する。fラインに沿って東西方向のものが認められ、f10区の交点付近で南北方向に分岐する状況にあると思われる。その6m南側でもまた平行して幅広いものを検出しており、前者と呼応した位置で北側にふくらむ。これから推定される区画が、f9区に復原できる。それは隅丸台形を呈し、30m²程の区画となる。Jトレンチ南西隅では上垣端が0.4mのやや幅広い弧を描く畦畔状隆起を検出している。それに囲まれた南西部は周囲より0.2m程一段高くなっており、足跡を検出している。足跡は指先まで判別できる良好なもので、人間のもの他に犬と考えられるものがある。しかしながら歩行経路などが判断できる程に規則的でなく、重複も見られる。

これらの遺構面は灰色系であり、遺構埋土は暗灰色系の粘質シルトで、足跡には砂層が入り込んでいる。

水田に伴うであろう畦畔状隆起と落ち込みの他、ピットと溝を検出している。柱穴状のピットはgライン付近とJ2グリッドの10ライン東側で「L」の字状に分布する傾向があり、径0.1~0.15mのものが多い。一部、柱材が認められた。

溝はJ1グリッド南側で検出している。東西方向のもので2.0~2.3mの幅で深さ0.5mである。断面逆台形を呈し、埋土は上層と下層で大きく2分割される。下層は、H区の第6遺構面で見ら

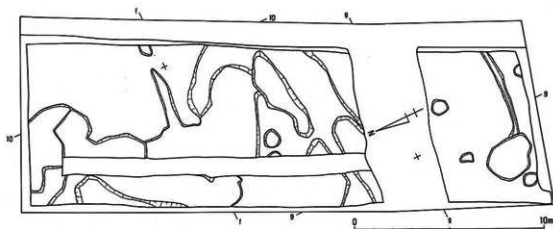


fig.56 J区第6遺構面c 平面図

れたブロック土を多く混入するものであり、共通する。それに対して上層は、再掘削されたと考えられ、灰色粘土を主体とする埋土であり、両者で2段に掘りおろしていることになる。下段の掘削はあまり安定せず、西側では幅0.8mであるのに対して、東側では1.6mと拡がりをもっている。したがって、下段の断面は西側が「V」の字形を呈し、東側は「U」の字形を呈する。当溝の東側は上部の河道と同経路をたどるものと考えられる。

第6遺構面aは、全体に灰色系の粘質シルトが全体に覆っており、J区中央部がややふくらんだ状況で高くなっている。この起伏の軸は、J1グリッドの下面の溝の北側に沿っているものである。また、上部の河道の北側でもあることから、上・下面の両者に関連する起伏である可能性がある。

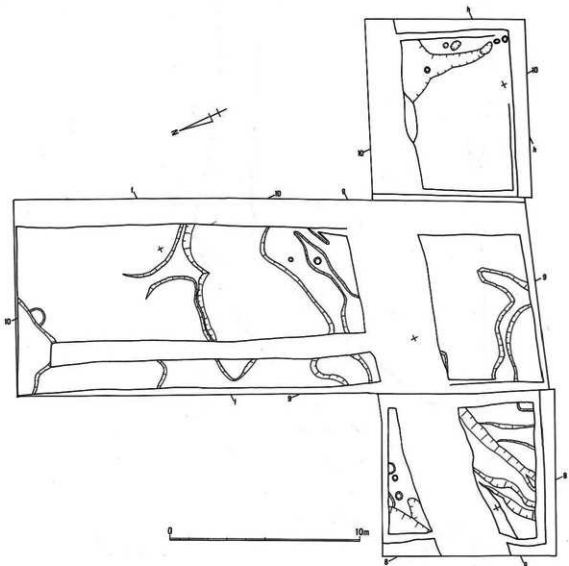


fig. 57 J区第6遺構面b 平面図

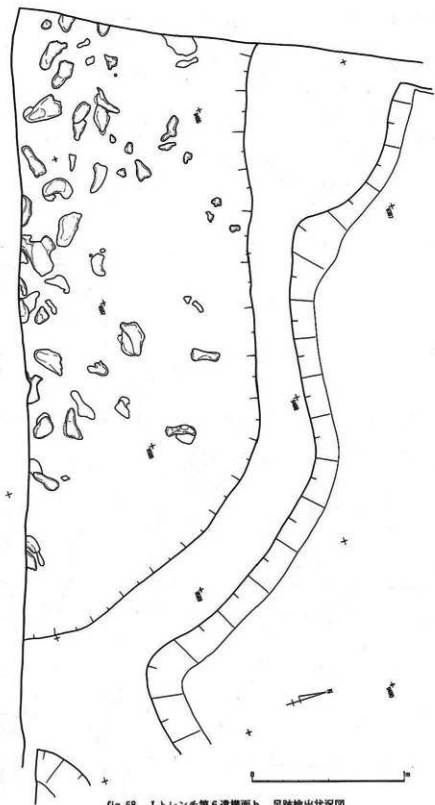


fig.58 J トレンチ第6遺構面b 足跡検出状況図

第6節 弥生時代後期

A. E区北半

E区北半の第5遺構面は、褐色系の砂層が厚く堆積している。その最も砂層が隆起したところは削平を受けているため、あと1m程厚く見積れるかもしれない。砂をもちらした河道の上部が最も高く、E区の南側に向かって下降していく。

大河道 この河道は調査区と直交し、東西方向でeラインからgラインの南5m付近までを範囲とし、幅26.0mを計る。深さは、第5遺構面bから最深部で2.5mを計る。この河道の堆積土の多くが一回の水の流れで埋没したものでないことが土層断面とその溝底の状況において分かる。溝底にはやや円弧を描きながら東西方向に溝状の落ち込みがあり、最低6条を数え、これらをめぐり込んだ流れが同数以上あったと考えられる。うち、最も南側のものは大きくEトレンチ東側では幅6.0mであるが、その西側ではI1グリッドを含め一辺18.0m程の隅丸形状になり、最も深く入り込んでいる。この隅丸形状は水流が巻き込んだためと考えられるが、これには下部の河道が影響しているとともに河道がここで方向を変えている可能性がある。

砂層内よりは、流木、木製品などとともに縄文時代晩期から弥生時代後期までの土器が出土しており、最下層より畿内第V様式古段階に属する壺形及び甕形土器の完形品が出土しており、最上層から出土する土器との時期差はあまり認められない。木製品では、小型の舟形木製品と組み木による椅子と考えられるものが注目される。

立木 河道兩岸には樹木が生育する。特に集中するのは、E1グリッド北側とE4グリッド北側である。いずれも、I区の第6遺構面で見られたような大きいものではなく、小ぶりのものである。E1グリッドでは8本、E4グリッドでは12本を検出している。遺構面は北岸のE1グリッドでは安定しており、小溝が2本存在する。そのうち、南北溝の両側に立木が分布する。南岸では、不定形の溜り状のものがE4グリッドとEトレンチ中央部に向けて集中し、やや不安定な凹凸面を形成している。これはそれらの中に分布している立木に起因すると考える。

E区南端では、先に述べたように、砂層が下降するため、鞍部を埋没させる過程において、遺構面の面数がF区とも増加する。それらは後述するが、ここでは面的に共通する最下面を対象とする。その最下面は安定はするものの、その中央よりやや北側は足跡を検出している。その上部には、立木が生育した状況が認められ、この地点の上部の堆積はかなり乱れる。

第5遺構面aは、大河道の最終の埋没過程において、6~10m幅の河道が4本程、東西方向に検出できる。基本的には、各調査区を覆う砂層の堆積の流れの延長線上にある。それら河道のそれぞれは、第4遺構面の各溝を形成する遠因ともなっていると考えられ、上層遺構でその位置を確認すると、河道Iは溝S D61付近を南肩とし、E区北端につづく。河道IIは、溝S D59・459下層の範囲を上まわるものである。そして、河道IIIとIVは河道I、IIの範囲の下部となる位置に存在する。

B. E区南端、F区

先に述べたように、E区南端とF区の状況は、砂層の高まりの鞍部になっているため、第5遺構面は5面に分かれる。したがって、Eトレンチ南端の第5遺構面eに相当する面は、E区北半の第5遺構面bとなる。

両区の第5遺構面dは、灰色系の砂層、砂質シルトの互層となる層の上面になる。全体に不規則で不安定な面をなす。Eトレンチ南端では、東西方向に自然流路が存在する。

シガラミ 流路は2.0~4.0mの幅でやや弧を描き東側が拡がるものである。南法面は比較的安定し、肩の際に沿って、0.5m前後の間隔で6本が垂直に打ち込まれている。各々は1列に並び護岸的な杭列と考えられる。この杭列の反対側北肩は2.6mに拡がっている。その拡がりの中ほどに杭が24本集中して打ち込まれている。それぞれの杭の根入れは浅く、0.5mに満たないもので垂直方向に打ち込まれている。杭列などの規則性は認められないものの杭群の南側、流路中央付近に横木が5本見られ、その横木の方向は流路北肩と平行している。この杭群はほぼ東西方向にある流路からやや北よりの方向に分岐させる働きをもっていたと考えられる。

この流路両岸には、柱穴状のビットと土塊状の落ち込みが見られる。

F区は、溝と落ち込み、足跡を検出しており、不安定な面である。

F1グリッドは主に小流路状の溝であり、流木が認められた。

F2グリッドは、比較的安定した面を形成し、北西方向に向って下降する。そのやや高くなったところにはわずかに足跡が残る。

F3グリッドは、東西方向の溝と落ち込みが集中するが、不安定な面をなす。

第5遺構面cは、より不安定な面をなし、河道堆積層の起伏をそのまま残す。流木、立木などの存在によって、その堆積層も安定しない。

第5遺構面bは安定した面を形成し、遺構が少量ではあるがまんべんなく存在する。

Eトレンチ南端では、下面の流路範囲が落ち込んでおり(SX10)、その周囲にビットと土塊及び溝を検出した。ビットは5cm程の深さの浅いものと柱穴痕を呈するものがある。土塊は径1.0mの円形のS-S K37や不定形なものがある。溝は南北方向の0.5m前後の幅のものが4本あり、遺存状況は悪いが1.5m程の間隔で平行するようにも思える。これら埋土はやや暗い灰色系の砂質シルトであり、出土遺物はほとんどない。ただ、ちょうど溝S-S D40から西側、土塊S K36上周囲は落ち込んだ状況になり、落ち込みS-S K30を検出しており、その中から出土しているものがある。この落ち込みS-S K30は埋土が暗灰色粘質シルトで西側に落ち込んでいるが、その東肩には、壘形土器2個体分が本来は横位の状態で存在したものが、破碎し、主に北側に散乱したような状況で出土している。畿内第V様式に属するものである。

F1グリッドでは、中央に不定形な落ち込み状の溝があり、その西側では径1.4mの円形の土塊が南北に2基並列する。この土塊両者は上部がゆるやかに拡がり、下部が直に落ちるので、若干のブロック土を伴い、濁った黄褐色の砂質シルトを埋土とするもので井戸ではないかと考え

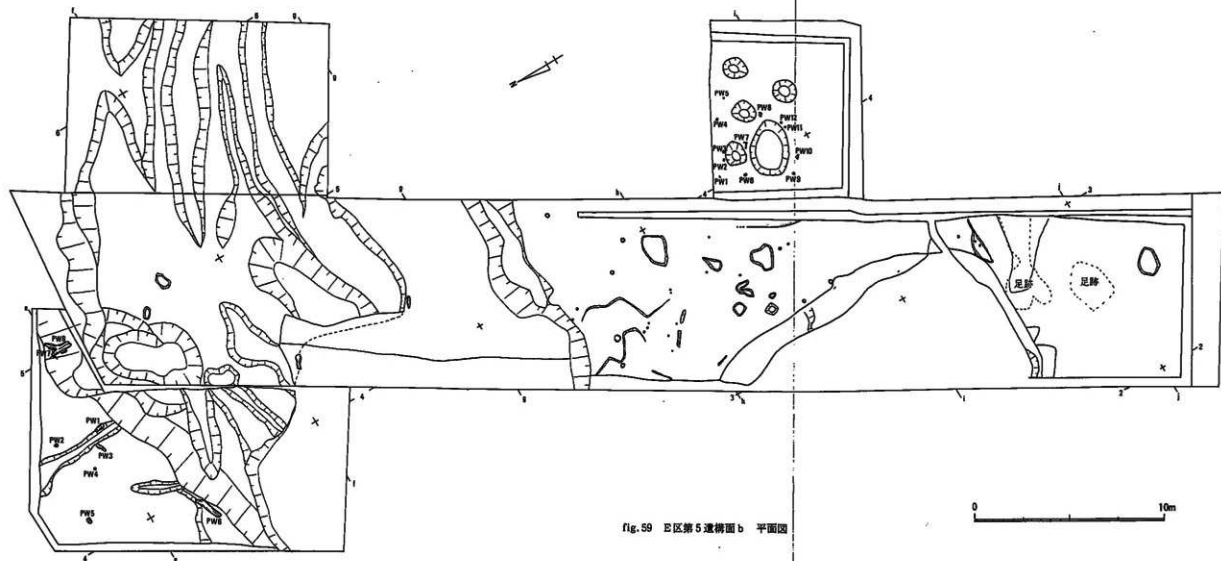


fig. 59 E区第5遺構b 平面図

Tab. 5 E区第6遺構面a～第5遺構面bの立木の樹種(属)

E1グリッド		E4グリッド	
Pw1	Pw5	Pw1	Pw7 ヤナギ
Pw2	Pw6 ヤナギ	Pw2	Pw8
Pw3	Pw7	Pw3	Pw9
Pw4	Pw8 ヤマグワ	Pw4	Pw10 ヤナギ
		Pw5	Pw11
		Pw6	Pw12

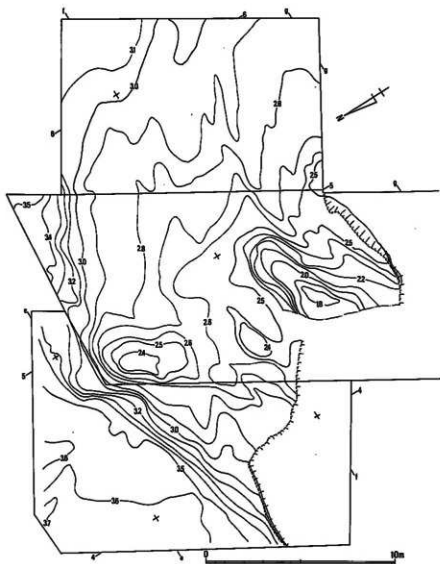


fig.60 E区第5遺構面b 河道平面図 (等高線はメートル)

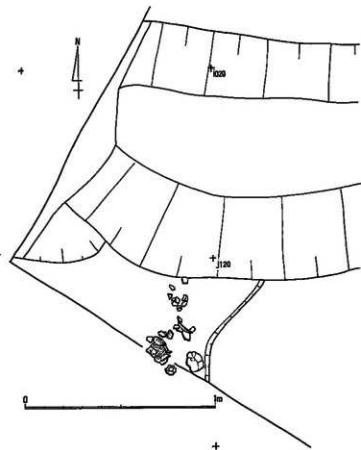


fig.61 Eトレンチ第5遺構面b上 落ち込み8-8 K30土器出土状況図

られる。また、これら土壌が一旦、埋没してから後に、第4遺構面において再度、掘りなおされている。これら土壌間には柱穴1個が見られる。また、これより西側へ谷状に落ち込みが広がる。

F2グリッドでは、北側に北西-南東方向の溝SD209を検出している。幅は1.0m、深さ0.25~0.3mであり、断面は「U」の字形を呈し、上、下層に分かれる。下層は砂まじりで、上層は粘質がかかるが、基本的には両者、暗灰色砂質シルトである。溝中より、土器が出土しているが、主に中央部北肩側に集まっている。壺、甕、高坏形土器が8個体分程、出土しており、これらは畿内第V様式に属するものである。

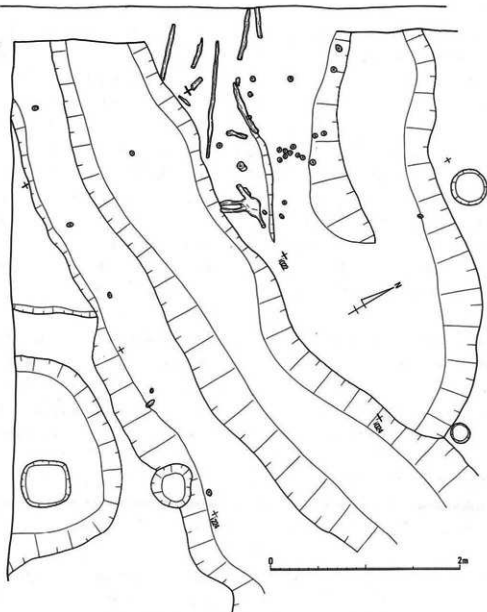


fig.62 Eトレンチ南端第5遺構面d シガラム検出状況図

土墳墓SK202、203 F2グリッドの南西部には、グリッド南側に沿って、2基の土墳墓を検出している。両者とも主軸を同じくし、縦方向に並ぶ。西側に位置する土墳墓SK202は、西側3分の1程が調査区外に出る。墓壇掘り方は検出長2.0mであり、最大幅1.0m、深さ0.4mを計る。墓壇内埋土は、東側小口0.5m程が周囲のベースの土とよく類似した青灰色、黄褐色のブロック土を混入する砂質シルトが入っている。それに対し、中央部は暗灰色のブロックをわずかに混入した周囲とは明瞭に異なる砂質シルトが入っており、植物遺体もその中に含まれている。後者は遺存状況が良好ではなく、割竹状の木材を棺蓋にしたと考えられる木質が、厚さ2～3mm程残っていた。

この棺材の上部は東側が高く、西側に向って相当傾いている。この大きな傾きは棺専用材ではなく、転用材であったことを意味すると考える。また、小口側には、同様な割竹状の木材が墓壇底を8.0cm程掘り込んで樹立した状態で出土している。この小口材は凹面を中央に向け、内側にやや傾けて樹立していることから、先の棺蓋材の傾きで材の端が小口材上部に架けられている可能性がある。もしそうであるならば、棺の高さは0.36mに復原できる。そして棺の湾曲の厚さを考慮に入れて棺長2.0mとすることができる。棺身に当たる木質は検出できなかったので、木蓋土墳墓と呼ぶべきものであるかもしれないが、棺蓋が小口板に架けられて浮いており、空間があるにもかかわらず、その下部で方形の輪郭を確認し、その底面が平坦であることから、厚さ10cm相当の平たい板材が敷かれていたと考えられる状況にある。したがって、棺という密封性には欠けるが、現地での転用材による作り付けの広義の木棺と理解したい。

遺物は、墓壇埋土中より土器細片が出土する他、東側小口より半截した管玉1点が出土している。時期は畿内第V様式に属する。また、管玉出土位置と棺の形態より、東側を頭部にしたと考えられる。

土墳墓SK203は、土墳墓SK202より小型のものであり、その墓壇掘り方は長さ1.6m、幅0.8m、深さ0.5mを計る。墓壇内にあまり余裕なく木棺の痕跡を検出している。木棺の形態は先のものとは異なり、平らな材での組合わせ式木棺と考えられ、小口を両側板ではさみ込む形状のものと考えられる。木棺規模は長さ1.54m、幅0.45mを計り、墓壇上面よりその輪郭を確認している。埋土中より、土器細片2点を出土するがその時期は判然としない。しかし土墳墓SK202の中央の埋土と共通することから、同様な時期と考えられる。

これら土墳墓(木棺墓)に伴うと考えられる関連遺構は周囲では見当らず、同様な時期と考えられる溝SD209も、その方向が異なる。また、土墳墓周囲の地形の起伏などの変化もない。しいて特徴をあげるなら、F2グリッド及びF1グリッド東半部にかけて遺構が希薄であることであろうか。こうした外部施設を伴わずに、主体部のみが散在しているあり方は、Eトレンチの北半にある円形落ち込みSX12、13内にある土墳墓と壺棺があり、層序の関係から第4遺構面を含めてはいるものの畿内第V様式に属しており、地形の鞍部が削平され、残った部分のみ、主体部を検出したのかもしれない。そうであれば、第5遺構面の沖積堆積が安定しだした段階でE・F

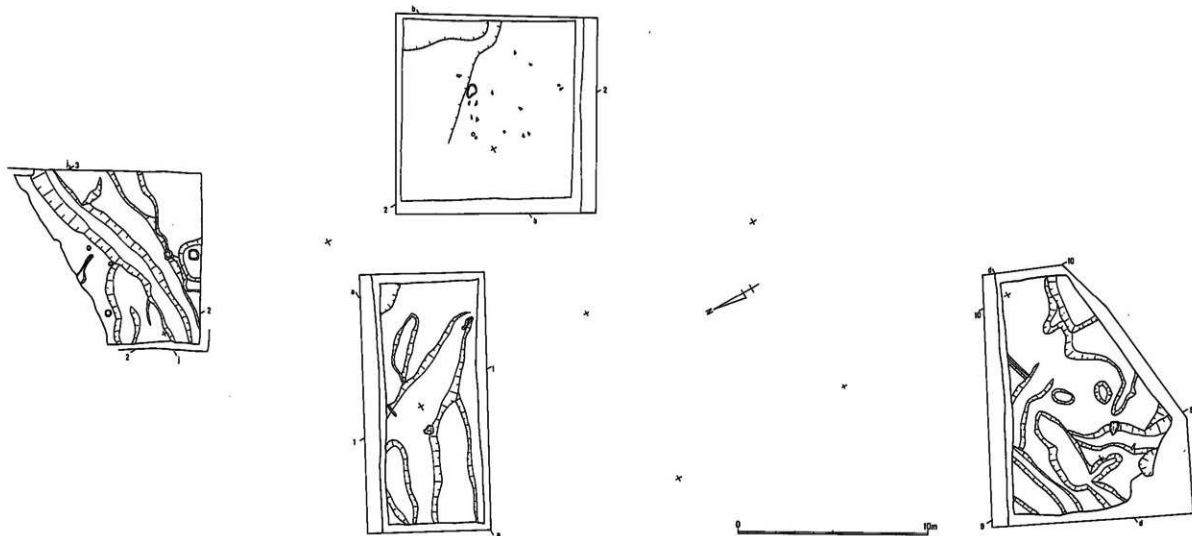


fig.63 B区南半、F区第5遺構面d 平面図

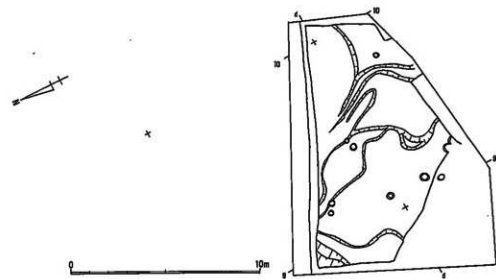
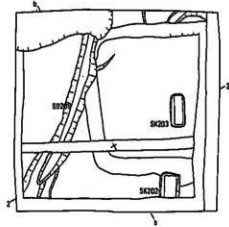
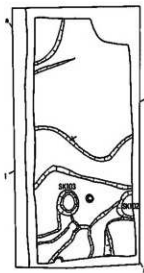
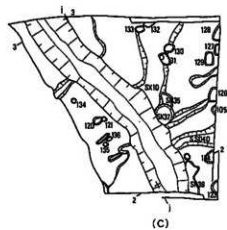


Fig. 64 B区南半(c)、F区第5遺構面b 平面图

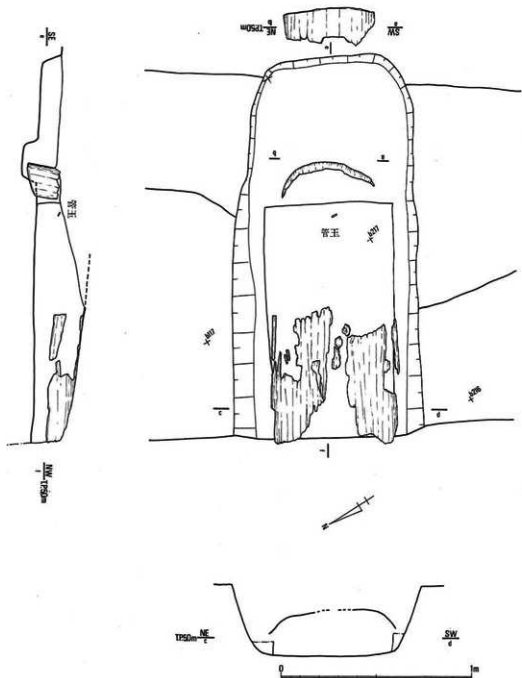


fig. 65 F 2 グリッド第5遺構面 b 土壊基SK202平面、土層断面図

区が墓域として利用されはじめ、庄内期の周溝墓へと連続性を示す可能性がある。

F3グリッドは、上部の周溝墓の影響が残るもの以外の地形の起伏は少ない。北東側にやや下降する遺構面にピットを8個、検出している。ピットはそれぞれ径0.15~0.2mの円形のもので、柱穴状を呈し、2個がセットとなるものは4セットあるが、うち3セットは上層のものである。

第5遺構面aは、沖積堆積の最終埋没状況を呈する面である。淡青灰色系をベースとし、黄褐色系を覆土としており、全体に砂質シルトで構成されている。

Eトレンチ南端とF1・2グリッドのそれぞれは、南北方向に0.4~1.5mの溝が欹状に平行する。これらは深さもまちまちであり、0.05~0.3mのばらつきがある。その中で、最もしっかりしたものはEトレンチの溝S-S D25であり、断面「U」の字形を呈する。その東側には、2個のピットを検出しており、それらのうち溝S-S D25と北側のピットから土器細片が出土している。

Eトレンチ南端の北東側は、溝、ピットの他に円形状の落ち込みを検出している。

F1グリッドもまた、ピットを東側隅に検出する他、中央が北に向かって谷状に拡がる。このグリッドの溝は不定形なものが多い。

F2グリッドは溝群が東半に片寄っている。

そして、F3グリッドは、上部の周溝墓の影響が大きいが、東端で地形が乱れる以外はフラットな状況を呈している。

以上、E・F区では第6遺構面と第5遺構面の境界をなすH・I・J区で見られたような緑灰色粘質シルト層の互層が明瞭に発達せず認識しにくい状況であった。この土層のときは、E・F区、特にE区では、早い時期の河道堆積があり、主河道ともなっていたためと判断でき、粘質シルト層の互層を形成させるほどおだやかな環境になく、また、それら形成を侵食する流れがあったと判断される。そうした状況はH区の北端の層序からその兆候があらわれる。そして、E区北端の大河道付近まで続く。

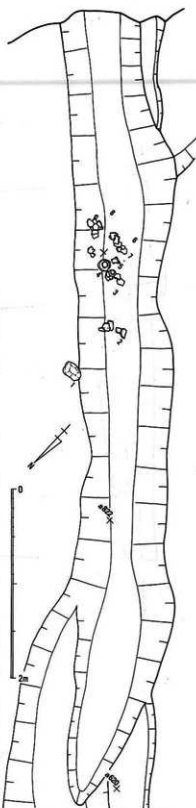


fig.66 F2グリッド第5遺構面b
溝S D209土器出土状況図

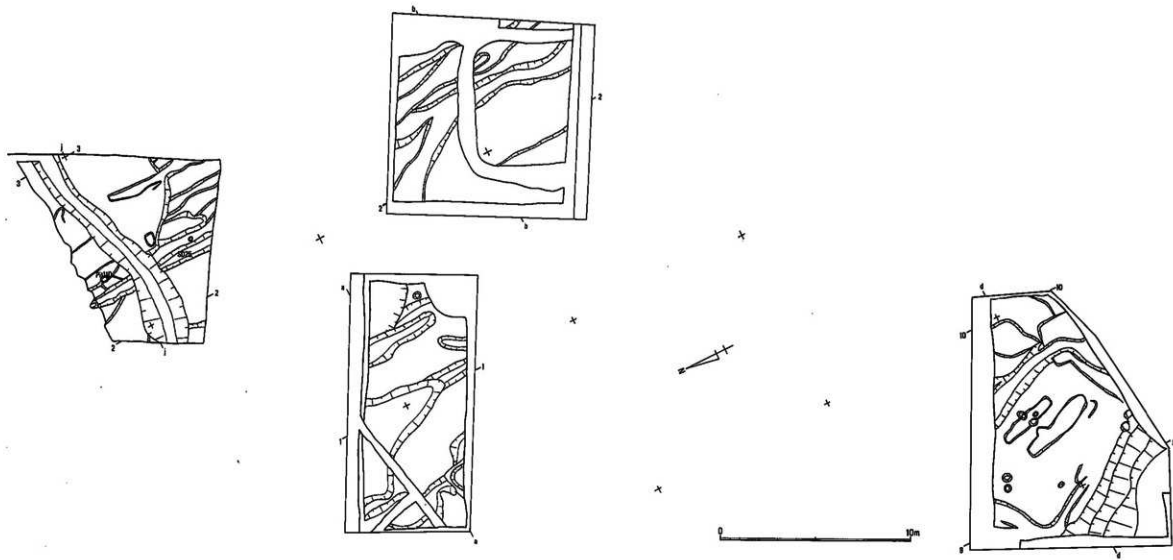


fig. 67 B区南半、F区第5透横面 a 平面图

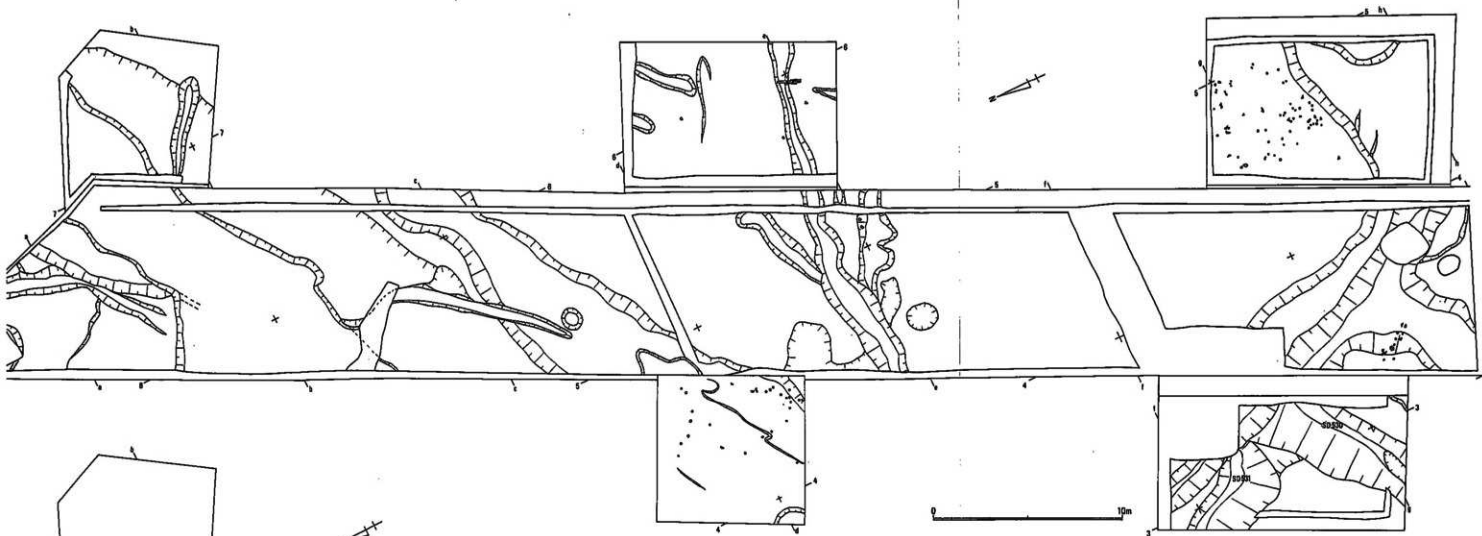


fig. 68 H区第5透槽面 b 平面图

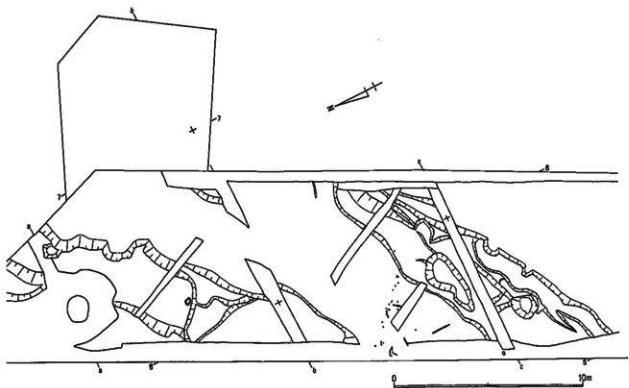


fig. 69 H区北半第5透槽面 a下 平面图

C. H区

H区における弥生時代後期の堆積は、E・F区に比べおだやかである。その堆積砂層の厚さは、0.7~0.9mであり中央より北端までの下端が平坦であることも手伝ってか、比較的安定した層序をなす。これは、E区の微高地の形成とI区の河道堤防にはさまれた環境下での堆積作用の結果であると考えられる。

第5遺構面bは、先の第6遺構面aの各遺構が緑灰色粘質シルト層の互層が全体を覆った状況である。南端は下面の大畦畔や方形周溝基の隆起が残り、複雑な起伏を呈している。その起伏の一部、g3区北西部では人間の足跡列を検出し、傾斜地の昇降状況が分かる。

足跡はこの他にも、H6グリッドの北側の一段落ちた平坦地やH3グリッド及びHトレンチ北端の流路底平坦地において検出している。いづれも、深さが5cm未満であるため、良好な遺存状況とは言えないが、Hトレンチ北端流路下面については、東西方向に何回も往復した歩行経路が読みとれる。

こうした粘質シルト層の上面には、河道堆積を示す砂層が堆積するのであるが、E区と同様に一度に堆積したものでないようであり、上下に2大別できる。下半の堆積状況は、その流路底が粘質シルトを多少浸食しており、それにより最低、8度は流路を変えたことになる。これらは上部の砂層堆積によって、南から北へ移動していったことが知られる。そして、それらの流路方向は主に東西方向から北東-南西方向に傾いていったと推察される。上半部はH区の北側と中央南側の2本の流路となるが、最終的には北側のものに限定される。砂層中には流木にまじり、杭及び木製品が出土する他、畿内第三~V様式の土器を含んでいる。

H区の北半で、最終的な流路となる地点の検出面を第5遺構面a下としているが、その流路は溝SD80最下層として検出し、断面皿状を呈する幅13.0mのもので、深さは0.8~0.9mである。北東-南西方向に比較的、直線的にのびる流路底の南西側のb区ではシガラミを検出している。溝SD80最下層シガラミ 6.0mの間に約40本の杭列を検出しており、溝SD80に直交して打ち込まれている。中央部が最も杭の根入れが深く、1.2m程打ち込まれる。杭はほとんどが直立しているが、根入れの深い部分を中心として、南西側に斜め方向に打ち込まれた杭を3本、検出している。ちょうど、この地点から南東法面まで砂州状に砂が残っており、これより南西側は溜り状で円形気味に落ち込み、灰色系の砂質、粘質シルトが堆積している。この土中よりは杭、木製品、土器が出土しており、畿内第四、V様式に属するものである。

さて、このシガラミであるが、水流の攻撃面は直立して打ち込まれた北東側の列であったと考えられる。また、中央部の南西側に見られる斜めのはそれらの控えとして自立させ、最も杭列の強度が必要とされた地点であったと推定される。これらの状況から、当シガラミは水の方向を変え、取り水したのと考えられるが、そこから送り出される水に対する付属施設の示唆的なものは本調査区では見い出せなかった。

第5遺構面aは、H区中央付近から北側では、E区南端、F区北半と同様に平行溝を検出して

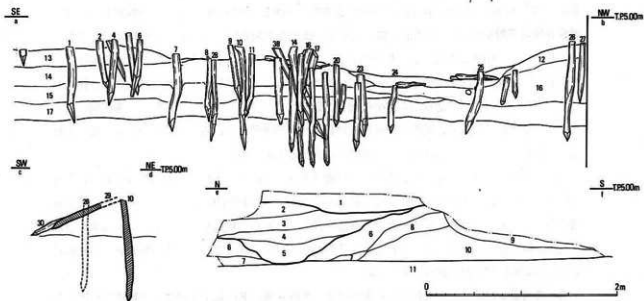
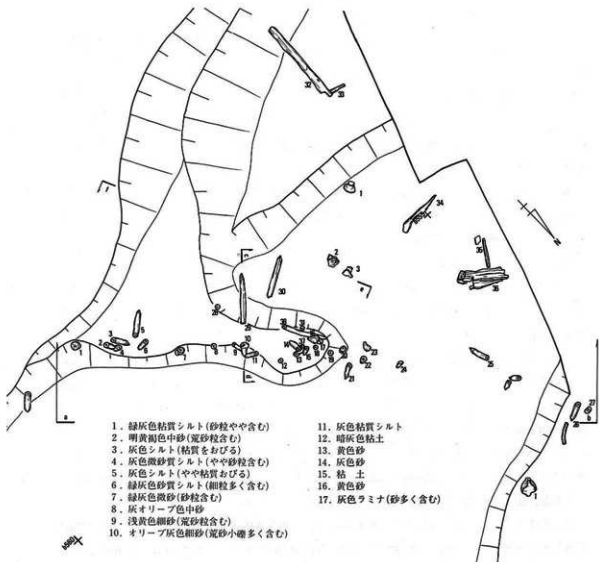


Fig. 70 Hトレンチ第5遺構面 a 溝SD80最下層シガラミ平面、立面、土層断面図

いる。ただ、H区のもは埋土がシルト系ではなく砂層が主体である。溝S D80の埋没において、北東-南西方向に0.5~3.0m幅のものが4本平行する。うち、下層1と下層2・3と呼称するもののうち、中央に位置するものは幅広く主流路となっており、溝S D80最下層のほぼ直上にあたる。H2、3グリッドでは南東側の主流路と下層1の延長が溝S D280・380となつてつながる。主流路の状況から、最下層のシガラミはその上部に基本的には影響を与えていないが、その背面南西側の中層1の流路には少なからず影響している。また、主流路が、第4遺構面北端の溝群へと継続していることから考えると、下層1及び下層2・3はその主流路の両岸に土堤状に起伏した外側背面に形成した小流路と理解されるかもしれないが、土層の状況よりその上部を復原するのは難しい。

また、溝S D80下層1ではHトレンチ中央付近、北西側肩口上に完形品が倒立した状態で出土している。これは畿内第V様式に属するものである。こうした完形品1個体が散発的に出土する状況は溝S D80全体に見られる傾向である。

土壌S K70 主流路の南東岸の法面、b6区においてはほぼ正円形の径2.0mの土壌S K70を検

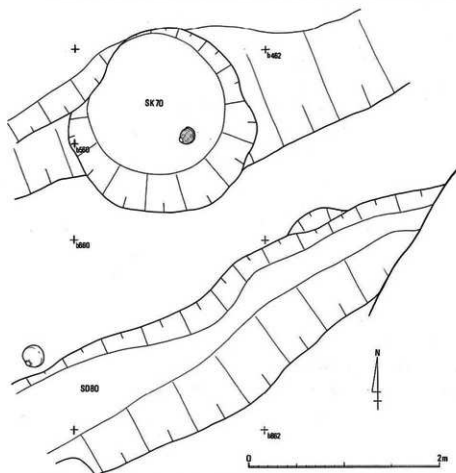


fig. 71 Hトレンチ第5遺構面 a 土壌S K70及び溝S D80下層1土器出土状況図

出している。埋土は、やや灰味がかかる黄褐色の粘質がかった安定したものであり、断面逆台形を呈する。深さは0.4mであり、土壌底中央やや南西よりに甕形土器の完形品一個体がこれもまた倒立して出土し、溝S D80下層1上と同様な時期である。

H区では、溝S D80下層1より南東側でさらに堤防状の高まりがあり、それを隔てて、H2グリッドの溝S D220からHトレンチを経て、H3グリッドの溝S D315に連なると考えられる不定形な落ち込み状の溝を検出している。この溝沿いから南側にピットが点在する。これらのピットの大型のものは上層からの影響があるが、小ぶりのものは掘立柱の柱穴と考えられる。ただ、後者もまたこの面よりの掘り込みかどうかは一考を要する。

柱穴 H区中央の柱穴群は、第5遺構面aの微高地上に集中する傾向を示すが、第4遺構面dと接することから、両者層位的にいずれに属するかは判然としない。ただ、それらの中には、柱根を良好に遺存させるものがあり、J区において明らかに第5遺構面に属する柱根もあり、それらはいくらかは当該面に崩らせてもよいものが含まれているものと考えられるが、とりあえずは第4遺構面において詳述する。

H区南半は全体に南側にゆるやかに下降し、I区との間での鞍部を形成するが、比較的安定した面である。

H5グリッドでは西側に向かって遺構面が下降する。H6グリッドでは、ゆるい落ち込みが2ヶ所あり、その南側に柱穴状ピットを検出しており、南東隅の4個については1間×1間の建物となるかもしれない。その場合の柱間は、東西3.0m、南北2.0mとなる。

以上、H区における第5遺構面は、一様な砂層堆積をなすが、E区北半ほどの量ではなく、E区南端のシガラミ同様に、H区北半のシガラミにより、流路を制御しようとした人間の動きが把握でき、両地点は第4遺構面に至っても制御され、継続していく。こうした流路の固定は、第6遺構面と第5遺構面の間にある緑灰色粘質シルト互層が覆う段階で、固定的であったH・I・Jの3地区を一旦、放棄したが、砂層がある程度埋没した時点で再び手を加え、生活面を復原していった証と考えられる。その営みの放棄は、E区砂層の上下の土器の時期差がほとんど認められないことから、非常に短期間であったと考えられる。

D. I区

I区もまたH区同様、緑灰色粘質シルト層の互層上に0.7mの厚さの砂層が覆うが、H区と比べ、下面には不規則な起伏が全体にある。

第5遺構面bにおいて、第6遺構面の起伏が大きく影響するのは、北端の溝群、南半の河道10埋没後の隆起とその両端の大河道兩岸である。砂層の堆積は、この両者の高まりからはじまる。次に、その間の鞍部を砂質シルト、砂で埋没させている。そして、最終的にはIトレンチ南端及びI3・4グリッドを貫くようなかたちで東西方向に流路が固定される。これは、第4遺構面においても継続していく。

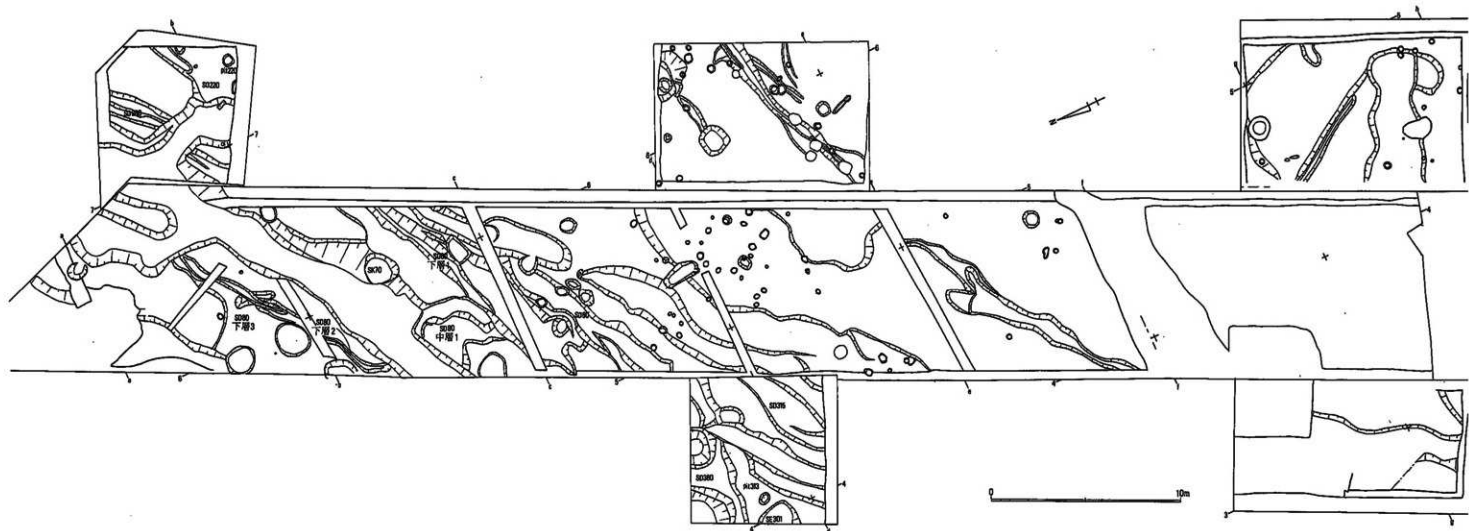


fig. 72 H区第5层楼面 a 平面图

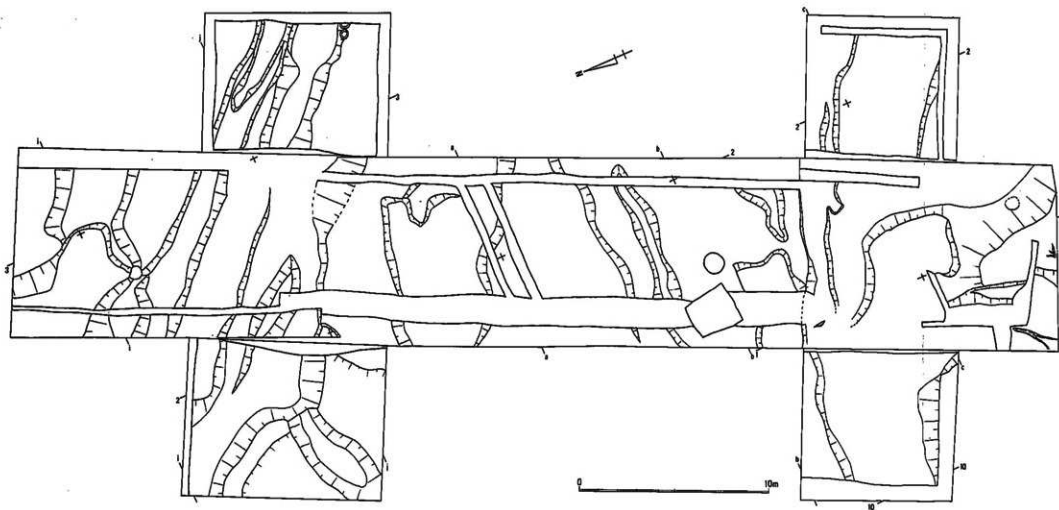


Fig. 73 I区第5道横面 b 平面图

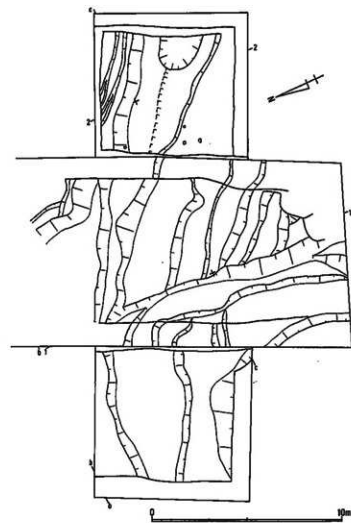


Fig. 74 I区第5道横面 a 平面图

こうした堆積が、上面に影響するのは、E区、H区ほど大きくなく、わずかにI区中央の溝状の落ち込み、上層にあたる河道底の落ち込みとI1グリッドの西側における東西方向の溝を認めるにすぎない。

第5遺構面aの顕著な遺構は、I区南端の河道のみである。この河道は上部の第4遺構面の河道I・IIの影響が激しく、その全容は計り難い。その残存部分で推定すると幅は約12.0mとなる。方向はIトレンチとI4グリッドでは北西-南東方向であるが、I3グリッドでは河道底の状況から、東西方向に屈曲すると考えられる。しかしながら、北岸上部がIトレンチ東側で南北方向に屈曲することから、東西、南北の両方向に分岐し、主流路が東西方向になるのか、西側で河道幅が大きくなるのかという可能性も持っている。河道内からの出土土器は、畿内第V様式のものが多く、

I区における弥生時代前期より当該遺構面すなわち後期までは、河道範囲が幅50mをこえる幅広い中で流路を平面的に北から南へ移動させていたが、第5遺構面aよりは、河道幅が固定され、古墳時代全期間を通じて垂直方向に移動継続していく。ただ、いずれにしても、河道が限定された中で弥生時代前期から古墳時代後期まで、人間の何らかの介入の跡をたどれ、それは維持、管理を伴ったと考えるが、これだけ長期に及ぶ河道域の存続は、河内平野沖積地において特異な存在である。

E、J区

J区の第5遺構面は、砂層が顕著でなく、砂層、砂質及び粘質シルトが交互に約1.4mの厚さで堆積し複雑である。H・I区で見られた緑灰色粘土層の互層は明瞭な層序をなさず、互層間に砂が多く入り込んで、その層序の連続性を形成しているものと考えられるが、調査区が分断されるため、明確にはしがたい。

J区第5遺構面cは、第6遺構面の粘質シルトをベースとしており、これを切り込んだ河道がJ区の南半を占めている。

河道 河道は、上部と下部で大きくその形状を異にする。上部はなだらかな傾斜面で下降し、断面はゆるい「V」の字形を呈している。それに対して、下部はほぼ垂直に肩が落ちており、「コ」の字形を呈しており、総じてロート状の断面を呈する。この河道の上部の幅は、最大13.0mを計り、下部は3.0~4.0mである。

この河道は東西方向を軸として、J1グリッドでは下部のほとんど、Jトレンチでは南半部にほぼ全容を、J2グリッドでは南半部を検出している。これらの中でJ1・2グリッドでは、河道底より上へ0.4~0.5mが弥生時代前期面以前の砂層となっており、この層がえぐられオーバーハング気味になっている。そして、下部の垂直に落ちた法面がやや傾斜面をもった時点で、粘土塊がその傾斜面に沿って帯状に集中している。

その粘土塊はJ1グリッドとJトレンチにおいては北側法面に多く、J2グリッドでは片側の

みしか分からなかったが、南側法面が多い。この粘土塊群は、おそらく下部下半の水流が砂層を浸食し、オーバーハングした際に、上部の粘土及び粘質シルト層を板状に浮き上がらせ、その浮き上がった粘土板が崩壊、転落したものと考えられるが、それらが板状を呈さないことに関しては、その粘質系土の崩壊が当初は河道中にたれ込み、粘土の乾燥が進んで次々と分離、倒壊したものと推測される。部分的には、そういった過程を示すであろうものが認められる。それはひび割れが分離しながらも板状に連続するというものである。河道内よりは、畿内第IV様式に属すると考えられる甕形土器片を数片出土するのみでありそれよりは下る。また、この河道は、河道底が下位の砂層中で終わることや比較的平坦であること、河道軸が直線的であることなどから、河道形成にあたっては人間の手が介在したと考えられる。

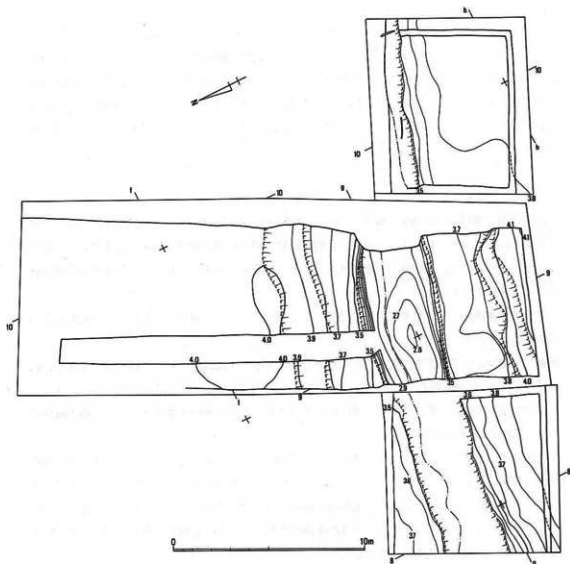


Fig. 75 J区第5遺構面c 河道平面図（等高線はメートル）

この河道の北岸沿いはややふくらみをもつがそれほど顕著ではなく、平坦に近い。また、その関連遺構も検出しえなかった。

河道が埋没した段階で河道直上が最も隆起し、その上に粘質シルト層が被り、北側に向けて下降する。この下降が北側の調査区であるI区の河道10の南側の落ち込みに連続するのであれば、J区におけるこの第5遺構面cはI区の第6遺構面b、cに対応する可能性がある。また、第5遺構面c上とした面は、下位の河道起伏の影響がなくなり、淡青灰色の細かい砂層をベースとして平坦な安定した面を形成するが、これは上記のように考えると、I区の第5遺構面aと対応するようになる。

第5遺構面c上では、砂を削り出した幅2.0mの畦畔状のものを東西方向に検出している。この畦畔状の隆起上坦面西側には、隅丸方形形状のピットがある。また、その北側には、隆起を削り出す際に掘られたと考えられる幅0.5m、深さ0.1mの溝が畦畔状隆起に沿って存在する。

第5遺構面a、bの両面は接近して存在し、砂質がかった粘質シルトをベースとし、若干の起伏があるものの比較的安定した面を形成する。ここでは、第5遺構面aについて中心的に述べることとする。

第5遺構面aは、当該面を覆う厚さ0.3~0.4mの砂層の河道堆積による流路底の痕跡が刻まれたものと小溝及び落ち込み、ピットがある。流路底の痕跡は、9ラインの東西に平行した幅1.0mの溝がそれに相当すると考えるが、西側が当初、溝として存在した可能性がある。これと直交して、0.6~2.0mの幅の西側がせばまる溝がある。落ち込みは、J区南半の10ライン付近から東側に落ちるもの及びJ1グリッドの北西隅から全体に落ちる大きなものと、J区北側のf9区に不定形な小さなものがある。ピットは、J1グリッドとJ2グリッド北西側に9個見られる。それらは、径0.3m前後のものが多いが、径0.15~0.2mの小形のものもあり、柱根を検出している。ただし、J1グリッドの南北溝西側沿いに検出したものは杭列の可能性もある。

第5遺構面bでは、J2グリッドにおいてピットを検出している。ピットは上面よりのものを

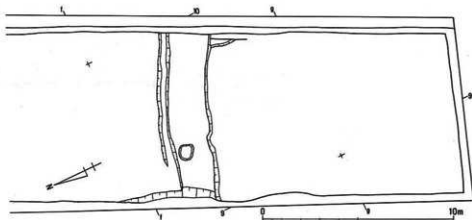


Fig. 76 J1グリッド第5遺構面c上 畦畔状遺構平面図

のぞくと4個であり、径0.15~0.2mの小形のものであり、うち東側に離れている一個のみ、長さ10cm、径10cmの柱根を検出している。この面より出土の土器は細片が数点のみであるが、畿内第V様式でも新しい段階と推定される。

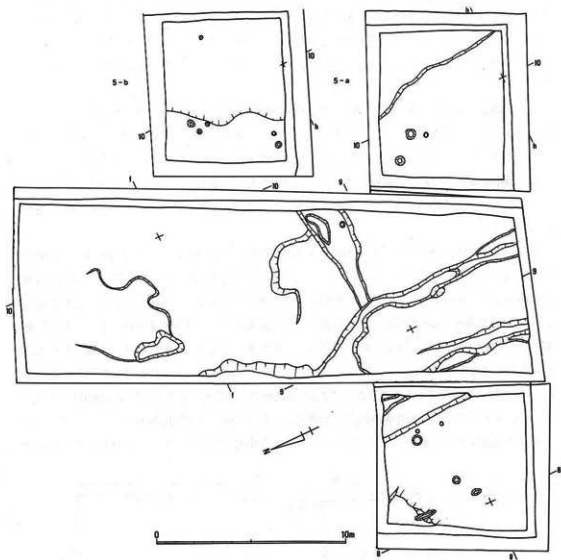


fig.77 J区第5遺構面 a・b 平面図